393
Sa29
ウ

0056558000

0056558-000

３９３－Ｓａ２９ウ

現代戦争論

酒井鎬次・著

日本評論社

昭和１７

AJD

25 781

32473
403
な
393
SA29

陸軍中將
酒井鎬次著

現代戰爭論

政治全書
1

日本評論社

945
271

序

今や世界では史上未曾有の大戰爭が行はれてゐます。そして我等日本國民は大東亞戰爭に於て　御稜威の下わが　皇國の必勝を確信し、物心兩方面のあらゆるものを捧げ、必死の努力を傾注してその目的達成に敢然として邁進してゐます。

かかる時代に生きる我等國民はまづ戰爭なるものを適確に認識し、殊に現代戰爭を正しく諒解し、各自の職域に於て最も强力なる奉公にいそしむことが必要と考へられます。

この小さな著述は、一般國民諸君を對象とし、叙上の目的を以て書かれたものです。そして記述の態度としては、現下時局の重大さに鑑み、努めて學問的に、敬虔に、冷靜に、確實なる基礎に立脚し、世界一般に戰爭が如何に準備せられ、實行せられ、又終局されるかを大觀することに重點を置きました。

そこで、大きな破壞を生み出しながらも、新たに大きな建設をなし遂げるこの戰爭なるも

のに對して、古來の思索家が、その妥當性やその本質を熱心に究明せんとしたことは當然です。つまり哲學の分野に於て戰爭哲學が生れる譯で、これは簡單ながらも一應覗いて置くべきことでせう。

更に戰爭行爲を對象として、これを知的に認識し、目的と結果との關係を學的に研究して統一的法則を見出さうとする、戰爭理論も回顧して置く必要がありませう。

人類の社會生活が始まると共に戰爭も行はれ、平和と戰爭とが相交錯して歷史を造り今日に至つてゐます。つまり戰爭も歷史と同樣時代と共に進步します。少くも時代と共に變化します。この變遷の跡を振り返つて見ることは極めて必要と思はれます。即ち戰爭史論となる譯です。

以上の樣に理想、理論、實驗の三方面から戰爭を見ることは基礎的な仕事です。私は第一編戰爭概論で極く大雜把にこの研究をして見ました。しかしこの著述の主な目的がここにありませんから勢ひ不充分な點が多々ありますが、これは現代戰爭を諒解する上から極めて重要なことと考へられます。

第二編現代戰爭論では、まづ現代戰爭を大觀し、所謂總力戰の因つて來る所を簡單に研究し、次でこの總力戰が世界各國に於て一般的に、如何に準備せられ、實行せられ且つ終結せられるかを學問的に記述して見ました。

然るにこの總力戰の研究は、前世界大戰後に於て各國に稱道せられ始めたもので、その理論にしてもその經驗にしても學問的には未だ充分の歲月を經てゐぬ憾みがあります。

從つて私は努めて世界各國の文獻を引用し紹介することに努力しましたが、それは結局餘り多くを望むことが出來ず、私個人の研究を不充分と認めつつ附け加へることも多いことになりました。

何れにしても此等の研究は彼を知り己を知るといふ立場から、世界各國が如何にこれを取扱つてゐるか、又世界共通の理論として如何にあるべきかといふ範疇を出て居ないことを再びここにお斷りして置きます。

從つてわが　皇國として如何にこの總力戰を行ふべきやの問題には一切觸れませんでした。しかし此種の研究が極めて必要なことは申す迄もありませんので、終生の事業として私はこ

れに從事したい念願であります。

最後に附け加へて置きます。本書は廣義の戰爭を世界的に俯瞰したもので、その最も重要な部門たる作戰用兵のことに就ては、別に現代用兵論に讓り本書から省きました。又廣義の戰爭に關係の深い、國防國家論、軍政論等も別個の研究に讓り直接觸れませんでした。

昭和十七年七月

神宮外苑わきの書窓にて

陸軍中將　酒井鎬次

本書に對する御感想又は誤謬の御指摘等は東京市四谷區元町五九　著者宛に願へれば幸甚です。

目次

第一編　戰爭概論

第一章　戰爭哲學……三
第一節　戰爭否認の哲學……五
第二節　戰爭肯定の哲學……七
第二章　戰爭理論……一〇
第一節　廣義の理論……一一
第二節　狹義の理論……一四
第三章　戰爭史論……二四
第一節　民族國家の創成時代……二五
第二節　世界的國家の試練時代……三三

第三節　混沌時代……四一
第四節　近代國家時代……四六
第四章　綜合的戰爭論の主張……五四

第二編　現代戰爭論

第一章　現代戰爭の大觀……六一
第一節　絕對戰爭と制限戰爭……六一
第二節　短期戰爭と長期戰爭……六九
第三節　聯合戰爭……七五
第四節　現代戰爭の趨向……八〇
第二章　總力戰の準備……八四
第一節　戰爭本質への回顧……八四
第二節　戰爭本質と總力戰との關係……八九

第三節　總力戰準備の三大傾向……九二
第四節　總力戰準備の大綱……九九
一　總　說……九九
二　目的の決定……一〇五
三　情勢判斷……一〇九
四　戰爭計畫の必要……一一一
五　戰爭計畫一部の實施と修正……一一四
第五節　戰爭計畫……一一七
一　總　說……一一七
二　開戰條件……一一八
三　武的計畫……一二一
四　文的計畫……一二四
第六節　戰爭計畫策定機關の實例……一四三

一　ソ　聯……一四四
二　佛　國……一四六
第七節　戰爭計畫と高度國防國家……一四八
第八節　戰爭計畫の豫測と修正……一五〇
第三章　總力戰の實行……一五五
第一節　戰爭指導機關の必要……一五五
第二節　和戰の決定……一六〇
一　準戰時狀態に於ける戰爭計畫の實行……一六〇
二　情勢判斷の必要……一六二
三　開戰條件の成否と和戰の決定……一六八
第三節　戰爭の遂行……一七三
一　一般の觀察……一七三
二　戰爭計畫の實行と變化……一七七

三　戰爭目的に應ずる犧牲と戰爭遂行力の關係……一八六
四　絕えざる積極的意志と現實の確認……一九一
五　情勢判斷の必要と戰爭目的の檢討……一九二
第四節　戰爭の終末期と休戰……一九七
一　現代戰爭に於ける終末期の趨勢……一九七
二　休戰と媾和との關係……一九八
三　休戰條約とその實行……二〇〇
第四章　媾　和……二〇三
第一節　戰爭目的の達成と新情勢判斷の關係……二〇三
第二節　媾和準備と會議……二〇四
第三節　平和條約の實行……二〇九
第五章　戰後の經營……二一〇
第一節　新國策の確立……二一一

第二節　復興と躍進……二二
第三節　國民精神の作興……二三

第三編　結論

第一章　現代情勢の認識……二七
第二章　總力戰規模內容の擴大……二八
第三章　戰爭の計畫性……二二〇
第四章　總力戰機構と人的要素……二二
第五章　總力戰より見たる皇國の特異性……二六

第一編　戰爭概論

第一章　戰爭哲學

戰爭哲學とは戰爭の本質、意義、その妥當性の考究をいふ樣です。一體戰爭哲學なんぞといふものが成立し得るやも一應考究して見るべきでせう。

人々により哲學に與へる定義も色々ある樣ですが、哲學とは「人生の理論的考究の學」といへませう。近代哲學では殊に「宇宙乃至人生の起源本質に對する思索」に傾き、最近では「人生全體の學」といふ傾向を持つ樣です。

然るに戰爭は人類の華やかな歷史上に於ける嚴然たる事實であります。して見ればその本質、意義、その妥當性を考究することは哲學として成立すべきです。

私はかう考へます。元來科學と哲學、延て宗教とは、相對するやに考へられ勝ちですが、人類知識の發端に於ては、眞理を愛し、知識を求めて止まない人間の本性上、同じ根源から生れた樣です。廣い意味の科學は自然科學と人文科學とに別れ、哲學は後者に包含せられて

良い譯です。しかし自然科學が如何に發達したとはいへ、まだ宇宙間の諸現象を總て理論的に說明しては呉れません。

科學が客觀的、經驗的、分析的であるに對し、到底これだけで滿足の出來ぬ人間の本性が迸つて、主觀的、精神的、綜合的に哲學に向ふのも當然のことでせう。併し科學が事實を基礎として歸納的に大自然の理法に到達しようとする安全性に對し、哲學はどうも瞑想、直觀の奔流に任せて一躍演繹的に事物を律しようとする危險性のあることも認めねばなりません。

併し哲學も段々確實な事實を基礎とし、その思想系統を組織し、科學によつて得た知識を大局上から聯絡統一して行く傾向にある樣ですから、哲學は所謂「諸科學の科學」となりつつあるでせう。

この樣な考への下に、戰爭哲學の諸說を覗きながら、簡明に研究して見ることにします。

戰爭の本質、意義、その妥當性は相互に關聯することの深い問題ですから、私の企てる樣な短い研究では、綜合的に取り扱ふより外に途はありません。學問的には甚だ不滿足で又危險性を伴ひますが、洵に止むを得ぬことです。

此等の問題は宗教的又は哲學的思想家、詩人、政治家、軍人、歷史家、國際法學者等によつて隨分古代から取扱はれ、殊に近時では自然科學者や社會科學者の研究題目となつて居るのは欣ばしい傾向です。

宗教上では、佛教も基督教も四海同胞の平和主義を稱へ戰爭を否認してゐる樣です。獨り回教が戰爭を肯定してゐるのは異色がありますが、何れにしても宗教の性質上その取扱ひ方は哲學以上に獨創的、主觀的でありますから、ここでは深く立ち入れないのが殘念です。それにしても平和主義を主唱した二千年前の素朴な宗教の教理が後の世になつてその使徒により色々に理解せられ、却つてそれが戰爭を激發してゐることは、我々に色々の意味深い示唆を與へて居るではありませんか。

第一節　戰爭否認の哲學

哲學的思想家の一部が古來戰爭否認の態度をとつたことも注目されます。

西紀第一世紀ローマのストア哲學派のセネカが、「個人の殺人は罰せられるに拘らず、民

族國家に對する殺人が却つて名譽と呼ばれるのは何んといふ沒理であらう。戰捷の熱望は痴呆である。戰捷者は洪水地震よりも怖ろしい人類の慘禍である」と述べたり、又東洋では西紀前第五世紀老子が、自然の大道に則り、虛靜無爲を理想とし、一切の人爲的施設を退けようとして、「小國寡民、什伯の器有れども用ひざらしむ。民をして死を重んじて遠く徙らざらしむ。舟輿有りと雖も之に乘る所無く、甲兵有りと雖も之を陳ぬる所無し」と述べたのは、高遠な理想の下に復古主義をとり、過去の黃金時代を回顧した思想とも見るべきでせう。

中世以後にも戰爭否認の思想はあります。例へばモンテーニュ、パスカル、ヴォルテールの樣に、人道主義から人類相殺の愚を罵る態度の人々もあり、或は又シュリーやサンピエールの樣に法理的に一種の國際聯盟を作つて戰爭を絕滅しようと考へた人々もあります。

併し何んと言つても西紀一七九五年カントによつて發表された「永遠的平和の爲に」は有名であります。委しくは我邦にも紹介せられて居ますから極く簡易に要約しますと、カントは、人類の社交性、協調性を認めると同時に、反面その非社交的衝動、排他的衝動をも認め、人類は一面理性的であると共に他面一種の獸類でもあり、彼は人格の神聖を意識しますが反面人間の不神聖をも認めます。それ故カントは戰爭を以て道德上の惡と斷じ、永遠的平和を以て人類の理想と主張します。

カントはその理想を實現する爲三つの條件を提示し、第一に、國家の立法權が行政權と區別せられ、國民の代表を通じてそれが人民の手にあること、第二に、世界的國際聯盟が成立すること、第三に、世界公民的社會又は世界一家主義の實現することの必要を主張します。併しカントは、人類の性情から見て、この樣な條件の永遠的平和も結局達成の出來ない理念であるとし、人類に可能なことは、この理念の完全な實現ではなく、それへの不斷の接近であるとして居ます。つまり永遠的平和が實現されるや否やは問題ではない、我々は實現されるものかの如く行動しなければならぬ、といふのがカントの主張であります。これに類する思想は近來でも散見するのは御承知の通りです。

今度は戰爭肯定論を覗いて見ませう。

第二節　戰爭肯定の哲學

西紀前第六世紀希臘の哲學者ヘラクライトスは、萬物は流れるといひ、宇宙萬物は皆流れるから、互に相反對し爭鬪し變化する。そこに物は生成する。即ち戰爭は萬物の父で、それが宇宙萬物の變化生成の眞相であり、結局それが全體としての窮極的調和、反對矛盾の保持解決者たる神に歸着する前提である、として居ます。

丁度同時代の思想と思はれる支那の易經にも戰爭に就てこそ述べてはゐませんが、どうやらこれに似た思想がある樣です。つまり天地萬物の意力といふものを認め、その意力は變易と交易とによつて現はれ、天地萬物の意力と人事百般とは交感し交渉する。この動きによつて萬物が決せられる、と主張します。勿論易の解釋は多樣であり、我國には研究の大家も居られることですから、著者の樣な素人の解釋は間違つてゐるかも知れません。

次は獨逸の生んだ十八、九世紀に亙る哲學者ヘーゲルです。これも我國には研究の大家が居られますから、著者の樣な素人が要約するのは冒瀆でありませう。ヘーゲル哲學の核心は、絕對的理性の歷史的乃至は論理的發達であると一口に言へる樣です。この理想主義の哲學者は、從來餘り極端に主觀的に傾いた理想主義を、一層客觀的に引き戻し且發達させたとも考へ得ませう。しかも彼は主觀本位の立場を守り、一切を理性の開發と觀ましたから、ヘーゲルに至つて理想主義哲學も一種發達の頂點に達したともいへませう。

ヘーゲルは戰爭を批判し、凡ての史實は善であるといふ見解からこれを是認してゐる樣です。即ち事實は客觀である。天下の公である。是非は主觀である。一人の私である。私を以て公を沒することは出來ぬ。是非はそれで事實を動かすことは出來ない。而して最强者の主張は確乎として最善である、と主張して居ます。

以上述べました所は、所謂瞑想、直觀の奔流に任せて一躍演繹的に事物を律しようとする傾向の强い哲學上の議論です。從て近代人の全部が安心してその何れかの一說に傾倒することに、何んとはなしに齒痒さを覺えるのも止むを得ません。私の所謂諸科學の科學たる哲學上の議論が欲しい氣がします。この見地からしますと、私は戰爭といひ平和といひ互に楯の半面でありますから、戰爭の妥當性は平和と共に當然認めらるべきやに考へざるを得ません。

併し著者は此所で哲學と科學との限界等を述べる暇もありませんから、それ等の議論は次の章に讓ることとしませう。

第二章　戰爭理論

元來理論といふ言葉は廣義と狹義とに用ひられて居ます。廣い意味では、行動の對照をなす知的なもの、現象に對する認識關係を言ひます。狹い意味では事物の統一的、法則的解釋を意味します。

戰爭理論でも同樣に、廣い意味では、戰爭を知的に把握しようとする企てをいひ、狹い意味では作戰用兵又は戰爭自體が提起する諸問題を統一的、法則的に解釋しようとする企てをいひます。

かかる努力が科學的に行はれるだけ哲學と離れ勝ちですが、元來「諸科學の科學」として哲學を見れば、戰爭理論と戰爭哲學との分界は、區別が難しい道理です。けれども今はかかる論爭に沒頭するのをやめて、戰爭理論の廣、狹二義に就てしばらく諸家の說を覗いて見ませう。

第一節　廣義の理論

まづ廣義の戰爭理論に就て討究します。

ダーウィンがその進化論で、一切の生命現象の進化を科學的に研究したことは餘りにも有名であります。この進化論が廣く近代生活の各方面に及ぼした影響は實に計り知るべからざるものがあり、勿論戰爭理論もその範疇を出る譯には行きません。生存のための苦鬪、自然淘汰、變異、遺傳の四大原則の中でも、殊に生存のための苦鬪、自然淘汰の原則が戰爭理論に引用される樣です。

ダーウィンは、生物進化の際に行はれる精神的影響に就ては、敢て否定はしませんでしたが、その研究の重點は機械的進化の方面に置かれましたから、複雜な精神的進化に就ては、更らに研究を要すべきでせう。

スペンサーはこの精神的進化の方面に向つても研究を進めた人です。彼の議論は一口に進化哲學ともいはれる樣に、進化の原則を宇宙の一切現象に應用したものです。その說明によ

れば、不斷の分派と合一とによつて、事物が不定、無秩序な同質狀態から、定形、秩序ある異質狀態へと變化することを主張します。この原則を人間の心理的進化、社會生活の進化に適用するとき、戰爭なるものを理解させます。

マルクスが唯物史觀、剩餘價値と資本主義社會化の理想といふ中心思想の下にその經濟論を展開し、國家を超越した階級戰爭を主張したのも、我國では今や知れ亙つたことです。この思想はすべてその基礎を物質生活に置き、精神生活はすべて物質生活の影繪の樣に消極的に考へられて居る所に、救ふことの出來ぬ大きな缺點があります。これは私達の主張する、眞の科學精神に對する大きな冒瀆と信じます。積極的なはたらきを持つて居る精神生活は、物質生活に制約されながらも、又物質生活を積極的に又大きく制約する力を持つて居ます。ですからマルクスの思想は斷じて許すことが出來ぬのみか、人類の不幸を增すばかりの誤つた思想と考へます。これに就ては次の章でも更らに觸れる機會があります。

最近刊行された獨逸の戰爭論中タイゼンはいふやう、「自然は鬪爭であり又淘汰である。强きもの優越するものが自己を貫徹するに反し、生活力の弱いものが下敷にされ押しつぶされるのは自然の理である。この自然の鐵則に對しては人類も、民族も、民族の結合體中の個人も、同樣に服從させられる。國家の本能的鬪爭は、種族、生活地域や生活條件を維持改善するのを目的とする。その鬪爭の最後の決定的形態が戰爭である」と主張します。

我國でも小泉丹博士が「進化學的戰爭論」で主張されて居るのは、ほぼ同樣の理論の樣です。これ等は何れもダーウィンの進化論に、その根本の思想を發して居るものと考へられます。

これに對し大島豐氏は、進化の原因といふ問題を提起し、進化の秘密は生命の本質即ち生きんとする意志のうちに存在するとされ、進化は舊いものが進展發達したものではなく、寧ろ進化は新しい價値の創造であると主張される。從つて過去に於て發現しなかつた事が、未來に於て發現し得ると希望するのは不合理ではない。從つて未だ曾て實現されなかつた、國際的平和の理想を實現しようとすることと全く矛盾する樣な科學は成立し得ないと主張されます。

以上廣義の戰爭理論を通觀しますと、實驗的に戰爭の本質を究明しようとする傾きが濃厚

ですが、理想的にしかも科學的に戰爭を解釋しようと努力する學者もある樣です。

廣義の戰爭理論はこれ位にして、扨て次には狹義の戰爭理論に一瞥を與へませう。

第二節　狹義の理論

狹義の戰爭理論では既に戰爭の存在を確認し、作戰用兵又は戰爭自體が提起する諸問題を統一的、法則的に解釋しようとします。

問題は隨分多種多樣です。併しこの短い研究では、作戰と戰爭と政治との關係、次に戰爭の諸問題を科學として統一し、法則を見出し得るかどうかといふ二つの點について討究して見ませう。

一寸用語について申しておきます。現代戰爭の手段としては武力戰（作戰）の外に作戰の力を更らに增大するための國力上の手段があり得ますから、そこに作戰、戰爭、政治の關係が古代に比べて更らに複雜になります。

孫子の始計篇に、兵は國の大事、死生の地、存亡の道なり、察せざるべからざるなり、とあり、有名な句ですから誰でも知つて居ます。次に謀攻篇に、百戰百勝は善の善なるものにあらざるなり。戰はずして人の兵を屈するは善の善なるものなり、とあり、これも人口に膾炙される句です。

扨てこの二つの句を合せて考へるとき孫子の考へが判ります。前の句は孫子の全戰爭觀とでもいふべく、後の句は孫子の全作戰觀ともいへます。人々により色々に解釋されませうが、端的にいへば、作戰行動を起すことなしに目的を達成し得れば最上である。つまり政治上の目的が主體であり、作戰はその達成の爲の客體であると解されます。

孫子は支那春秋時代孔子と略同じ頃の人と信ぜられて居ますが、當時の小國分立、國際關係の複雜な世相にふさはしく書かれて居ます。つまり內治、外交と戰爭との關係を深く考へなければならぬ時代の兵書だつたせいもありませう。

吳子も孫子より稍後れた戰國時代の人で、その著書の眞僞には異說もありますが、政治と戰爭との關係については孫子と同樣の思想が流れて居ますのは、その頃の支那の一般情勢から肯かれることです。

李衞公問對は、隋の末世より唐の初めに亙り二朝に仕へた李衞公の著とされて居ます。つまり支那の中原の爭だけでなく、北方民族との間に大きな民族戰爭が行はれ、遂に唐によつて漢民族の大統一帝國が出來た時代の人です。唐の太宗が兵法の奥義に就て質した答に、一に曰く道、二に曰く天地、三に曰く將法、と應じ、道の說は至精至微なり、易に所謂聰明睿智、神武にして殺さざるもの是れなり、と述べて居ます。時代が時代だけに、民族闘爭といふ廣い見地から政治目的と戰爭の關係を說きましたが、その思想は孫子、吳子と餘り變つて居ない樣です。この李公の言葉は近頃我國の著書にも散見しますから、その出所に言及して見ました。

全く日本人の說に觸れぬのも殘念ですから極くあつさりと德川時代のものを覗きます。私は日本や日本人の偉さは、世界の前に堂々と說明し得るものと堅く信じますが、それとて何から何迄それを押し通すことは無理と考へます。特に德川時代ではその觀がありますから豫め申して置きます。成るべく當時の傾向でした支那殊に宋儒の思想から離れた人を撰びます。

中江藤樹はいふ。元來文武は一德なり、天地の造化一氣にして陰陽の差別ある如く、人性の感通一德にして文武の差別あれば、武なき文は眞の文にあらず、文なき武は眞の武にあらず、文道を行はんための武道なれば、武道の根は文なり、武道の威をもちひて治むる文道なれば文道の根は武なり、といひます。

山鹿素行は兵法奥義の開卷劈頭、陰陽兵源を說き、夫れ萬物は天地に出でず、天地の本は陰陽なり、と述べ、克己の工夫を脩むれば則ち天地位を得、百官職を守つて後天下平かなり、是れ眞の兵法なり、と喝破します。

荻生徂徠はあの有名な鈐錄の中で當時の兵學を評し、我國の兵學者流は楠流といひ正成が建立にもあらず、甲越の兩流も信玄、謙信の制作にもあらず、正しく百年以來治世に成て、賣物の爲に拵へたる類多し、と一流の痛罵を放つて居ます。

ジセロンは、戰爭とは暴力によりて解決せられる爭論である、とし、ルュストウは、戰爭とは政治目的を達成する爲、計畫的に且つ組織的に行はれる闘爭であると主張して居ます。

クラウゼウィッツは、戰爭とは我が意志を敵國に强要屈從せしめる爲の暴力行爲である、と定義し、戰爭は單に政治的交涉の一部であつて決して獨立した部分ではない。戰爭は他の

手段を以てする政治の繼續である、と主張します。併し彼は更らに疑問を提出し、若し戰爭が徹底的抗敵心から起る決死的鬪爭であるならば、政治的見地は戰爭の開始とともに停止さるべきであるといふことは考へ得る、併し戰爭も政治自身の發現以外の何物でもない、政治的見地が軍事的見地より下位に立つことは矛盾してゐる、と說明します。

ルーデンドルフ將軍は、戰爭も政治も共に國民の生存上行はれるものであり、就中戰爭は國民生存意志の最高表現である、即ち戰爭は他の手段を以てする政治の繼續であるから、全政治は戰爭に奉仕せねばならぬ、と主張してゐます。

ナチス戰爭論はルーデンドルフの說を反駁し、「將軍の說明中には政治的指導よりも軍事的指導に最高權を與へんとする粗暴な考を發見する。軍事的指導（つまり武力戰）は政治的指導を奉仕さすべきでなく、むしろ戰爭に奉仕すべきである。戰爭に當り全國民が一致して對內外政策を敢行することが最も主要な問題である」と明らかに將軍の說を否定します。

デブネー將軍（佛國）も同樣の意見を述べ、戰爭の目的は我の欲する新しい平和である、つまり止むを得ず戰爭をしかけられた國は一意平和に歸ることを願ふし、又戰爭をしかけた國も自分の發達上必要と認める平和を求めてゐる、從つて政治が軍事の目的を定めそれを指揮するのは當然である、とします。

加田哲二博士は社會科學の見地から矢張り同じ傾向の意見を持ち、戰爭の規模が擴大され總力戰になつたからといつて、戰爭の本質をそれ自體に求めても理解し得ない。現代戰爭の規模擴大も、その政治的基礎に基いてゐる。從つてクラウゼヴィッツの戰爭本質論は現代にも於ても適用するし、かく見ることによつて、現代の戰爭を充分理解し得る、と主張されます。

以上紹介しました理論は、國家生存上の重大な問題ですから少々長くなりました。結局政治、戰爭、作戰の關係が色々に說明されてゐますが、理論としては多くの人の主張する樣に政治—戰爭—作戰といふ順序に主客があるべきであるといふナチス戰爭論に軍配が上る樣です。しかしこの理論は戰爭の開始及び終末の時に最もよく現はれますが、クラウゼヴィッツのいふ樣に、戰爭の進行間にはその關係が理論的に見て却つて反對となる傾向が著しいのです。それは既に目的が定まつた以上、戰爭殊に作戰を十分に働かせる必要から起る當然の理論的結果によるのです。しかしそれも極端に迄主張さるべきではなく、戰爭目的の改變とい

ふ様な問題になれば再び、その本質をはつきりと表現する様になります。詳しいことは第二編に讓りませう。

次は戰爭の諸問題を統一的、法則的に、つまり科學として取扱ひ得るやの問題です。

實世間に餘り關係のない様なこの問題も、實は大層な關係があります。例へば古く支那に行はれた陰陽五行說が、支那延ては我國の兵法に偉大な影響を與へたことは既に本章でも一寸觸れました。今日一般人はこの様な說を受け入れることに一種の躊ひを感じ、少くもこれから出發する戰爭の理論の危險性を認めます。つまり科學性のない一つのイデオロギーを以て戰爭の法則を見出し又は體系づけることは大變危いといふことです。

ジョミニー、ビュロー、ロイド等の獨斷派は戰爭の法則、體系をたてることの可能を認めます。もつとも此等の人々は當時の影響を受けて、戰爭を主として武力戰のみの見地から檢討しましたから、勢ひ戰略、戰術に就て述べて居ます。この主張が極端になりまして、十七世紀から十九世紀前半にかけ、兵學が一種の衒學的傾向に陷り、今日から見れば實にをかしい程な迷路に入つた様です。我國に於ても荻生徂徠が痛罵した様な兵學は、この傾向があります。

ベルンホルストは戰爭を科學として理論づけることが不可能であると主張します。つまり懐疑派といへます。大モルトケ元帥はそれ程でもありませんが、戰略は科學にあらず、方便の術なりとし、戰史を研究して教訓を求めることを主張します。ルーデンドルフ將軍もさうです。曰く、予は理論を憎惡する、戰爭は現實である、と喝破します。しかし彼の著書「戰爭指導と政治」、「總力戰」等を見ますと、却つて彼れ獨特の理論を強く主張し、寧ろ獨斷派の様に見えるのは一種の皮肉でありませう。

クラウゼヴィッツは批判派の先人といへませう。彼の意見によりますと、戰爭理論は一般理論の様な理想には到達し得ない。しかし理論を根本的な單純なものに局限して成立させることは可能であると主張します。彼は一方に於て嚴然たる事實つまり經驗を睨み、他方概念的認識を行ひ、この二つを結びつけて互ひに相ひ保證しあつて戰爭を理論づける態度をとりました。

ナチス獨逸で、フランケ少將監修の下に發刊された「國防科學提要」は、その名の示す様

に、廣い意味の戰爭やその準備を科學として取扱はうとする企てです。これは現代戰が武力戰だけでなく、他の國力による手段があり、從つてこれ等は科學的に理論づけることが出來ると見たからでせう。しかし戰爭を政治と關聯させる事になりますと、矢張り用心深くクラウゼウィッツの方法をとつて居ます。つまりクラウゼウィッツよりも一層科學に近づかうとする熱意に燃えてはゐますが、戰爭全體を科學とする迄には到つてゐません。

フォッシュ元帥もこの派の一人です。その著書は主として武力戰を取扱つて居ます。元帥は戰爭には共通する理論があることを認めますが、それはごく局限された數の少いもので、その他の研究は戰史つまり經驗に基く知的訓練によるべきを主張し、殊に精神的要素を強く主張してゐる所に異色があります。

アンリ大佐（佛國）もその著書「近代戰の精神」に於てほぼ同樣の意見を述べ、戰爭は科學であり同時に術であると主張して居ます。

これで戰爭理論の種々相は大體覗きました。大觀しますと、近世になり戰爭理論も大いに科學性を帶び、殊にダーウィンの進化論は大きな影響を與へました。しかしあまりに自然科學のみに傾倒して、精神方面を閑却した結果、マルクスの說等が誤り信ぜられたことも見逃し難いことです。これに對しフォッシュ元帥が一大警鐘を奏でたことも目立ちます。

前世界大戰後思想界の混亂や戰爭規模の擴大につれ又々戰爭理論が一種の術學的傾向に向ふかの虞れが確かに現はれて居ます。これに對し冷靜に實驗と理論と互に保證しあつて中庸の說を揭げ、しかも科學的に戰爭理論をうち立てようと努力するのがナチス戰爭論でありまして、現代に最も應はしい態度ではないでせうか。それ等については更らに結論的に述べる機會があります。

第三章　戰爭史論

戰爭哲學といひ戰爭理論といひ、これは人類が戰爭を思索した跡に外なりません。然らば人類は行動により戰爭を如何に跡づけたか、つまり實驗的に戰爭を觀ようといふのがこの章の目的です。

戰爭は平和の狀態から發生し、その戰爭によつて新しい平和が生れ、この平和が醱酵して又戰爭が起きました。つまり戰爭史とは戰爭を主體として見た歷史となります。

歷史は嚴然たる事實ですが、それも縱から見、橫から見、又は表から覗き、裏から覗くことによつて色々の形に見えますから、私はこれを全體として見たいのです。

つまり人類社會の發達といふ觀點から世界史的に戰爭を鳥瞰しまして、戰爭の本質や戰爭規模內容の諸問題を檢討しようといふのです。

大そう野心的に見える仕事を、僅かの頁數で盡さうとしますから、甚だ心もとないことですが、出來るだけ良心的に、簡潔にやつて見ませう。

第一節　民族國家の創成時代

西紀前六千年頃から西紀前五百年前後の間、つまり五千年以上の歲月に亘る間、人類は段段文化の發達と共に民族的に結成して國家をうち立てる努力をしました。

その以前、人類の起源に溯ることはやめても、今から十萬年前以來既に人類は舊石器時代を經過し絕えず發達し、次で一萬年前頃から新石器時代に入りました。西紀前六千年といへば、最早新石器時代の中期に入らうとし、地方によつては靑銅器を使用する樣になりつつある時代です。つまり人類の發達上から見れば、この時代に入る前既に長大な年月が費されて居ることを忘れる譯にはゆきません。

そこで西紀前六千年から同じく五百年に至る間には靑銅の外に鐵器を、又家畜として馬を使ふやうになり、戰爭にもこれが利用されました。

この時代、まづ支那の黃河、メソポタミア地方の兩大河、埃及のニール河地方に、次で印

度の兩大河、沿地中海地方に各種の民族が段々と都市や部落を集成連合して國家を造ります。

戰爭は民族國家創成の爲にも行はれましたが、又出來上つた國家間にも行はれます。支那や印度では地勢の隔絶と民族分布の關係から多くは民族の內部で行はれましたが、メソポタミア、埃及、沿地中海地方では內部的に國家の興廢戰爭があつたばかりでなく、此等各地方の民族國家が萬字巴となり激しい戰爭をしました。

さらに此等溫暖で地味が原始農業に適した地方の北方には、匈奴、トルコ、スキタイ、ゲルマニア、ケルト等とよばれる民族が、或は晴れわたつた靑空の草原に、或は陰慘な雲天の深林中に漂流生活をしながら、南方の進步した民族國家に對し、屢々掠奪戰爭をしかけますが、まだこの時代には北方民族の結成した完全な國家は多くの場合出來ません。

この時代の戰爭も地方により樣々であります。

メソポタミア地方のやうに地勢が限定せられず、又四隣に民族の多種多樣なものが住んだ所では、各種民族の結成する國家の興廢がはげしく、所謂無制限の酷烈な總力戰が行はれ勝ちでした。又この地方と關係の深い、小亞細亞、東地中海諸國や埃及等の間にも、領土を廣め經濟や文化を向上する目的で相當深酷な總力戰的戰爭が行はれました。

埃及地方は、ニール河谷で限定せられ、しかも紅海や、リビア砂漠等で比較的隔絕してゐますから割合に民族の興廢が少く、埃及民族の中で主權者の變るために行はれた戰爭は、當然ある種の制限戰爭です。しかし例外として西紀前千三百年代にはセム族がスエズ地峽から侵入し、埃及を征服し、相當酷烈な總力戰をやりました。又その後このセム族を驅逐して埃及民族の埃及國が再興された後には、對外的に發展し、スエズ地峽を越えてユウフラチス河の中流に迄その勢力を及ぼし、バビロニア諸國との間に戰爭が見られますが、これも相當酷烈なものです。しかし無制限の總力戰と迄は行かなかつた樣です。

支那に漢民族の結成する國家が出來たのは前記の二地方よりは少し遲れた樣です。三皇、五帝から周が起り、次で春秋、戰國時代がこの第一節で取扱はれるわけですが、この間に戰爭は隨分あり、殊に春秋、戰國時代がさうですが、これは漢民族內に於ける主權の爭奪戰といふ形で、異民族間に於ける國家の對立戰爭ではありません。勿論この時代でも北方の草原にある夷狄との間に小戰はあつた樣ですが、まだこれが漢民族國家の存立を脅す程ではなか

つた様です。從つて戰爭も一種の封建諸侯間の戰爭で、著しく制限された、政治の方がより多く働く制限戰爭です。つまり埃及に似て更らに夫れ以上制限された戰爭が多かつた様です。

從つてこの種の戰爭が行はれた時代の兵書孫子、吳子の內容を見ますと、前章でも一寸述べた様に著しく政治的の色彩が强く目に映ずるのも無理からぬことです。又それが我國に傳はり戰國時代から德川の代にかけて、封建諸侯の所謂御用兵學者により祖述されたことも肯けることです。がそれだけに、現代戰爭の様な總力戰には當てはまらぬこともあり得ることを私共はまづ第一に注意してかからねばならないでせう。

印度地方では、初めドラヴィダ人の世界が展開せられましたが、その後アリアン人が移動して來て、そこに民族死活の一大戰爭が行はれたに違ひありませんが、その邊の歷史はまだ明らかでありません。兎に角アリアン人の征服がなつて後の印度は、小國分立して仲々統一と迄は行かず、地勢の關係から、その後他民族の侵襲も大した影響はなく、小さな制限戰爭が小國の間に行はれた有様は支那以上だつた様です。

今この時代、世界に行はれた戰爭の代表的なものを拾つて見ます。しかし限られた紙面ですから、ごく大體のことに止めます。

メソポタミア地方の歷史は西紀前七千年頃から多分スメル人によつて幕が開かれた様で、約四千年の間には段々小さな民族的組織が崩壞して領土や財產に基く新しい國家が成立しかけます。二十に餘る都市國家は互に干戈を交へ、かつての覇者は屬國となり、その都市は燒かれ、人民は奴隷に賣られたりするうちに、都市の聯合した一種の聯邦國家が出來ます。

そこへ新たに民族を異にするセム人が侵入し、このスメル人の聯邦國家を征服し、その國土に定住してアッカド王國を建てます。これが西紀前二千八百年代のことで、その初代の王サルゴン大王の行つた戰爭は、今日の言葉でいふ無制限の總力戰です。

都城は廢墟と化し、人民は捕囚、奴隷となるか、又は移住を命ぜられ、財寶は皆勝者の手に歸します。かのスメルの常勝王ルガン・ザクシが敗戰の結果捕へられ、野獸の様に檻に入れられ、ニップル市の神殿入口にさらされて行人嘲笑の的となつた様なことが行はれます。

大王は單にユーフラチス川沿岸のセム民族國家を征服したのみならず、更らに異民族たる東方のエラム國や、西方シリアから北方カパドキア地方を經て南進し、キプロス島を征服し

て首都アッカドに凱旋します。

彼は大征服者たるのみならず、軍隊に護衛された大商隊團を各國に派遣し、首都アッカドに築港してペルシャ灣の大船を首都まで溯航させ、平時その軍隊は植民地との通商路の保護に任じさせ、タウルス山脈から多くの金屬を、又レバノン山脈からは良材を取り寄せます。又征服したスメル人の不平を分散させるため、全領土内に土地を買收して移住を命じたのは、社會經濟史や政治史上極めて面白いことでせう。

大王の戰爭目的がどうあつたかは、その事績から推定するより外ないのですが、經濟上の要求が多分にあります。しかし民族思想、信仰の問題も閑却は出來ません。勿論このセム民族はスメル人の優れた文化を承けつぎましたが、大王がアッカド語を奬勵し、スメル語延てスメル人の同化に努めたのはその片鱗を示すものでせう。

しかし戰爭の何よりも大きな動機は、スメル人がその爛熟した文化に厄ひされるとき、新しく力のあるセム人が自然に膨脹せんとする躍動の力によつて起つたことが最大の原因と見るべきでせう。

大王の武力戰の規模內容中、注目されるのは軍政と戰法の二方面です。

軍政上から見ますと、當時スメル人が常備軍の大なるものを持たず、兵農一致式の俄か作りの軍隊であつたに反し、大王は五千四百の精鋭を常備し奇襲的の戰爭が出來たこと、又スメル軍の裝備は楯、長い槍、重甲と鐵斧であつたに反し、セム軍は輕快な裝備で殊に弓矢を持つて居たことです。

戰法では、スメル軍が、大きな密集隊形で、運動が鈍重であつたに反し、セム軍は小さな密集部隊に區分し機動戰法に出たのです。

ウェルズが、古代メソポタミア地方民族の興廢、戰爭と平和との交錯を記してゐる言葉は、中々穿つて居ますから要約して引用します。

「天惠豐かな地方では、太陽の光線と水の供給が絶えずある。來る年も〳〵豐かな收穫がある。今迄漂浪の旅をつづけたものも自然に定着し、人口が增し、家屋も次第に堅固になる。

飜つて他方、かかる天惠に浴せず、季節により著しく狀態の變る地方では、やせこけた

敏捷な活動的な人が居る。これが原始遊牧民族である。

定着民族が器具を精巧に改良し、金屬の使用を發明して來ると、これが遊牧民族に傳はつてその武器を改良せしめ、益々好戰民族となり、運輸の便が增すと共に運動も速くなる。

忽ちにして、統一された遊牧民の大衆が潮の樣に文化平和の平原におし寄せ、全國をあげて征服戰の巷と化し、野蠻人の汚い足が美しい世界を蹂躙して了ふ。征服者はその國土の上に定着し始める。即ち國土全體を分捕物とするのである。被征服民は征服者に服役し貢稅を納める民となり、樵夫、水利人夫となる。

かやうな道筋は樣々な變裝をして出現するものの、最近七千年間人類歷史の骨組を形成する典型とも公式ともいふべきである。かくて征服者もいつの間にか自分が捕獲した文明に感化せられ、その一部分となつてしまふ。しかもかうして居るうちに、一方この文明のあなたなる未開の原野の自由奔放な遊牧民族の間には、再び新たな侵略の氣運が釀成せられて來る。これが道筋であり、公式である」と。

旣に述べました樣に支那や、埃及では、この種の無制限戰爭は稀で、同一民族內の小國主權者が爭ふにしても、或はこれが統一されるにしても、制限された戰爭でした。この種の戰爭は今後もまだ〳〵澤山お手本がありますから、この節では省きます。

第二節　世界的國家の試練時代

西紀前五世紀から西紀第五世紀頃まで、一寸千年の間には實に目覺ましい人類の活躍と試練とが積まれまして一種の黃金時代をつくりました。前時代五千年の努力が燦然として花を開き實を結んだともいへませう。併しこの花は少々早咲きだつたので、結んだ實も十分の味が出ずに終つた樣です。人類發達の長い年月から見ればそれも當然のことで、人々は餘りに功を急ぎ、餘りに野心的であり、餘りに理想に奔りすぎたかも知れません。

まづ支那地方を見ますと、孔子が生れ、其他諸子百家が燎爛たる思想の花を咲かせ、秦の始皇による統一世界帝國、次で漢帝國が生れ、經濟に工藝に一大發展を見せますが、それには當然戰爭も大きな役割を演じます。その北方では匈奴が特種の民族國家を作り、漢民族との間に戰爭がくり擴げられます。

印度地方では、釋迦が生れ、東洋は勿論一時は全亞細亞から歐洲や埃及の一角に迄その教義を廣める機緣を作り出し、阿育王が出て異色のある統一世界觀の王國を作ります。

希臘には哲人プラトー、アリストテレスが出て、此民族特有の科學的思想が光を放ち、歷山大王が矢張り世界帝國の建設に努力します。次では羅馬が擡頭し世界帝國の試みを續け、ナザレ人耶蘇は基督教を說き、これ又將來世界的宗教となる機緣をつくり出しました。この間南歐から沿地中海の西アジアには燦然たる文化が生れ、人類發達史上劃期的な仕事が營まれましたが、それには矢張り戰爭が大きな役割を演じます。しかし遙かのあなたなる北歐の天地には剽悍な北方民族が段々南下して遂には羅馬大帝國も倒れることになります。いでやこれから、各地方で行はれた代表的戰爭の二、三を拾つて、その本質や、その規模內容を親つて見ませう。

秦が宇內を統一し、始皇に至つて一大帝國を作る迄の戰爭を見ますと、そこには多分に外交戰の香が强い樣です。統一前の支那では封建的七雄國が割據して居ましたが、蘇秦が六國を說いて合從の策を建て、遂に西紀前三一八年楚、韓、魏、趙、燕及び匈奴の合從軍が函谷關で秦軍と戰ひ、却つて秦軍に逆襲されて大敗します。

戰後秦は張儀を列國に派遣して連衡の策を說かしめ、秦に親しみ、覇者として之に事へしめることを提議させます。これは充分成功しませんでしたが、秦は列國の猜疑心を利用して互に相戰はせたり、或は遠交近攻の策を弄したり、つまり徹底的な武力戰はやらずに西紀前二二一年大帝國を建設しました。

始皇の即位後、北方の匈奴が黃河を越え今のオルドス地方に迄進出するに及んで、始皇は蒙恬を將とし兵三十萬を率いて之を伐たしめ、遂にあの有名な萬里の長城を築いて匈奴の侵略に備へますが、この種の戰爭とても民族的の爭ひとはいへ、匈奴がまだ充分の國家體制を持たぬ關係もあり、遊牧民族を邊疆から擊攘する制限戰爭に過ぎません。

つまり支那の中原は大體漢民族が居住し、大帝國の統一といつても民族內の戰爭に過ぎず、北方の匈奴はまだ遊牧人の集團であり、南方には確かに苗族その他の異民族が居ますが、その勢力は弱く忽ち秦の統制に服しましたから、自然無制限の總力戰はその必要がなかつたのです。この種の戰爭は支那の歷代に亘つて隨分多かつた樣です。これは地勢、民族分布、國

際的政治環境が、民族國家の戰爭を特種づけることのよい一例でせう。

始皇が當時の形勢から見て、世界的統一國家を作るためやつた戰爭の目的がどうあつたかに就ては、色々に觀察出來ませう。兎も角春秋戰國時代の五百年間に支那民族の文明は戰爭を織りまぜて偉大な發達をし、殊に思想と經濟の進歩が始皇の世界國家建設に影響した樣です。

元來世界統一の思想は既に孟子が提唱し、又事實上大勢がこれに向つて居ましたが、秦國は戰國の初期以來變法自疆策の敢行と、地の利とを得てその中心勢力をなし、遂に始皇に到つてこれが成功しました。

戰爭の本質から見ますと秦國のやつた戰爭は一種の制限戰爭で、外交戰を主とし、經濟上からは當時盛んとなつた流通經濟を利用して政治と商人資本との連繫を密にし、又農民に對しては周の井田制を開放して土地を商品化し、自作農、小地主階級の設定を計り、かくして秦の兵隊はその地の僻遠、その民の質朴なのに加へて、堅實な小地主階級を軍隊の中心勢力としました。

かくして、クラウゼウィッツの所謂戰爭らしからざる戰爭によつて世界的統一國家を建てましたが、新しい平和に處する大方針として秦は、韓非子の稱へる法家の說を採用しまして、萬事を窮屈な法により律しましたから、當時自由發達の習慣になれた戰國時代の直後としては無理があり、忽ち自滅の貌となりました。

秦の滅亡後群雄を制して漢帝國を創めた高祖の戰爭も、秦の戰爭と同樣な或はそれ以上に戰爭らしくない戰爭です。ただ新しい平和、つまり新指導方針が周の封建制と、秦の郡縣制の折衷であつたが爲、相當の期間この帝國の命があつたのですが、これは略することにします。

希臘では秦の始皇に先だつ七十年許り前に、歷山大王が矢張り世界統一國家の創設を企て、その偉業半ばで早逝し、その理想も一場の夢となりました。

歷山大王の事績は餘りにも有名ですから、細部に入ることは省きまして、その世界帝國建設の理想、これが達成の爲めの手段としての戰爭につき一瞥することにしませう。

歷山大王の戰爭目的、つまり新平和への理想については、當時の希臘思想、つまりソクラ

テス、プラトー、アリストテレス等によつて代表せられる思想に影響されて居る樣です。殊にアリストテレスは大王の師だつたのですから當然のことです。又當時の沿地中海諸國から西亞細亞一帶に亘る國々の政治的環境、經濟的關係も大王の戰爭目的に大きな影響を與へて居ませう。又大王の家庭から見て、父王ヒリップスの高貴な賢明さと、母后オリンピアスの神秘的な狂暴さとが相交錯して遺傳的に影響を與へて居る樣です。

大王が希臘を統一して、ペルシヤ征討を旗印しに出發した頃は兎も角として、その後の戰爭を通じて見るとき、大王の戰爭目的が當時知られる限りの世界を統一して一大帝國を建て、東西の文化を融合して人類の發達、延ては永遠の平和を夢みた樣にもとれます。この邊は秦の始皇と揆を同うして更らに一層鮮明です。

その理想實現のための戰爭としては、始皇と違ひ、一層徹底した無制限總力戰の色彩が强く發見されます。大王はペルシヤ王ダリウス三世の提出した有利な平和條件を一蹴してこれに徹底的打擊を與へて之を滅ぼし、更らに北の方パルチヤ、バクトリアを征し、旗を翻して東の方インダス河を渡つて印度に入り、ポールス王の軍を一蹴しましたが、將兵の戰意挫折したので止むを得ずバビロンに歸り、これから建設に取りかかる所で急逝します。

軍の組織、戰法等は父王に負ふこと大でしたが、大王も亦これに創意的改善を加へ、更らにその統帥は天禀的な傑出したものでした。又その戰爭準備にしましても豫め北の方ダニューブ河邊りまで領土を廣めて資源を確保し、金鑛を手に入れ、又ペルシヤの海軍力を考へて、まづ波斯の打倒に先だち、小亞細亞、埃及を手に入れて、後方海上權を確保する邊り誠に驚歎に値します。

大王が印度の征伐を中止し、ペルシヤの都スザに凱旋したのが西紀前三二四年、その翌年七月大王はその新都バビロンに於て熱病で急逝しましたから、建設の事業は見ることが出來ません。しかし大王がスザに歸つて見ると、六年間の留守中に帝國は紛亂を極め、縣知事は私軍を擁し、バクトリア、メヂアは謀叛し、又本國マケドニアでは母后オリンピアスが政治を紊亂させてゐます。宮廷會計吏は凡そあらん限りの宮室財寶を蒐き集めて逐電する等、建設の偉業も骨が折れたらうと考へられます。

秦の始皇といひ、歷山王といひ、その世界國家建設の理想、その實現の手段としての戰爭

は實に偉大ですが、人間はまだその理想の樣には動かなかつたのです。

印度では歷山大王の死後六十年阿育王が、アフガニスタンから殆んど全印度に亘る地方を統一し、當時の知識程度としては矢張り世界帝國の建設事業を起しました。西紀前二二五年南印度の强國カリンガ王國を征服した時には、戰死十萬捕虜十五萬の戰果を擧げましたが、深く戰爭の慘虐と破壞とに愛憎をつかし、この大帝國を佛敎によりて治めることに發心したといはれます。

阿育王の前半生が戰爭による大帝國の建設であつたに反し、その後半生は八聖道による涅槃への精進に努め、新しい平和建設のため積極的に佛敎を活用したのは、始皇や歷山王の事績と對照して異色のあるものです。

ウェルズは、「世界史の年表に幾千、幾萬と群がる君主や貌下達の中に阿育王のみが唯一つ、星の樣に聖らかに輝いてゐる」と讃辭を呈してゐます。

この時代の戰爭としては、まだ羅馬帝國の事績を述べるべきですが、餘り長くもなりますし、元來私の考では、秦の始皇や漢の高祖や阿育王や歷山大王の戰爭に比べますと、羅馬の戰爭は必ずしも上位に置かるべきではない樣にも見えますから略することにします。

第三節　混沌時代

この時代は西紀第五世紀から第十五世紀までとします。前節の時代が人類發達の上から見て一種の黃金時代であるに比し、この時代は稍暗黑的、胎生的といへませうか。歐洲は停頓し、亞細亞では新興民族が大活躍をしたこともありますが長くは續かず、從つてこの時代の戰爭は、或は封建諸侯の小さな野心から起るものか、或は新興民族の戰爭にしても、果してどんな理想の下に行つたものか、單に遊牧民族の首長が、元氣はあるものの、人類發達に寄與するつもりでやつたのかどうか一寸疑はしい戰爭の樣です。私は大雜把に見て、これを混沌時代的戰爭と名づけます。

本節の研究は紙數も足りませんから、自然簡略になります。

西紀第七世紀から第九世紀に亘りアラビヤ人、つまりセム系民族による大帝國の建設と、それに伴ふ戰爭は異色のあるものです。この戰爭の本質中に流れるものは民族的、經濟的な

ものの外に宗教が強く作用してゐます。勿論第一節で述べました民族國家創生時代の戰爭も信仰がその一要素となつて居ますが、それよりはずつと強く働いてゐるのがこの戰爭です。

戰爭の規模內容から見ますれば、モハメッド時代は軍隊も僅かなもので、沙漠隊商に對する掠奪戰の形式です。その後大帝國の建設迄には規模も段々大きくなりますが、別に前二節の戰爭と異つたこともない樣です。

結局全世界をアラー神の足下に屈服させようとする世界革命の企ても、第九世紀の始め頃民族の力にあまつて衰微することになりました。

西紀第十一世紀末から第十三世紀の半ばにかけて約百五十年に亘る十字軍の戰爭もこの時代の歐洲を最もよく表現する一種の戰爭です。

十字軍の戰爭の原因は表面單簡な樣で大そう複雜です。つまり(1)ラテン教會がビザンチン教會を屈服しようとする打算的野心、(2)掠奪的本能を持つノルマン族が、既に伊太利を寸斷しつくし新たな富裕の地方を求めた、(3)宣傳者により異教徒の暴狀を誇張して聞かされた民衆の憎惡心、(4)伊太利の商業獨立都市が東方貿易を遮斷される經濟上の原因、(5)當時西歐諸國を襲つた疫病と饑饉とのため社會組織が壞散し、一種の東方移民運動が起つた、等のことが擧げられませう。

つまりこの戰爭は單純な宗教戰爭といふよりは當時の混沌とした歐洲の社會、經濟、政治上から必然的に起るべき運命にあつたものを宗教の名で行はれたと見るべきでせう。

戰爭の規模內容からすれば、前後七回の遠征に多少の違ひはありますが、一種の暴民團や雜軍が、封建的の甚だ制限された戰爭をしたとでも言へませう。

西紀第十三世紀の初頭成吉思汗、忽必烈によつて決行された、東西兩洋に跨る大帝國の建設は、この混沌時代を飾る第一の偉大な仕事でせう。

この大帝國建國の理想、つまり戰爭目的がどうあつたかは色々見方がありませう。しかしその結果から見れば、歷山大王、始皇、羅馬帝國等の領土を遙に凌ぐ領域に亘り、東西兩洋文明を融合し、人類發達に大きな貢獻をしたことに疑はありません。

成吉思汗建設の理想につきグルナール氏はいふ。

「彼はその帝國を、擴大せるオロスの家族と觀念した。オロスは種族の家族である。彼は

純然たる家長的社會の最高の父である」と。又鶯淵氏は、「一言以て盡せば、蒙古人偏重、他族重壓主義であり、君主專制主義である」と見てゐます。併し君主專制主義といつても、そこにはツラン系民族の通性たる家族會議の作用を見逃してはならぬと考へます。

私の考を述べることを許されるならば、幾十世紀に亘り北方の晴れわたる青空の下に自由奔放な生活を營み、南方や西南方の民族と接觸しその文明を體得した蒙古民族は、アラビヤ人とは又違つた逞ましさを持つて居ります。恐らくその建國の理想は、蒙古民族を中心とする果しもない大きな世界を造らうとした樣に考へられます。

戰爭の規模內容といふ立場から成吉思汗に學ぶものは非常に多く、今後まだ〳〵研究さるべきものと考へます。簡單に述べますと、

一、高度國防國家體制　遊牧民族の特性を利用し社會組織と軍の組織とを同じ規格の中に建設し、動員の迅速、開戰時期の選定を容易にします。

二、戰爭準備　四隣諸國の內狀を詳にし、外交と軍事とを併用してその成果を揚げます。

三、軍の編制裝備　社會構成上の細胞組織を利用し、分隊(十人)、中隊(百人)、聯隊(千人)、師團(一萬人)を編成し、さらにこれを民族の傳統に基いて三軍に編制し、軍司令官は同時に行政長官です。

裝備にしても、當時の列國に比べて左程劣りません。殊に國家特有の資源たる馬を利用して全部を騎隊とし、馬で繫駕する砲隊を持ち、行動の迅速と、後方輸送機關の優秀さとを發揮します。

優秀な諜報機關を設け地形、交通、敵國の兵備や內政上の缺陷を明らかにします。

通信部隊を設け、視號通信で大軍の統帥を便にします。

四、戰略、戰術、訓練　戰略の原則としては、分進合擊、奇襲、大迂回運動からの包圍、徹底的追擊が擧げられます、戰術の特色としては、その軍の機動力と、集團威力の衝力とを利用することを擧げ得ます。

又常に訓練に重きを置き、殊に精神上の優越に意を拂つて居ます。

當時の歐洲が、封建諸侯の小さな野心に基く、著しく制限された小規模な戰爭に沒頭して居たのですから、この蒙古の總力戰的な、しかも精强な大軍を以てする戰爭の前に一とたま

りもなかつたのは寧ろ當然でせう。

結局この時代は亞細亞民族の世界であり、殊に蒙古民族の大飛躍が凡そ一世紀の間世界を震駭させました。

第四節　近代國家時代

西紀第十六世紀頃から第廿世紀迄を近代國家時代として戰爭を見ませう。

前時代が亞細亞民族の舞臺であるに反し、この時代は歐洲民族の活躍時代でありますが、末期には日本民族の偉大なる興起が目だつて來ます。

人類知識の發展が著しく、科學の進歩に伴ひ、機械革命、產業革命、政治革命が行はれ、これに伴つて近代國家が生れます。

十五世紀にはアメリカ大陸が發見され、遂にはアメリカ合衆國の獨立があり、南米、アフリカ、亞細亞には歐洲列强の植民地が設定され、世界の資源が歐洲人の手に偏重します。

その歐洲の列强も、科學文明の結果と產業の發達とにつれ、互に資源の獲得、商品のはけ口の爭奪で相爭ひます。

民衆知識の發達に伴ひ民族意識が强くなると共に、民衆福利の增進が要求され、これ等が結び付いて民族的帝國主義が高調されますが、歐洲に於ける民族分布の有樣は大きな矛盾を來します。

結局この時代は覺醒した民族大衆の要求と、科學文明が齎した物質上の欲求と、更らに混沌時代の淺糟とが相交錯した近代國家の時代でせう。

この時代の戰爭は讀者諸君にもよく知れわたつて居り、又既に前三節で我々は色々な戰爭の御手本を見てゐますから、代表的なものを二、三拾つて見るに止めます。

西紀十八世紀末から十九世紀の始めに行はれました佛國革命戰爭、奈翁戰爭はこの時代の代表的なものの一つでせう。

戰爭の本質、目的を一口にいへば、佛國を中心とする歐洲の制覇といへませう。そのよつて來る所は、奈翁個人の欲望、當時の經濟上の環境等、歷山大王以來餘り變つたこともありませんが、ただ從來よりも一層佛國民衆の欲望といふものが作用して居ます。そして對內的

には庶民階級の貴族に對する權利の要求でありましたが、對外的には佛國の民衆が民族として團結し、帝國主義を成し遂げることでした。

一寸話が外れますが、庶民階級權利の要求は二十世紀の今日迄續いてゐます。そしてマルクス、レーニン等によつて、それが世界的に階級戰爭となる樣提唱されましたが、偖實際を見ますと、どうやら佛國革命戰と同樣それは對內的であつて、對外的には矢張り民族國家の擴張といふ形式となり、決して國際的階級戰爭には事實發展して居ないことは注目すべきでせう。

武力戰では奈翁戰爭は色々のことを敎へてくれます。戰略ではまづ戰爭目的達成の爲、敵野戰軍の擊滅を必要とすること、それが爲分進合擊の外に中央突破の方法があること、戰術では、火器の進步と、國軍が職業軍でなく國民軍となつた關係上、その民族的精神を尊重して密集戰法を撒兵戰法に改めたこと、從つて軍隊の精神的要素を重視すること等が擧げられませう。

又兵制としては、大軍の統帥上、師團の上に軍團又は軍といふ單位を設けて運用に便することが敎へられました。

陸、海軍の協同作戰、つまり武力として陸海軍を一團として見、相手國の戰力や地理的、人文的關係やを廣く觀察して、これをうまく運用する點では奈翁も隨分努力しましたが、元來大陸國の悲しさ甚だ不成績でした。

ゲルマン民族を統一して、獨逸帝國を創立する爲行はれた戰爭も亦特色があります。

ウィルヘルム一世の治下、ビスマルク宰相とモルトケ參謀總長のコンビで一八六四年の對丁抹戰爭、六六年の對墺戰爭、七〇、七一年の對佛戰爭が行はれました。

この三つの戰爭を通じて目的とする所は、長年分立して居た獨逸國內の小國を結成して獨逸大帝國を創成するといふ極めて明らかな戰爭目的があつたことで、これは珍らしいことです。我々が見て來ました樣に、存外戰爭目的のはつきり定まつて始められた戰爭は少ないのです。

民族國家の創立戰爭は第一節で我々が覗いて來た所ですが、獨の逸場合には既に定着した民族を單に結成すればよいのですから、第一節の場合の樣に他民族の國土と民衆とを共に征

服する無制限戰爭と異り、獨逸のこの戰爭は明らかに制限戰爭です。

制限戰爭では政治の力がより強く作用すべきは既に述べましたが、幸にビスマルクの力でモルトケを押へ、よく協調が保たれました。それでも流石のビスマルクも軍の力を政治に協力させる爲には人知れぬ苦勞をし、帝國結成後プロシヤ軍閥の一部から蛇蝎の樣に嫌はれたのを見ましても、戰爭指導の困難さをよく我々に敎へます。

武力戰ではモルトケの戰略が分進合擊の有利さを敎へます。殊に兵力が段々大きくなつて來ましたから尙更らその必要を感じさせました。しかしモルトケの若さで、プロシヤの老將軍たる軍司令官達を統制するのには隨分骨を折りました結果、稍もすると部將の獨斷專行といふ美名の下に大本營の命令が徹底を缺きます。幸に戰さに勝つたが爲に、戰後極端に獨斷專行が稱揚されて、後日却つてこれが惡用され、第一次世界大戰には惡い結果を生ずることも大局上にはありました。

二十世紀の初頭行はれた日露戰爭は色々の意味から注目すべき戰爭です。帝政ロシヤの勢力を朝鮮及び滿洲の一角から擊攘するといふ明らかな戰爭目的があり、從つて一種の制限戰爭でありますが、當時のわが、國力からいへば、國家の死生を賭した一種の消極的無制限戰爭の覺悟でやりました。

從つて政治と統帥、陸海軍の協力上では色々難問に遭ひましたが、實に古今稀に見る賢明さを以て立派になし遂げられました。

西紀一九一四年から一八年迄四年四ヶ月の前世界大戰は世界史上、又人類發達史上から見ても劃期的の戰爭でせう。

この戰爭の詳細を批判することは到底此處では出來ません。著者の「戰爭指導の實際」はややその間の消息を述べて居ますから、それに讓ります。簡單に申しますと、

この戰爭の本質、目的を一言にして盡すならば、獨逸民族の延びんとする力の發展に對し、英、佛、露、次で米國が協同してこれを押へようとすることに原因します。つまり聯合國側の目的は自然防勢的、制限的であり、獨逸側は攻勢的、無制限的になり勝ちでした。

殊にカイザーとして、戰爭目的の上で獨逸の國力に照らし、それに相應する目的の限界をはつきり定めずに、自然世界帝國の建設を目ざすやに見えたことは、益々無制限戰爭に獨逸

を追ひ込みました。

獨逸指導部に於ける政治と統帥との協力も不充分でした。殊にルーデンドルフが局に當る樣になつてからは、戰爭目的と作戰との主客が轉倒し勝ちとなつたことはナチス戰爭論でもはつきりと認めて居ます。

これに比べますと、聯合國側は戰爭目的は比較的はつきりして居ましたが、その目的達成間即ち戰爭繼續間、餘りに政治上の考が强くて作戰を控制し、却つてその目的達成に暇取つた傾があります。

作戰の指導上では、史上未曾有の大兵力の運用、近世科學の生んだ尨大な資材の生產利用、殊に空軍、戰車、潛水艦、瓦斯の運用につき多くの教訓と示唆とを與へます。

總力戰の上からは、作戰を充分活潑にする爲にはまづ第一に國家が生存し、生產せねばなりませんから、國家の總力を第一線の陸、海、空軍に幾許ふり向け、後方にどれ程を配當すべきやといふ問題が最大の關心事となりました。

結局近代戰爭のあらゆる部門に亘り絕大の教訓と、研究項目とを提供したのです。

しかし、この戰爭の結果、始皇や歷山大王の企てたと同樣、世界を統一して永久の平和を求める試みは完全に失敗し、まだ人類の發達はそこ迄行き得ない、徒らなる悲願であることをはつきりと教へました。

第四章　綜合的戰爭論の主張

私は甚だ雜駁ながら以上の數章で戰爭を色々の角度から眺めたつもりです。その結果として私は戰爭を單に一つの角度のみから覗いただけで結論することの危險有害なことを絶叫したいのです。

歷史上から一寸見ても、人類が舊石器時代に入つたのが十萬年位前でせう。それから中石器時代が今から一萬四千年頃に始まり、次で新石器時代は西紀前一萬年位前からのことです。私の述べた戰爭史論は西紀前六千年つまり新石器時代の中期からのことに過ぎません。そして戰爭も、今日に至る迄殆んど同じ樣な意志、動機で行はれ、同じ樣なことを繰り返してゐるかの感を抱かせる位ですが、よく考へて見ますと、そこに甚だ緩徐ながら進步、少くも變化が窺はれます。つまり戰爭の研究を科學的に法則づけるには我々はまだ實驗が不充分といはなければなりません。しかし實驗はあくまで實驗でありまして、これを粗略に取扱ふなんぞは以ての外のことでせう。

實驗による戰爭法則の發見が不充分として、扨てそれならば、實驗を離れた推理によつて戰爭法則を見出さうとする企ても、これ亦人類發達の跡を顧みるとき甚だ危險でありまして、それは我々が第二章戰爭理論で見て來たばかりであります。さればといつて、我々の現在の知能の程度では全然これを閑却し得ることも肯定出來ぬ有樣です。

更らに一步を進めて直觀、瞑想の力によつて、つまり理想派哲學の主張によつて戰爭を法則づけることも、我々の見た通り甚だ心もとないことです。

かく申しますと、私の主張は懷疑的、或は失望、煩悶的の樣にきこえますが、私の考ではこれこそ人類發達の一段階上に生きる我々として、將來に向ひ大きな希望や無限の樂みを感じさせるものと思ふのです。

つまり人類は戰爭といふものに對し、歷史によつて實驗的に研究を積み、段々より多くの法則を發見することに努めると共に、他方概念的認識をも進め双方互に保證しあつて、適切な調和を求める、そこに堅實な戰爭法則や理論を展開することになれば、我々の研究は無限

の發展性をもち、人類のあらん限り向上進歩するものと考へられませう。

又戰爭の多樣性から見ても、精神、物質の兩方面に亘つて公正な認識が絶對に必要ですが、兎角研究は己の好む所によつて一方に偏し勝ちですからこれ亦綜合的研究を要します。殊に近代文明の生んだ國家間の總力戰は尙更ら複雜性を帶びて來ましたから、綜合的認識が必要です。しかもそれには客觀的、實驗的研究の結果、本質上の主客を轉倒しないことも注意すべきでせう。

結局人類は他の動物と異り思索する强い力を持つて居るのですから、既に歷史の證明する樣に廣く且つ正しい意味に於ける科學的の一般思索は今日迄相當に發達し、將來も無限に發達しませうが、戰爭の研究もこの埒外に置かれる筈はありません。もしもその埒外を越える樣な傾向の研究があれば、それは戰爭そのものを冒瀆し、折角の悲願も研究者の欲する所とは凡そ反對の悲しむべき結果を招くでせう。

殊に現代の樣に世界的轉換時期には我々の現に見ます樣に數多くの戰爭が行はれ、人類は相當に動搖してゐます。これは我々の知れる限り歷史上つまり實驗上物事の進歩する基礎時代でありますから、謙虛眞摯な態度をもつて研究すれば戰爭の研究も一大進歩をなすものと考へられますが、反面かかる際にあり勝な——歷史はよくこれを敎へて吳れます——興奮的な輕卒や獨斷やは、却つて戰爭研究の一時的退歩、失敗を來すことになりませうから、深く愼むべきことと私は考へるのです。

以上第一編で述べましたことは、古代から今日迄先人の歩いた道を色々の角度から大觀しまして、この世界的轉換期に於ては、我々は先人の跡を承け、謙虛、眞摯、熱意を以て、廣く正しい意味に於ける科學的態度で戰爭を研究するの必要を述べたつもりです。

第二編　現代戰爭論

第一章　現代戰爭の大觀

第一節　絶對戰爭と制限戰爭

この言葉も理論に長けた獨逸人によつて稱へ出されたもので、もしこれが單に觀念の遊戯に過ぎぬならば私は觸れたくないのですが、現代の事實として相當重要な意義をもち、充分に檢討しておくことは必要と考へますから、なるべく簡單に研究することにします。

まづこの言葉を稱へ出したクラウゼウィッツの所論を紹介しますと、

「戰爭が、敵を屈服せしめてわが意志に從はしめんがために行はれる暴力行爲であるとすれば、その唯一の目的は敵をうち倒すこと即ちその抵抗力を奪ふことにある。そして事實に於てもかくの如き純概念的に近い戰爭が屢々行はれてゐる。

敵から抵抗力を奪ふための一般的客體としては、敵の戰鬪力、國土、敵の意志の三個を

あげ得る。

戰鬪力はこれを壞滅する必要がある。

國土は占領されねばならぬ、蓋し國土から新たなる戰鬪力を生ずる虞があるからである。

しかし右の二者が成就されようとも、敵の意志が屈服されぬ限り、即ち敵國政府とその同盟國とをして媾和條約に調印せしめ、若くは敵國民をして降服せしめぬ限り、まだ戰爭は終結したものと見ることは出來ぬ。

以上の三者中戰鬪力は國土防衛上必要なものであるから、まづこれを壞滅した後その國土を占領し、次に敵に迫つて和を媾ぜしめることになる。

現實の戰爭に於て、敵の抵抗を不可能ならしめることに代つて、媾和の動機となり得るものが二つある。第一は勝算の少いこと、第二は勝利を得るためには餘りに大きな犧牲を拂はねばならぬこと、これである。

媾和の動因として尙一層有力なものは、既往及び將來の力の消費に關する考慮である。

戰爭が盲目的な感情に由來する行爲でない以上、政治目的の價値如何によつて、これが爲に用ひらるべき犧牲の大小も定めらるべきである。從つて力の消費が政治目的の價値に釣合はぬ程大となれば、戰爭は中止され、媾和が締結されるに違ひない。

以上我々は敵の倒滅こそが作戰行動の自然的目標であり、若し概念の哲學的嚴密さを求むれば、結局それ以外に他の目標はあり得ないことを知る。それ故どちらか一方が倒滅されぬ限り、軍事的行動の休止はあり得ないとの推論を下し得る。

しかし現實の問題としては、戰爭の內的な必然性により、作戰行動の發現が妨げられ、又その力が緩和されることも述べた。

古くは歷山大王及びローマ時代の若干の戰役、近くは奈翁戰爭が、現實として絕對的に完全な姿で行はれた。若しこれ等の戰爭がなかつたならば、絕對戰爭に就ての吾人の思想に現實性のないことを稱へるものがあつても、これを責めることは出來ない程である。

古來行はれた最大多數の戰爭が不徹底であつたことにつき、若し我々がこれを十把一とからげにして非難するといふことがあれば、これ程不遜なそして恥しらずの事はないであらう。加之、都合の惡いことには近き將來に於て再びこの種の制限戰爭が出現しないとも

限らないことだ。」

クラウゼウィッツがこの戰爭論を思索し、著作したのは西紀一八一〇年から一八三〇年頃の間であることを我々は回顧する必要があります。つまりこの時代は近代國家が續々と生れ出る時でありまして、彼れの祖國プロシヤも將來大獨逸帝國をうち建てる準備工作中の時代です。即ち一八七一年ウィルヘルム一世によつて獨逸帝國が創立される迄には、この著述後四十年を要して居ますし、その間プロシヤは、對丁抹、墺國、佛國の三戰爭をやりましたが何れも制限戰爭であつたことは彼れの豫言が適中したものとも言へますし、この時代が然らしめたともいふべきでせう。

次に最近のナチス戰爭論で、タイゼンの述べる所を御紹介します。

「近代戰爭は單に武器ばかりでなく、國家の全體によつて戰はれる。一切の國家生活はこの戰爭の目的に向つて、單に政治上、軍事上だけでなく、經濟上、財政上、商業政策上、宣傳上に於て整備される。

その結果、近代の廣汎な破壞手段は何人に對しても、假令僻遠の地に對しても容赦しない。全領土は戰場となり、戰爭は全體的戰爭であり、その本來の野蠻な原始的形態をとり、全體に對する全體の無遠慮な鬪爭の性質を帶びるに至るであらう。かくて戰爭は絕對戰爭の概念に接近して來る。かかる戰爭はその過程に於て敵國家に對し何等の寬容をも知らない。唯、捕虜、負傷者、降服せるもののみがこれから除外される。

孤立的に武士的に戰うた戰爭は、中世紀の末葉から近代まで續いたが（このタイゼンの觀察は、單に歐洲を見たのみで世界的に必ずしも正しくないことは第一編第三章戰爭史論で著者が述べた通りです）、その原動力の多くは例へば、王朝權力の無謀な伸張、世襲家系の襲續、王室の特殊野心の達成、權力的野望等々の樣に、比較的に暢氣な動機に過ぎないことが屢々であつた。

國家は彼等の生活の必須性と殆んど關係を有しないか或は共通の利害を持たぬ所のかかる戰爭に對して、心中屢々冷酷に對立したことは當然である。彼等は王國の命令には從順に從つた、しかし感激的思想への飛躍を缺いてゐた。

軍事行動の擔當者は、封建制度や傭兵制度から發展した職業的兵士であつた。彼等は一

般の國民に代つて、戰爭のための特殊階級として獨特の生活を送つた。彼等は多少とも形式的に組立てられた戰鬪方式に從ひ、且又費用をかけて募集した人員器材を出來るだけ大事にしながら戰爭を行つた。

戰鬪決定に當つて屢々意識的に制限されるこの種戰爭は、一種の人爲的操作即ち制限戰爭であつて、その根本的性質から判斷すれば、自然法からの離脱といふことが出來よう。

總力戰は前世界大戰でも尙これが凡ての場合に於て充分に行はれたとはいへなかつた。しかしそれ以後に於ける技術の物凄い發展の結果は、近代的軍備を完了した國家にとつて、戰爭は全體的な國民戰爭たる以外の形態を考へることは出來なくなつた。」

タイゼンの說はクラウゼウィッツに比べて大そう槪念的、理論的、獨斷的でありますが、絕對戰爭と制限戰爭の意義については、讀者は一と通り了解されたことと信じます。

さてこの二人の說の間には相當の距りが目立ちます。勿論それは二人の住んだ時代の相違から來てることが多いのです。つまりクラウゼウィッツの時代は近代民族國家が創生續立される初期の時代であり、又氏は純正中庸な思想を以て比較的自由に論ずることの出來た時代に居たのですが、タイゼンの時代は、歐洲に於ける近代民族國家が續出しきつて今や却つてこれが集約せられるやの時代ですし、又氏はナチス政府の下にナチス思想を以て戰爭を論ずるより外に途のない時代に住んでゐることです。これが氏をして多少ともに獨斷的にならせたのかも知れません。

それは兎も角、この二說の最も大きな相違は、ク氏が理論上絕對戰爭の多かるべきに拘らず、事實の問題として、戰爭そのものの複雜性から起因して、その徹底性の發現が妨げられ、緩和され、そこには理論上からも、戰爭目的の價値とそれに必要な犧牲との釣合ひといふ自省が起ることを說いて居るに對し、タ氏は近代戰が全體に對する全體の無遠慮な鬪爭であり、敵國家に對し何等の寬容をも認めず、僅かに負傷者、捕虜、降服者の外は全部が倒滅せらるべきを說いてゐる點です。

タイゼン氏の說は餘りに抽象的、獨斷的でありますが、私は現代情勢の大きな現象の一つとして、民衆全部の覺醒擡頭、それが目下の所、民族の團結といふ形式で現はれてゐるものと考へます。この點から見ても現代の戰爭は、民衆全部の盛り上る意志を基調とし、それが

民族的要望となつて團結的に求められますから、自然これはタ氏の說を裏書きする有力な一素因と考へます。

しかし人類本能の半面ともいふべき、つまり戰爭目的とその達成に拂はるべき犧牲との比較、自省といふことも、ク氏の言ふやうに見脫すことの出來ぬ現實の問題です。特に現代文明が兎角物質文明に奔り易い點からも、かくいへると考へます。又現代民衆の敎養から見てもまだ〳〵理想の域に達して居ませんから、假令一時群集心理によつて、民族的要望が多少煽情的の方法で盛り上つて來ても、犧牲の大きなのを見て冷靜に自省の境地に入ることがないとは最近の歷史的事實を見ても決して斷言は出來ぬ筈です。

一九三九年起つた現大戰の一段階に置きましても、同年九月對獨宣戰したフランスが、獨逸の波蘭討滅間は無爲に過し、翌四〇年五月十日から獨逸の大攻勢を受け六月二十二日には早くも白旗を揭げて停戰の締結となります。これは餘りに脆いと誰れもが考へませう。あの一八七一年普佛戰爭ではセダンの大敗で佛國はその野戰軍の投降を見ましたが、ガンベッタの急造國民軍で尙八ケ月頑强な抵抗を續けたのに比べて異樣の感にうたれます。この原因については多くの語るべきことがありますがそれは略しまして、この四〇年佛國の降服となつた戰爭は結果から見て一種の制限戰爭であり、佛國民族の戰意が中途で挫折したものであり、その最も大きな動機は佛國民衆の大部が戰爭目的とその犧牲との釣合ひに關し自省に驅られたものといひ得ませんでせうか。

結局現代の情勢は絕對戰爭の可能性が增大しましたが、戰爭それ自體の本質上制限戰爭がないとは決して言へぬことになりませう。

第二節　短期戰爭と長期戰爭

短期といひ長期といひこれは比較的の言葉でありますから、確かな限界はない筈です。從つて純理論的にこれを對立させて討究することは一見無理であり又無用とも考へられますが、事實の問題として現代戰爭を大觀するには一應觸れて置く必要がありさうです。

前世界大戰直前の獨佛最高當局者は、政治家も軍人も短期戰爭論を主張し豫期しました。その要旨を簡單に申します（くはしくは拙著「戰爭指導の實際」七三頁乃至七六頁參照）。

「近世の軍は國民の全壯丁を召集して編成する大軍ですから、戰爭と共に國家の社會的生活が一時中絶しますし、又金融財政上からも到底永く戰費を出せません。又當時一般の社會生活が豪奢であつたに拘らず戰爭が國民的になつた關係から、政府は民心の趨向上長期戰爭をすることは出來ない。結局戰爭は第一會戰で全兵力を以て疾風迅雷的に行はれ、それで大體かたがつく。」

結局この短期戰爭論は、經濟上と國民精神の兩方面から見て長期戰爭は出來ぬといふことですが、これには理論上の矛盾と缺陷とがあります。つまり當時既に民衆大部の覺醒擡頭による政治機構が出來て居ればこそ、國民戰爭ともなり大兵力の召集ともなつたのですから、自然戰爭の動機、目的が民衆大部の盛り上る力によつて支持されぬ限り戰爭そのものが勃發せぬ道理です。それゆゑ若し戰爭が始まつたとすれば、國民精神も國民經濟もどんな苦勞をしようとも戰爭目的を達成せぬ限り終ることを欲せぬ筈です。

しかしこれは理論でありまして、當時の實情はまだ、國家の政治機構上に、民衆大部の意思がはつきり現はれる迄に行かぬ國もあり、又社會主義も民族社會主義の色が薄く、寧ろ國際社會主義の臭ひがありました。それにも拘らず兵力だけは全國民の召集といふ形式をとつて居ましたからそこに矛盾が起るのは當然です。從つて當時の各國政府は大軍を以て長期戰をやるだけの計畫もなければ、又その準備に必要な經費施設を議會に平時から要求し得なかつた點もあるのです。

若し現代の國家當局者中に當時の獨佛當局者と同樣の立場に置かれ、自然同樣の考へを持つ人がありとすれば、長期戰、短期戰といふ言葉は現代でもはつきり區別し得る譯ですが、しかしこれは稀でせう。

更らに別の觀點からしますと、戰爭は敵味方の相對的現象ですから、一方の國と他方の國との豫期するつまり計畫する戰爭期間の長短によつて、現代でも長期戰、短期戰といふことは現實の問題となり得る筈です。

この相對的に見た長期、短期戰爭の問題は現代戰では大そう重要なことと私は考へますが、今迄の戰爭論者中には餘り觸れて居る人がない樣ですから、私の考へを一と通り簡單に述べて見ます。

現代戰爭の一つの大勢は、所謂持てる國と持たざる國との爭ひといふことが出來ませう。廣大な地球上の地域に、充分の資源と、これから生産される商品を賣りつける販路とを持つ國は滿足し、從つて現狀維持を願ひます。これに反して、立ち後れてこれ等のものを持たない國の中で、段々優者となりつつある民族國家は、內に張り切れる樣な膨脹力に惱み、外に向つては現狀の壓迫に苦しむ結果、自然に戰爭が起ることになります。

前者に屬する國は現狀に愉悅し、幸福を滿喫し、長夜の宴げのいつ迄も續かんことを願ひ、自然に戰爭の必要を認めず、これが極端になりますと、積弊の窮まる所、色々の廢頽的現象が起つてくることは歷史の敎へる所です。

かかる國では自然平時の戰爭準備は不充分であり勝ちですから、戰爭の臭ひが濃くなつてからか、或は戰爭の勃發後に眞劍な對策がとられます。工業力も、經濟力も、人力も、廣い領土もあるのですから、唯この力が平時一般の幸福增進方面に向けられたものを、今度は國防方面に方向變換をさせるのです。しかしそれが效果を現はすには相當に長年月を要しますから、勢ひこの種の國では長期戰爭を實行することが必要となります。しかし既に國民精神が腐敗し切つたり、或は力の方向變換のやり方が下手ですと、遂に敗戰となるのが古來歷史的實驗の結果一つの法則となつて居ます。

これに反しまして、所謂持たざる國の中で段々優者となりつつある國は、自然剛健な民族精神や簡素な生活に慣れては居ますが、その膨脹せんとする力は自然の法則に從つて戰爭を起すことになります。

この種の國も古代の戰爭では、持てる國に對してよく長期の戰爭に勝つことが出來ました。然るに現代戰ではそれが中々難しい傾向となりました。それは既に第一編で我々が研究しました樣に、戰爭の進步に原因して居ます。つまり古代の樣に戰爭が剛健な精神と素朴な生活に慣れた民族により、原始的な弓矢や弩石機位で行はれ、糧食は占領地の進步した敵國のものによつて足りる際にはよかつたのです。

所が現代の戰爭は科學の進步によつて精巧なしかも絕大な數の武器を必要としますから、これには多くの資源と工業力とを要します。ですから長期戰爭となれば多大の資源と工業力とを要する譯ですが、自然これ等の點では新興の持たざる國は有利とはいへません。

從つてこの種の國では平時から臥薪嘗膽して、所謂高度國防國家の體制をとり、軍備を盛んにし、銃後の推進力も出來る限りのストックを準備し、敵側が開戰と共にその享樂的體制から戰爭的體制に變換するため、手間どつて充分にその戰爭遂行力を發揮しないうちに片付けることを希望し又準備するのは、現代の情勢では自然の歸結ともいへませう。

つまりこれを端的に申しますと、所謂持てる國が持たざる國に比べて長期戰爭を欲し、持たざる國が持てる國に比べて短期戰爭を目論むのは現代戰爭の一つの趨勢とも言へます。從つて戰爭の勝敗も所謂持てる國が持たざる國の爆發的な當初の戰爭力を受け流し、その地力を追々と發揮しようとつとめるのに對し、持たざる國が平時の準備を利用して早く勝敗を決しようとつとめる双方の努力の爭ひであるとも言ひ得ると考へるのです。

しかしこれは本質上の傾向を極端に述べたもので、現實に於て所謂持たざる國がよく長期戰を敢行して勝つた例は史上枚擧に遑のない程で、寧ろその方が多いのです。それに就ては次の章で詳しく述べることにしますが、これは戰爭が單に物質上の多寡によつて決するものでなく、精神的の力が最も大きく働く例證となります。持てる國が物質文明に醉ひ腐敗糜爛した生活に墮すれば、到底長期戰爭は準備し計畫しても實行が出來ぬ譯であります。

第三節　聯合戰爭

聯合戰爭の問題は我國では理論的に又具體的には餘りに論ぜられて居りません樣ですが、世界的現代情勢から見て當然起るべき問題です。

ナチス戰爭論でタイゼンは冷靜に次の樣にこの問題をあつかつてゐます。

「多數の國家がある目的のため同盟を結び、一乃至數個の敵國に對し共同鬪爭を起す場合聯合戰爭が成り立つ。一八一三年―一五年の解放戰爭に於て同盟せる歐洲諸國は、奈翁一世を倒した。又一九一四年―一八年の世界戰爭に於て二つの同盟が互ひに戰つた。

聯合戰爭の利益は、一般的に見て、同盟した國の資材、兵員を利用し得ることである。反對にその微妙な弱點は、同盟した双方の利害乃至その戰爭目的が、緊密に且永續的に結ばれて行くことが極めて稀な事にある。又同盟せる國が各自勝手に動き、或は忽ちにして對立するに至る點にある。

和合統一の缺如に對する兩國民の邪推、軍當局の意見の不一致は、政治地理的關係の國難を、時と所とを問はず屢々もたらすに至る。

聯合戰爭によつて得られる優越性は、豫期せざる磨擦や衝突によつて全く帳消しにされることが屢々である。即ち同盟國相互間に國力の差異がない場合は、お互ひにその下風にたつことを喜ばず、又差異がある場合には、弱小國にとり彼等の利益は、所謂「ライオンの前」に於ける危險に曝される譯である。

從つて聯合戰爭の目的、目標が嚴密に決定されない場合、統一ある戰爭遂行、作戰指導に關する明確且つ緊密な協定が必要である。

他國と同盟して戰爭を始めた場合、多邊的戰爭の問題が生れる。しかしこの場合聯合側に於ける優越が左程に期待出來ないときには、一方國はそれだけ早く勝利を得るであらう。即ち聯合國の團結が強ければそれだけ過度の緊張のため却つてその行動が自由を缺き、又反對に團結が弱ければそれだけ綜合した力の發揮が困難となるからである。

反對に一方國は時間と場所とを巧みに利用し、分裂せる敵を各個に擊破し得る。この內線作戰の妙味はフリードリッヒ大王に勝利をもたらしたが、奈翁は最後にこの問題で失敗しました。」

既に述べました樣に、現代では世界の一局部に起つた紛爭も、各國の利害關係から多くの場合世界的の影響を與へ、利害を略ぼ同じくする集團國家群間の紛爭となることが多いのですから、聯合戰爭の問題は現代では大そう重要な意義を持ちます。

この聯合戰爭は平時からの同盟關係によつて行はれるものと、戰時になつて同盟又はその他の約束によつて行はれるものとありますが、何れの場合でも、まづ第一に聯合國間の戰爭目的の完全な諒解一致が必要です。歷史的に又理論的に見ても、これが充分でない時には、武力戰やその他の戰時的努力が完全な協同戰線を作り難いことを示します。又假りに一時的に協同戰線が出來上つても、戰爭の進行とともに、戰況の良い時は分け前の問題から、惡いときには犧牲負擔の不均衡といふ觀念から、自然相ひ離反する力が擡頭し、遂には各個に擊破されることになり勝ちです。

第二には國防地理の上から聯合國家が適當な關係位置にあり、又その武力が相互援助に役

立つ樣な長短相補う組織を持つことが必要です。つまり戰略上の態勢が自然に有利になる樣な關係位置にあること、又相互の武力が戰爭遂行上、長短彼此援助して武力戰の敢行を効果的に實行し得ることは實に大切なことです。若しこれが反對ですと、一國の參加は却つて軍事上の負擔の增加、手足纏ひになることもあるのです。

第三には總力戰遂行の爲經濟上の相互援助に便利なことが必要です。つまり資源や生產力の關係で有無相通ずることが出來、戰爭繼續にそれが有効に役立つことです。

第四には文化の上で相互の援助が緊密に行き得ることが必要です。これは長期戰爭では大そう重要なことで、相互の文化に共通性のあること、つまり歷史的事實であることは、相互の信賴や、交涉やの爲何程か役立つことで、これは無形上のことですが、戰爭繼續間の幾變轉にあたつても、協同力を維持增進する爲、必要缺くことの出來ぬ役割を演ずるものです。

結局これ等の條件が備はつた聯合戰爭は理想的なものですが、事實それは中々困難なことです。それゆゑ少くとも當初に協定を結び、戰爭目的、軍事及び經濟上等の相互援助の大綱を定め、殊に相互の諒解なしに單獨媾和をせぬ約束を結ぶことが必要です。この協定は戰爭の進行中形勢の變化に伴つては、屢々會合してその强化なり修正なりをする必要も起ります。

前世界大戰は大規模な聯合戰爭でありまして、多くの有益な教訓を與へました。それ等については、拙著「戰爭指導の實際」を御覽になれば判ります。大觀しますと、聯合國側では國力の相ひ似た英、佛、露、米といふ國家群があり、同盟側ではずば拔けた國力の獨逸を中心とし、これに次ぐ墺國と、更らに國力の大そう劣つた勃牙利、土耳古といふ國家群がありました。

そして協力のやり方には各々巧拙もありましたが、大觀しますと、形勢の宜しい時には聯合側では中々本氣になつて協力する雰圍氣が成り立ちませんでしたが、敗戰の一步手前迄來ると俄然眞劍に協力が行はれました。これに反して、同盟側では獨逸の形勢のよいうちは大體協力がよく行はれましたが、一と度形勢の惡化すると共に協力の雰圍氣は飛散しました。これは聯合戰爭の本質上からくる當然の現象と見られます。

現代から近い將來に於て、廣地域生活圈が形成せられますならば、各生活圈の中に各々その中心となる國家が出來ませうから、聯合戰爭もまへに述べました觀點から大そう重視すべ

きものと考へられます。

第四節　現代戰爭の趨向

以上述べましたことを綜合しますと、朧氣ながら――從つて危險性も相當にまだありますまづ絶對戰爭の問題です。現代國家が民族として團結し、民衆全部の要望が相當强く反映される關係から、又この要望の內容が廣汎な物質上の欲求と思想上の要望から基礎づけられて居ますから、自然現代戰は絶對戰爭に近づく傾向が濃厚の樣です。

――現代戰爭の趨向が窺はれる樣です。

しかし民族の要望は各々の民族の現狀により違つて居まして、大觀すれば、新興の民族、つまり將來に延びようとする潑剌とした自然的欲求を持つものもある一方、既に一時的に見て發達し切つて、降り坂のものもあります。

又一方民族全體の要望といふものも、その群集心理の上から見ますと大そう根づよい點もありますが、他方一時的に宣傳の力によつて出來上つた要望は、時と場合によつては存外淡雪の樣に消え去ることも理論上は勿論、歷史上にもその例は乏しくないのですから、要望の根據が弱い民族國家では、制限戰爭の行はれることも十分豫想出來ます。

戰爭繼續の期間は十九世紀後半期に行はれたものよりは現代では自然長期に亘る傾向にあるを思はしめます。一八六六年普墺戰爭は僅かに三ケ月、一八七〇年始まりました普佛戰爭は十ケ月、一八七七年始まりました露土戰爭は十一ケ月、一八九九年からの英、トランスバール戰爭は十八ケ月、日露戰爭は十九ケ月、前世界大戰は四年四ケ月といふ樣に段々長期戰爭となつて居ます。將來絶對戰爭に近い戰爭が多くなる傾向にあること、又集團國家群間に行はれる聯合戰爭が多くなる傾向にあることは、どうしても戰爭の長引くことを思はせます。

しかし現代戰は絶大の資材その他國家の總力を要求しますから、所謂持たざる國では平時からの準備により短期間に戰勢を決する樣極力努めます。從つてもしもこの種の國で適當に戰爭が準備せられ指導せられるならば、將來存外短期戰が起らぬとも限らないものと思はれます。

聯合戰爭は現代では益々多くなる傾向にありますことは前述の通りです。そしてそれには

二つの種類があり、一つの中心的强力國家を廻つて聯合するものと、勢力に餘り遜色のない諸國家の聯合するものとあり、その何れにも利害と特長がありますから、充分これを考慮に入れて戰爭は指導さるべきです。

こんな樣に大觀しますと現代戰が略ぼ我々の眼前に髣髴として現はれる樣な氣がします。つまり現代戰では、その戰爭目的が民族の總意により、盛り上る樣な要望に基礎づけられ、しかもその上、聯合國家間にも戰爭目的につき自然の共通な利害關係を持つことが必要となります。次で現代戰の規模と、その影響の深く廣いのに鑑みまして、戰爭目的は國家又は聯合國家の國力に相應はしいことが必要です。如何に要望が大きく又正當であるにしても、自力が足りませんと思はぬ蹉跌が來ます。これは指導者の注意せねばならぬ所でせう。

新興の後進國の現代戰爭では殊に平時が物を言ひます。即ち適正に調和された戰爭目的と國力とにより、これを平時から充分に準備して開戰と共に爆發的に使用し、速に戰爭を終結することが望ましいのです。しかし乍ら若し一般の情勢判斷上短期間に敵を屈服せしめる望がない時には、速に武力を以て資源地帶を獲得し、その建設により所謂持てる國となりつつ長期戰に勝つことになります。

これに反して既に滿ち足りた國では、自然に戰爭となつてから急速に戰爭準備が行はれ勝ちですから、相手國の爆發的衝力を一時持久的に受け流し、その間に準備を完整して眞面目な攻勢的戰爭に移ることになり勝ちで、現代戰はこの三大傾向の對立により行はれると申しても過言ではない樣です。

これ迄述べました現代戰爭趨向の基礎理論は一見大そう單純でありますが、單純なだけに深刻でありまして、扨て實行となりますと、最も酷烈な現實となつて現はれ、眞に國家生死の別れ目となります。これを國民戰爭とか全體戰爭とか或は總力戰とかいふ言葉によつて表現されるのも故あるかなと私は信じます。

第二章　總力戰の準備

第一節　戰爭本質への回顧

以上述べました所により私は大體現代戰の貌を描きました。しかし愈々總力戰の具體的なことを述べる前に、今一應戰爭の本質につき回顧し、必要な補足をすることの必要を痛感します。

戰爭の動機とか妥當性とかについては異說はありますが、大體一般の傾向はダーウィンの進化論による、生存の爲の苦鬪、自然陶汰の法則によつて人類進化の一過程として必然的なものと認められてゐる樣です。

戰爭の實體については、これ又異說はありますが、クラウゼウィッツの說による、戰爭とは敵を屈服せしめて、自己の意志を實現せんが爲に用ひられる暴力行爲である、といふことに大體落付いて居ます。

しかしこれだけでは、現代の興奮と刺戟の中では、まだ戰爭の本質をはつきりさせて呉れぬ樣です。今一步踏み込んで戰爭の本質を討究することも、これから先きの研究を明快にする上から是非必要と考へて、本節を設けた譯です。

人類の知的活動が如何に大きいにしても、自然界の法則——勿論これは現在我々には全的に又は正しく理解されて居るとは申されませんけれど——から外に脫逸し反抗する力があるとは考へられません。

そして戰爭に關する限り、自然界の法則として、生存の爲の苦鬪、自然陶汰の二つが大うつしになつて現はれますが、これは言葉を換へて言へば、つまり鬪爭と協調との交錯からなる進化であります。從つて人類の社會生活を單に鬪爭的のみ、或は協調的のみから論ずるのは何れも過激に過ぎる譯でせう。

それ故人類の集團たる國家の生活には、鬪爭的なものと協調的なものとが交錯して居ることは古來の事實であります。そして現代ではそれが平時には國際的に經濟、金融、貿易、思

想等の國際關係となつて現はれます。この國際關係の表現手段としては政府間の外交、又は民間の交通といふ道筋によつて居ます。又その方向から申しますれば、これが密接な協力か或は相當激しい競爭かになりますが、何れにせよ世人はこれを以て戰爭とはいはず、平和狀態と認めることに一致してゐます。

人類本能の半面ともいふべき、自己保存の願念から見ましても、國家はその幸福と榮譽を增進するため、出來る限り平和的國際關係の手續によることは、歷史上でも理論上でも肯けることです。從つて主觀的に申せば、戰爭とは平和的手段によつてその目的を達することが出來ぬと信ずる場合、暴力つまり武力を行使してその目的の達成を計る。これが戰爭であるともいへませう。

ですから、平時平和的手段によつて經濟、金融、貿易、思想上の競爭をしても、それは程度によつては激しいものがあるにせよ、國際關係の緊張に過ぎぬのでありまして、これを戰爭とは申さぬ譯です。從つて暴力行使を伴はずに、つまり武力を行爲せずに行はれる國際的競爭を戰爭とは名づけぬことに解されて居ます。

近頃時として平時から經濟戰爭や思想戰爭が行はれてゐるやに說かれてゐる向もある樣ですが、これは平時から戰爭が行はれてゐるやの矛盾にぶち當りますのみならず、戰爭と平和との區別もなくなり、議論の混沌性が增大するのみの樣に考へられます。この思想の中には人類の社會生活は全面的に鬪爭であり戰爭であると觀る傾向が潛在して居まして、どうも極端な樣に考へられます。

しかしクラウゼヴィッツの所謂暴力とは武力のみをいふのか、又武力とはどういふものを指すのかといふことには、尙一應の檢討を要しますが、これは理論と實際の上から見て相當複雜した問題ですから、詳しく述べる紙數を持たぬことを殘念と考へます。

純理論的には暴力として、經濟、金融、貿易、思想方面の暴力はないとは言へませんでせう。しかし事實の問題としては武力を伴はないこの種の行爲を戰爭と見るかとなりますと、現代ではこれを戰爭と見て居ないことは既に述べた通りです。現世界大戰でも中立國の態度が某國に對して甚だ好意を持たない事例は澤山ありますが、世界ではこれを戰爭とは見て居ないのです。つまり平和狀態に於ける酷しい競爭の一部と解釋してゐる譯です。

武力とは何ぞやの問題も軍縮會議では常に困難な論爭をまき起して居ます。從つて戰爭とは武力行使を伴ふといつても、理論上は色々に說をたて得る餘地がありませう。例へば武裝した警察官や稅關吏の行動はどう見るか、或は激昂した半武裝民衆の行動はどうかといふ樣なことです。しかし事實に於ては、その國の陸海空軍に屬する兵力の行使を以て武力の發動と見てゐるのが國際慣例の樣です。

平和的手段によつて目的を達することが出來ぬと信ずる場合の武力行使を戰爭といふことについても近頃疑問がある樣です。これは空軍その他の科學兵器の使用上から電擊作戰が要求せられ、その爲十九世紀式の永たらしい外交交涉を端し折つて、電擊的に宣戰布告が起るのを見ての議論です。

しかしこれも冷靜に事態を解剖しますと、たとへ開戰間際に緊張した外交交涉はないにしても、前々から當事國間には色々の要求交涉が行はれて居ます。つまり主觀的に一國が最早口頭、文書の交涉では目的達成の見込なしと信じた時に電擊戰爭が起つて居ます。結局これは主觀と客觀との相違に過ぎない樣です。

そこで戰爭本質への回顧として結論的に申しますと、戰爭とは敵を屈服させて、我が意志を實現せんが爲に用ひられる暴力行爲である。更らに一層主觀的にいへば、戰爭とは平和手段によつてその目的を達成することが出來ぬと信じる場合、武力を以てその目的を達成する行爲をいふのであるといふことになる樣です。

第二節　戰爭本質と總力戰との關係

前節で述べました戰爭本質と、本編第一章第四節で研究しました現代戰爭の趨向とを考へ合はせますと、そこに當然種々の關係が生れて來ることを知ります。

まづ第一に目に映ずるのは、戰爭の本質には概念的に見て古來一向變りのないことです。つまり現代戰爭が一種獨特の本質を持つやに考へるのは、中世紀の戰爭混沌時代の夢がまだ醒めぬからで、古代戰爭を見、又戰爭本質の理論的結果を顧れば、決して本質の變化はないことが肯けます。

それどころか、現代戰爭は概念的、純理論的戰爭の本質に近づきつつあり、その傾向が濃

厚であり、全部とは言ひ得ませんが、現代戰爭は概念的にその本質上純粹に近い戰爭が多くなり、又近き將來も然りといふことになります。

第二に反省すべきことは、本章の總力戰準備といふことに就てであります。つまり準備と實行といふことの區別であります。

前からの研究を反省しますと、戰爭とは武力行使の伴ふことを條件としますから、武力行使の開始から武力行使の終る迄が戰爭であり、その前後は戰爭ではない筈です。

言葉を換へて申せば、武力行使前の時代はまだ平和狀態でありまして、つまり總力戰の準備時代であります。又戰爭の末期休戰媾和の進行中は單に一時的の武力行使の中止でありますから、通常各國ともにこれは尙戰爭の實行期間と見て居ますが、平和條約の成立と共に戰爭は終つたことになる譯です。

以上述べましたことは純理論的であり、研究上截然とした區別が必要だから申したことです。しかし事實になりますと中々さう行かぬ場合が多いのですが、歷史の敎へて吳れる所によると、戰爭指導の當事者は矢張りこの理論的の概念で冷靜に指導すべきことを敎へて居る様です。

つまり總力戰の準備は、戰爭のための戰爭を準備するものではなく、まづ國家の目的を定めてそれを平和的に達成することに努め、殊に國際關係が緊張して來る場合にも、武力行使になる迄は一方に於て萬一の場合の戰時的處置を講じますと共に、他方まだ殘されて居る平和的の各種の手段をつくして、無血的に解決することを忘れてはならぬ筈です。

しかし歷史的の事實を見ますと、國際關係がまだ平靜な時代には總力戰準備が甚だ不充分に捨て置かれ、さて緊張して來ますと急に不完全な準備が始まり、興奮の結果却つて平和的手段が顧みられず、急に戰爭のための戰爭に卷き込まれる事例が外國には多いのです。

また戰爭の末期休戰の臭がしますと、永い興奮の反動で急に弛緩が現はれ、まだ一時的武力の中止に過ぎないうちに、最早戰爭の實行が終つたかの感を抱かせることも多い様です。

これ等の事實に鑑みるとき、戰爭の本質と總力戰との關係を冷靜に諒解すべき必要を痛感させる様です。

第三節　總力戰準備の三大傾向

三大傾向と申しましても理論上截然たる區別がある譯ではありませんが、事實を見ますとそこに三つの傾向を見脫がすことが出來ません。

現狀に滿足し、繁榮と幸福とを滿喫してゐる國家は、歷史の敎へる樣に平時の總力戰準備に於ても微溫的です。これは理論上から申しても當然肯けることです。つまり滿足してゐる國の國家目的は一言にして盡せば現狀維持といふことでせう。わが世の春の永からんことを願ふ心理です。殊に大衆の要望が段々物をいふ現代では、假りに憂國の人士が獨り憂を抱いても、中々國政上にそれを實現させることの困難な時代です。殊に平時高度國防國家體制の樹立とか、總力戰の準備とかには、國民に對して並々ならぬ物質上、精神上の緊張と犧牲とを要求しますから、桃源の夢をむさぼつて居る民衆にこれを要求することは、既に持てる國では中々困難なことで、これは歷史上からも理論上からも肯けることでせう。

一方かかる國の發達の過程を見ますと、彼等がかく繁榮と幸福とを享受する樣になる迄には、當然その發達の途上幾多血みどろの國家的民族的試錬や、艱難を打開して居ます。ですからその結果としての繁榮と幸福とは、彼等の臥薪嘗膽時代の希望であり、目標でもあつたのですから、發達の頂點に達した國が、その幸福を樂しみ、これを滿喫するのは當然の歸趨でもあると見ねばなりません。

唯これ等の滿ち足りた國が、決して單に現狀に滿足して享樂にのみ耽るとばかりは言へませんから、そこにこの種の國の總力戰準備がある譯です。

この種の國の總力戰準備はその本質上どうしても防勢的であり、現狀維持の欲求がより强いのですから、この本質から生ずる傾向の具現となり勝ちです。

つまりこの種の國は通常領土、人口、平和的產業、經濟、交通、通信の上で恐るべき地力を持つて居ますから、平時に於てはこれ等の力によつて國民の幸福を進め、自然軍備の爲その國力を消耗せぬ傾向が濃厚です。從つて總力戰準備でも、その平和的諸產業の地力に賴り國際關係が緊張する迄は、平時的施設が重要視され、愈々怪しくなると共に、段々その平時的地力を戰時的に切り換へる方針となります。

この様な準備のやり方では戰爭準備の完成に相當の時日を要しますから、自然その準備の方針は持久的であり長期戰爭を目論むことになります。そしてそれは一應理論的には成り立つ譯です。つまり彼等はその大きな領土と人口と豐かな資源と生産力とを以て、まづ持久戰を行ふだけの餘裕があり、その間戰爭準備を整へ、最後に武力を充分發揮する様になつてから勝つ見込があるからです。

歴史上から見ますとかかる國の一番弱點とする所は、國民精神の剛健性を失ふことです。古來強國の衰頽はその原因がまづ國民精神の低下に發し、延てそれが物質上の力に及んで居るのは一つの公式であります。

以上は一方の傾向を少々語を強め判り易く述べたのですが、更らに他の傾向について研究して見ませう。

新興の民族、はち切れるばかりの膨張力を持つ民族國家、この種の國家が資源や領土や販路に惠まれ、近代文明の恩澤を享受出來ればよろしいのですが、中々さう行かぬ國があります。天然地理や、政治環境の關係から膨張しようにも四圍の壓迫によつて中々思ふ様に行かぬ國も澤山あります。

この種の國が興隆の初め、あらゆる平和的努力によつてその苦悶を解決しようとするのは、歴史上からも自己保存の本能からも當然の事ですが、そこに持てる國の協調的態度がない限り遂にはこの膨張力が爆發する。これが歴史の公式であり、戰爭の起因であります。

かかる國の總力戰準備は當然前に述べた國とは別個の傾向を持ちます。

所謂持たざる國は持てる國に比べて、どうしても物質上の力で劣るのが普通で、優れた方面は簡素の生活に堪へ、潑剌とした剛健な精神力を有する點でせう。

內にはち切れる膨張力に惱み、外にこれを押へる壓力に苦しむことになれば、自然この種の國の總力戰準備は生きんがための眞劍な努力であり、從つて平時から戰爭準備が必要に迫られて眞面目に講ぜられます。

高度國防國家體制、準戰時的施設といふものが實施せられますが、その中心をなすものは當然、武力戰準備であり、銃後の施設はこの武力戰の完遂を保持培養する準備になります。

勿論この二つは相互に關聯する事柄ですから、そこには現代の様な總力戰では程よい調和が

なくてはならぬ筈ですけれども、元來物質力に於て劣るこの種の國では、平時からの準備を完全にし、その爆發的の力で、なるべく速く戰爭を片付ける必要がありますから、新興民族としての簡素な生活、剛健な精神を以て平時からの苦しい試錬に堪へ、一と度戰爭となれば武力戰によつて、相手國がまだ充分に力を出し切らぬうちに速戰速決しようとするのが當然の歸結でせう。又假りに長期戰となつても、剛健な精神と潑剌たる創意力により堅忍持久相手國の精神的破綻により之を屈服せしめ得ることが多いのは既に述べた通りです。

ここに於て第三の傾向が生れて來ます。それは新興國家、物質的に比較的惠まれぎる剛健なる精神を有する民族國家が、第一の傾向を以て戰爭を準備する所謂持てる國に對し、我も亦敵の欲する如き長期戰爭に於て終局の勝利を獲んとする準備計畫をいひます。

この傾向の特色は且つ戰ひ且つ建設す、といふことになります。

前に述べました第二の傾向は平時準備した武力を爆發的に使用し、敵が未だ充分に武力を發揮するの準備整はざるに乘じ、彼の希望たる長期戰爭の施設を覆へし、その精神的崩壞によつて短期に戰爭を終らんとするものですが、第三の傾向は、かくの如き可能性を胸算し難き情勢に於て採用せらるることが多いのです。

第三傾向の特色を更らに具體的にいへば、平時準備の重點は第二傾向と同樣武力戰準備に置き、開戰と共に武力を以て資源及び生產の豐かなる敵國領土を獲得し（これが爲には勿論敵の武力を壓倒すること必要なるも、敵國の死命を直ちに制するが如き決戰にあらず）、この新領土を第二の根據地とし、ここに建設工作を施して、武力戰續行による消費を補給增强し、依然たる武力の優勢により敵を屈服せしめんとするものです。

現代に於てかかる新傾向が生れるのは國際情勢上當然でありまして、貪欲飽くを知らざる國、しかも充ち足りて精神の頽廢した國が現にある以上、新興國家として執るべき對策でありませう。

史上この種の戰爭が無かつた譯では決してありません。彼の歷山大王が小國希臘の軍を以て大國波斯を覆滅する爲め行つた總力戰の如きはその好例で、即ち西紀前三三四年グラニックス會戰、翌三三三年イッスス會戰に於てペルシヤ軍を破つた大王が、爾後二年間に亘り征服地方たるフェニキア、埃及地方を綏撫し、東地中海の制海權を得て本國との連絡線を確保

すると共に、この新征服地を前進大根據地として戰爭遂行力を增强し、次で西紀前三三一年ガウガメラに於て波斯軍と一大決戰を行ひこれを擊滅して素志を貫徹した如きは、この第三傾向をその儘地で行つたものです。

唯現代の總力戰は科學の進步に伴ひ昔時に比し多大の消費を要しますから、戰ひ乍らの建設はこの消費を補うて尙餘りあるものでなければなりません。

即ち戰爭間に於ける建設は、戰爭の消費を超越する生產となるを要します。從つて國民の建設的創意と組織力とが絕對に必要であると共に、武力戰の實行もこの建設力に相應した消費に止めねばなりません。結局歷山大王の示した樣に、大根據地域を武力を以て獲得した後には、これを綏撫經營して生產を增强するに努め、愈々戰爭遂行力の增强したる時活潑なる武力戰を以て敵を打倒するといふ方法になるのが常則の樣にも考へられます。

これは現代の新興國家に與へられたる戰爭指導の一大問題であり試錬でありまして、深く考慮すべきことでせう。

第四節　總力戰準備の大綱

一　總　說

總力戰準備の要は、開戰と共に國家の總力を最も有効に發揮して、速に戰爭に勝つ如く準備するにあり、と申せばそれ迄の事ですが、それだけでは一向役に立たぬことです。

總力戰準備の三大傾向については一と通り研究しましたが、事實の問題となれば、總ての國家には、內的にも外的にも皆異つた條件があります。殊に戰爭には相手國があり相對的のものですから尙更ら複雜になります。かく考へますと、總力戰準備の理論といふことも中々綜合的には說明が難かしいことで、寧ろ個々の事實にぶつからぬとはつきりしない點もあり得る譯です。

殊に總力戰の思想は旣に日露戰爭直後から芽ざしましたが、眞に總力戰といふ言葉が生れ、その準備が實際に實行されたのは、前世界大戰後獨逸でナチス政府が局に當つてから始めて試みられたもので、あの大戰後英・佛等のやりました總力戰準備は、果してそれを準備とい

ひ得るか、寧ろ不準備といふ方が宜しいかも知れぬ有樣です。

ですから獨逸がその獨特な內外の情勢に處してやりました總力戰準備は、當時の獨逸の爲には適切であつたにしても、その全部が一般の手本となる譯には行きません。どうしても一般的に通用する理論は、更らに充分檢討の上樹立すべきものです。

第一に着眼すべきは、總力戰準備の中心をなすものは矢張り武力戰の準備であることです。戰爭の本質、總力戰の意義については本章第二節で述べましたから、あの理論からしてこれは當然のことですが、近頃時として武力戰の價値に疑を起させる樣な議論がないでもありませんが、これは大そう危險な考と思はれます。詳しくは拙著「戰爭指導の實際」（八八五頁―八九五頁參照）に申してあります。

第二に、總力戰準備としては武力戰準備の外に、文的準備が必要であります。ここで思想の混亂を妨ぐために文的準備につき說明を加へる必要を感じます。

著者は本章第二節で武力行使の伴はぬものは戰爭ではない、もしこの限界を越して武力行使の伴はぬ經濟、思想その他の競爭行爲をも戰爭と見るならば、人類社會生活の全部を戰爭と見る傾向となり大そう思想が混亂し、そこに危險性のあることを指摘しました。

かかる思想上の混亂から、總力戰中に、思想戰（精神、宣傳、文化、學術、敎化戰）、政治戰（內政、外交、法律戰）、經濟戰（資源、食糧、商業、產業、軍需、勞力、金融、交通、通信戰）、厚生戰（保健、衣食住、醫藥、人口、種族戰）等を列擧せられる議論もあります。

著者は勿論これを是認するに吝かではありませんが、これを武力戰以上に評價する樣なことがあれば、ルーデンドルフのいふ樣に、政治は戰爭に奉仕せねばならぬ、といふことになり、これは既に述べました樣に、ナチス戰爭論に於てもはつきりと反對して居る所です。私はナチス戰爭論やクラウゼウィッツと同樣政治は戰爭目的を定め、戰爭はその目的達成の爲行ふ暴力行爲であるといふことが、一般的理論として了解し易い樣に考へます。

しかし近代戰で武力を伴ふ思想戰（例へば落下傘部隊を敵の後方に降下して敵國民心の擾亂を計る樣なもの）、經濟戰（武力を以て敵國を封鎖して飢餓に陷らしめるとか、武力を以て我に必要な資源を獲得するとか）、外交戰（武力を以て向背の怪しい國を占領して、我が與國とするとか）といふ種類のものがあります。私はこれを一種の武力戰と考へます。

この種の武力戰は、その性質上、本來の武力戰を補助し强化する第二次的のものであることを私は强調したいのです。勿論總力戰にも色々の種類があることは既に述べた通りですから一概にはいへませんが、絶對戰爭、短期戰爭では、この性質がはつきり現はれ、制限戰爭、長期戰爭中のある段階ではこの性質が曖昧になり勝ちです。これらの議論は何れ別に現代用兵論で述べることにします。

以上述べました戰爭準備は何れも武力行使を對照としますから、はつきりと戰爭準備の性格が現はれ、思想の混亂を避けることが出來ます。私はこれを總稱して武的準備と名づけます。しかし現代通用する戰爭準備の意義からすれば、これは狹義の準備であります。

第三に、廣義の戰爭準備即ち私の所謂文的準備と名づけるものには、(1)武力戰を維持推進する力を準備するもの、(2)今一つ戰時に於ける國民の生活維持や、これに關聯する國家生存のため必要な力を準備するものとに大別し得ませう。

何れにせよこれらの行爲は戰時に必要なことですから、これを戰爭準備と見ることに私は異存はありません。ただ武力戰を除外してこれらの行爲のみを戰爭そのものなりと考へる思想の混亂を恐れるのです。

この第三の準備こそ現代戰爭に於て最も從來と異つた重要さを持つものです。現代戰爭の國軍兵力はその總人口に對する比率に於て著しく增加しましたから、その戰力を維持推進するためには、國力に比し大そうな糧秣、彈藥、資材を必要とします。又科學の發達に伴つて武器や戰鬪法にも劃期的の進歩を見せましたから、尙さら國軍の損害を補充する爲には、多くの人口を必要とし、又軍需品はその數量が增加し、國家生產物の主要な部分をこれにあてなければなりません。ですから第三の(1)のための準備は、現代戰では凡そ想像も及ばぬ程な大袈裟なものを要します。

第三の(2)について見ますと、元來戰爭は民族の膨脹發展或は少くも現狀維持を目的として行はれますが、現代の總力戰が絶對性に近づき、殊に時として長期戰となる傾向をとりますと、戰爭は自然の歸結として、その民族の死活の問題となり、生命の維持發展のための行爲が却つて生命を奪ふ危險に曝されるに至ります。

これは一見大きな矛盾な樣に見えて、實はこれこそ歴史上から見ても亦進化の法則から見

ても、現實の確かな事實であります。第三の(2)の要求たる、國民の生活維持・國家生存のための努力は、人類の本能からも要求される所でありますと共に、理論上からも實驗上からも、一番根本的な問題です。

結局文的準備とは(1)の要求と(2)の要求とを適宜に調和して、敵國に優る總力を發揮することが要諦となる譯でありまして、原則は簡單ですが、その實際は非常に難かしいことが誰にもよく判る筈です。

この(1)と(2)の調和に關しクラウゼヴィッツが述べてゐることは大そう意味が深長で、今日の總力戰では尙更ら多くの示唆を與へますから引用して見ます。

「戰爭が完全に勝敗を決したとしても、これを以て必ずしも絶對的なものであるとは言へぬ。蓋し戰敗國はその敗北を以て單に一時的の災となし、將來に於ける政治的情勢を利用してこれが挽回をはかるからである。この事情が又力の緊張とその激烈さに大なる緩和作用を及ぼすべきはいふ迄もない。

故に全戰爭行爲は、力を無制限に發揮しようとする傾向に、嚴密に從ふものではない。彼、我共に力を無制限に發揮する努力がないとすれば、人間の判斷力は努力の限界を定める。そしてこの限界の確定は、現實によつて與へられる諸材料を根據として、唯推測性の法則によつてのみなされ得る。」

このク氏の說は現代の總力戰に於ては益々深く考へねばならぬことと思はれます。

二　目的の決定

目的の決定は戰爭そのものではありません。戰爭は、この目的を平和的に解決することの出來ぬと考へる場合とるべき暴力行爲であることは、既に何回も繰り返したとうりであります。

故に理論上目的のない所に戰爭はあり得ませんから、これは一番必要、重大なことです。

この目的は民族國家が永遠に理想とする所にその根源を發してはゐますが、通常それ自體ではあり得ないでせう。

國家永遠の理想は民族により各々特色があり又民族に共通する普遍性をも持つものであります。何れにしてもこれは國家の根本國策即ち國是ともいふべきものでありまして、永い間

に亘る不變の希望でありませう。しかし現在人類の發達程度では、中々この永遠の理想がすぐ實現しさうにも見えません。寧ろこれは民族が世々に傳へて胸に刻む寶物であり、あこがれであります。結局どの民族も營々として、一歩づつ辛棒づよくこの理想の高嶺への歩みを續けて居るのでせう。

そこで、この一歩づつ進むための目標こそは普通國策と呼ばれ、目的と見られるものでせう。この國策を達成するため各種の政策が生れ、平時はなるべく平和手段によつて、目的達成を計る譯です。

國策の決定なくして政策なく、政策の決定なくして平時各般の準備はあらう筈はないのですから、國策つまり目的決定の重要さは判る譯です。

しかしこの國策の決定といふことは實際には非常に難かしいことでありまして、そこに目的の判然とした決定が行はれぬ作用が起きます。

この困難さを物語る本質的のものは、自己の力と、相手國の力とが常に變化する所から起る樣です。思ふに現代の世界情勢では、わが國策を遂行するため各種の深刻な障碍がありますが、その最も大きなものは、我と理想を異にし、利害の相反する國の動靜であり、その力であります。

殊に現代の樣な總力戰では、兩敵國の國力が最後の物をいふ傾向が強くなりますに拘らず、彼我の國力なるものは、自然の道理に從つて一刻も止ることなく變化しますから、彼我の相對的國力關係は浮動的であります。從つて將來の動向を正確に把握して、それに相應する目的を決定することが困難となるのは當然の歸結であります。

更らに目的決定を困難にする原因として、當局者の交代が擧げられます。前項に述べました樣に、目的決定の本質上の困難さがありますから、從つて彼我の力の較量上にも意見の相違が起るのは止むを得ぬことです。然るに現代の國家では當局者の交代が起りますから、そこに意見の相違から來る目的の變更或は不徹底さが起る譯です。一方國に起る目的の動搖は相對的に假令當局者の變らぬ他國に迄も影響することは、戰爭準備が相對的のものである以上止むを得ぬことです。

斯樣な關係で平時から目的を鮮明にすることが困難なるのみならず、愈々開戰となつても

戰爭目的が鮮明を缺くことさへ稀でないことは事實がよくこれを證明して居ます（拙著「戰爭指導の實際」には幾多の事例がありますから詳しくはこれに讓ります）。

クラウゼウィッツは戰爭目的につき次の樣に述べてゐるのは尤もと考へられるのです。

「戰爭はその目的を達するに遲速の差ありとはいへ、常に必ず一定の期間繼續し、その間に或は右へ或は左へ方向の變化が起きる餘地が殘されてゐる。即ち戰爭はこれを指導する理智によつて左右されざるを得ぬわけである。

所で今戰爭が政治的目的から出發したものとすれば、戰爭を起したこの最初の動機が戰爭の指導に對しても、最も主要な働きを及ぼすべきはいふ迄もない。しかし政治目的は決して專制的立法者ではない。それは手段の力に從はねばならぬもので、これが爲屢々目的は全然その性質を變へさせられることさへある。だが何れにせよそれは第一に考慮されねばならぬ要素である。かくて政治は全戰爭行爲に貫徹し、戰爭に於て爆發する力が許す限り、これに不斷の影響を及ぼすものである。」

私はク氏の理論に大體贊意を表しますと共に、歷史も亦事實に於てこの理論を裏書きしてゐるものと考へます。

何れにせよ以上によつて、目的の決定が最も重要なことであり、これが正鵠を失せぬ限り、戰爭の準備も戰爭の實行も一貫した前後撞着のない成果を擧げ得ることを我々は知ることが出來た譯です。

三　情勢判斷

情勢判斷（或は狀況判斷）といふ言葉は元來兵語でありますが、近頃は廣い意味の戰爭にも使はれる樣になりました。

從來軍事上使はれました狀況判斷といふ言葉を說明することは、延て一般に廣く用ひられる情勢判斷を諒解させる途ですから簡單に申します。

軍事上にいふ狀況判斷とは、我軍の任務、敵情（これは敵軍の兵力、編組、士氣の狀態、その位置、態勢を明らかにして、敵のなし得る、又は多分なすであらう行動を判斷すること）、地形、天候、季節、我軍の狀態等を較量して狀況を認識し、我が決斷の基礎をつくることであります。

ナチス戰爭論でも「正しい狀況判斷は將帥の意志と相並んで成功の基礎をなすものである。

それなしでも偶然によつて勝利を得ることもあり得るが、しかしそれは稀であり且つ分外の幸運に惠まれた場合である。目的に適しない決斷乃至は不正確な行動は、しば〳〵ただ結局の所誤れる判斷の結果生ずるものである。即ち情勢の認識に罪があるのだ」といつてゐるのは尤もと存じます。

一般的に申しますと、情勢判斷とは一つの目的に對し、それに關係ある現實の認識を正しく把握し、それから生ずる將來の見通しを正確に行ふことでせう。

二項に述べました目的の決定が困難であればある程、それに先だち情勢判斷が必要といふことになります。情勢判斷とは一つの目的に對し云々と私は申しましたが、この場合の一つの目的とは、國家の理想乃至は根本國是をいふことになります。

つまり根本國是に基いて、近き將來の國策なり國家目的なりを樹立するには、情勢判斷がまづ必要といふ譯です。

この種の國家最高の情勢判斷につきナチス戰爭論は「國家最高の地位の人々に必要なものは、見透し難い程澤山ある事實や、多種多樣の狀態から、最も重要な且つ最も決定的なものを正しく發見する術である。政府とその他の地位にあるものと共同してなすかくの如き熟慮を綜合した情勢判斷を俟つて、始めて、何時、如何にして戰爭を行ひ得られるか、或は行ひ得られないかを明瞭にすることが出來るのである。そしてこれは戰爭の軍事的計畫の基礎をなすものである」と述べてゐるのは誠に至言と考へられます。

この種情勢判斷の對照となる現實は、廣く政治、軍事、經濟、精神的關係等を包含し、所謂國家の總力に及ぶのが現代の要求であることは、既に屢々述べた通りであります。

四　戰爭計畫の必要

國家最高の情勢判斷が出來、戰爭目的が決定すれば、當然戰爭計畫が必要です。戰爭計畫といへば何んとなく物騷に聞えますが、この計畫は戰爭するかせぬかの限界を定め、止むなく戰爭をする場合如何にするかの計畫であることは、今迄の說明で判ることです。つまり成るべく戰爭を避け、所謂戰はずして勝つための計畫、そして戰爭をするにしてもこれにより新しい平和を樹立する計畫と考へればよいでせう。

本節**一**で檢討しました樣に總力戰準備は、第一、武的準備、第二、文的準備から成ること

を知りました。從つて戰爭計畫が大體これ等のものを包含することになる譯です。

しかしこれ等の事柄は凡そ國政の全般に亘る廣汎なことですから、理論上各國に共通する戰爭計畫を描くことは至難でありまして、寧ろ各國の當面する內的及び外的の事實に即して論ずるのが、實際的であり効果的であります。

しかしそれは現代戰爭論の目的ではありませんから、ここでは共通の理論とも見るべき事につき簡單に述べることにします。

ナチス戰爭論によりますと、

「前世界大戰による經驗の賜として、戰爭遂行のあらゆる部門を總括した計畫が必要であるといふことを、初めて我々は感得したのである。それ迄は本質的には軍事的諸計畫のみが戰爭計畫であると考へてゐた。

戰爭計畫は出師計畫（作戰計畫）に比してより包括的なものである。それは單に軍事的戰爭遂行にのみ限られるものではなくて、特に今日の情勢にあつては、あらゆる戰爭上の方策と共に、政治上、軍事上、經濟上の、更らに又輿論の範圍に迄及ぶ方策を同時に包括し、また相互に調和を保たしむべきものである。この計畫は國家の元首及びその閣僚、或は總理大臣が專門の機關の協力を得て、特に軍務大臣の協力の下に責任を以て確定するものである。」

と述べてゐるのを見ますと、戰爭計畫に對する獨逸の考へ方がよく判ります。

佛國の前參謀總長デブネー將軍の著書「將帥」では、戰爭計畫につき次の樣に述べてゐます。

「現代の戰爭で、主動力たり又決定的威力を有するものは矢張り作戰軍であるけれども、現代戰の特質として、國家の有らゆる全能力即ちこの作戰軍を核心とする政治、經濟、社會等の合成的威力を以て戰爭に參與しなければ、到底目的を達成出來ぬことは、最早何人も異論のない所であらう。

實に前世界大戰は、戰爭が如何に廣汎で、又國民に課した努力が如何に絕大であつたかを如實に示すものである。現代戰爭に於ては、國家の全體を擧げて戰爭に參與する關係上、戰爭の影響する所は實に廣汎深刻で、單に戰爭間國民を激しい試練の下に置き、慘烈な戰鬪に參加させるに止らず、戰爭が終つてからも戰爭の影響は依然として、經濟的、社會的

方面に於て繼續せられるのである。

そして國家の戰爭目的を定め、全國力を擧げて活動し得る準備を整へ、或は戰爭間國家の生存を確保する方法を講じ、或は武力戰指導の方針を決し、或は又作戰指導に關する一般訓令を總司令官に與へるが如きは、當然政府の擔任すべき業務である。戰爭計畫とは實に右の樣な目的に基いて、政府の作るべき計畫であつて、この計畫は發生の公算最も多い國家間の葛藤を假定して策立せらるべきものである」と。

將軍が總力戰を主張し、戰爭計畫の必要を絶叫したこの著述は一九二五年のことですから、ルーデンドルフ將軍が一九三五年出した著書「總力戰」に先だつこと十年、佛國軍部が既に同樣の意見を述べてゐる譯です。これは我國には餘り知られて居りませんが、佛國の政治家が、これ等の言に聽かなかつたことは、今次大戰で佛國が大きな懲罰を受けることになつた原因の一つでせう。

五　戰爭計畫一部の實施と修正

總力戰準備の見地から見まするれば、戰爭計畫は確かに準備の大きな仕事ですが、しかし計畫は單に計畫ですから、この計畫のうちから幾許のものを、どんな程度に平時から實行するかが最も重要な問題となります。

これは各々の國家が當面する現實に基き、愼重な考慮の下に決定せらるべきことでせう。しかし客觀的に申すならば、既に本章第三節で述べました樣に、所謂持たざる國、現狀に滿足し得ぬ國では、戰爭計畫中の極めて多くの部分が平時から實施され、國民は既に平時から多くの犧牲を喜んで忍び、所謂臥薪嘗膽の準備を眞劍に行ふでせう。しかしこれが爲には爲政者は餘程の思ひ切つた決心が必要であり、國民一般も亦異常な奉公心を要する譯です。

この種準備の好模範は、一九三五年以後のナチス政權及び獨逸國民でありまして、總力戰準備の上からは、最上級の讃辭に價するものと考へられます。

これに反し所謂持てる國、現狀維持を欲する國では、假令戰爭計畫はあつても、所謂計畫倒れに流れ勝ちで、平時からその一部の實施さへもが困難なのは當然であります。

この種の國としては、前世界大戰後の佛國もその一つです。あの前世界大戰で豐富な經驗を持ち、且つ又頭腦明晰な佛國民性からしても、彼等は立派に總力戰、戰爭計畫等の理論を

うち樹てましたが、畢竟これが議論倒れの結果となつたのは、爲政家も國民も共に重大な責任を負ふべきもので、つまりこれは國民精神の弛緩が最大の原因と認められます。

更らに戰爭計畫は、一度出來上ればそれで良いといふ譯には行きません。世界の現狀は元來一刻も靜止するものでないことは屢々述べた通りですから、戰爭が元來、彼我の總國力に起因し且つ結果づけられる關係上、どうしても戰爭計畫も修正せらるべき運命にあります。

しかしこの修正は、世界情勢の重大な變化がない限り、局部的修正で良しい譯です。但し目下の樣な目まぐるしい許りの情勢變轉が事實行はれてゐる現狀では、根本的修正、遂には戰爭目的の變更といふ樣な根本的なこともあり得る譯です。

かかる根本的の修正は、本節三に述べました情勢判斷がうまく出來て居れば、中々起らぬ筈です。つまり理論上は情勢判斷の重要さを裏書きするものですが、これは非凡の英才を以てするも遂に避け得ない人力以上の要求かも知れませんから、かかる場合の當局者としては、行掛りに捉はれず、斷乎たる決斷と速かなる事務とを要することですし、又一方國民も、兎角あり勝ちな當局者の無能、短見を攻擊して國內の結束を破る樣なことなく、よく現實を認識し、寧ろ國民の盛り上る力で當局者を鞭撻し、國家の進路を正しくする位の氣慨が極めて必要と考へられます。

第五節　戰爭計畫

一　總說

大體前節で總力戰準備の大綱を檢討しましたから、本節では戰爭計畫の內容につき述べる順序です。しかしこの戰爭計畫は既に屢々記した樣に、一言にして盡せば、國家最高意志の決定及びその實行計畫でありますから、各國の事情によりその內容は一定せぬ關係があり、理論的にこれを體系づけることは至難で、又餘り役に立ちさうもない傾きがあります。

歷史の跡を見ますと、かかる重要なことであるだけその決定は容易なことではなく、多くは曖昧のうちに閑却され、或は一部の機關で研究されても、所謂至高の所にまで屆かぬこともあり勝ちなのです。

又總力戰の戰爭計畫は、前世界大戰後問題となつた新しいもので、まだ歷史の記錄として

發表されたものもなく、各國ともに機密として金庫の奥深く納まつてありまして、その實體は判りません。

從つて各國の戰爭計畫を比較研究して、理論上の進歩を計る途も目下の所無い譯ですから、尙更ら一般的理論は貧弱です。

しかしその事柄の重要なことに變りはないのですから、私はここに極めて抽象的に、各國に共通すると考へられる事項を、一應體系づけて見ることにしますが、事實それが各國の戰爭計畫とは凡そ緣遠いものかも知れませんことをお斷りして置きます。

戰爭計畫に包含させるかどうかには理論上異見がありますが、兎に角その前提として、

一、情勢判斷

二、戰爭目的

が必要なことは前節で述べた通りで、これは省きます。

二　開戰條件

次ぎに必要なことは開戰條件でせう。私は前節で、戰爭計畫とは戰爭をするかせぬかの限界を定め、愈々戰爭となつた場合の對策を計畫するものだと述べました。

そこで理論上まづ情勢判斷をして將來の見透しをつけ、それに基いて戰爭目的を定めたのですが、情勢判斷はその本質上どうしても豫測たるの範圍を出で難いのですから、そこに開戰條件の必要がある譯です。

開戰條件といふ言葉も、近頃時々普通に使はれることがある樣になりました。その意味は開戰を決斷するに當り具備すべき內外の最低限度の條件であるといひ得ませう。

內的條件としては我軍備の程度、その戰略的態勢、武力戰を推進すべき資材の準備及び軍需工業の狀態、國民生活の維持及び國家生存に必要な準備の有樣、國民精神の狀態等が擧げられます。

外的條件としては、敵國の軍備、その總力戰準備の狀態、國民精神の振否、その他彼我與國の狀態、中立國の彼我に對する態度等が擧げられませう。

結局總力戰準備としては、勿論出來る限りこの開戰條件以上のものを希望し、その達成を計る譯ですが、彼我の相對的國力比は浮動的なものですから、愈々の場合、我が戰爭目的と

現實の狀態とを比較して開戰に必要な最低限度の條件を豫め討究し、兎角興奮や刺激の多い和戰決定時に冷靜に判斷する基礎條件を持つてゐることが、歷史上からも理論上からも必要な譯です。

理論上開戰條件を定めるのは左程難かしくないやうに見えますが、事實これは非常に困難なことです。しかし困難であつてもその重要なことに變りはありません。

前世界大戰の勃發當時、この開戰條件の事前研究が不充分で、確乎たる決定のなかつた爲墺國、獨逸、露國等の當局者が苦心慘憺努力したに拘らず、遂に思はぬ戰爭に、殆んど盲目的につき進みました跡を見ますとき、この開戰條件の必要さを我々はつく〴〵感ぜざるを得ぬ譯です（拙著「戰爭指導の實際」九五頁乃至一四六頁參照）。

つまり開戰條件が充足されぬ場合、隱忍自重して臥薪嘗膽來るべき好機の到來迄國力の增進を計るべきや、或は又坐して更らに一層の惡條件下に戰はねばならぬことを顧慮し、無理ではあるが開戰條件を無視して開戰を決すべきやは、理論上から見ても幾多の不明瞭な因子がありまして決定が困難な問題です。況んや歷史上の事實を見ますと、平時冷靜にこれ等の問題を豫め討究することなしに、和戰の決斷時機に於て、異常の緊張と繁務とのうちに急にこれを決するとすれば、人間の悲しさ感情が先だち、相手國に對する憎惡心が強く影響して、兎角大局を失し、遂には民族の將來を一時的に破局に導く多くの事例があります。

又一方この開戰條件の決定によりまして、戰爭計畫最大唯一の目的たる戰爭準備に對し適確な憑據を與へまして、平時からの內治、外交、軍備の當局者に共同の目標を與へ、兎角近代國家の複雜な機構に於て最も困難と見做される、統一ある强力な施策が實行される、大きな利益があることを忘れてはなるまいと考へます。

以上述べました、情勢判斷、戰爭目的、開戰條件の三つは、政治と軍事との連繫を律する根本的な條件でありまして、最も重要な缺くべからざるものです。

三　武的計畫

次に必要なものは、右の三條件に基く武的計畫と文的計畫とでありませう。

どこ迄が武的計畫であり、どこ迄が文的計畫であるかも、理論上は別とし、事實としては各國の憲法、傳統等によつて一樣ではありませんから、一定した原則はない譯ですが、ここ

には便宜上常識的に區分して述べます。從つてこの計畫が國家の如何なる機關によつて行はれるかの問題は、事實各國により夫れ〳〵異るものであることを申して置きます。

武的計畫とし數へられますのは、

1、武力戰統帥機關
2、陸、海、空軍の編成裝備、兵力量の決定及びその整備方針
3、軍用資材の整備方針及びその戰時補給の爲國家工業力への要求
4、準戰時狀態に對處する武力戰準備行動
5、陸、海、空軍綜合の作戰計畫
6、右に基く陸、海、空軍の作戰計畫

以下簡單に各項を說明しませう。

1、武力戰統帥機關

現代各國の武力を形成するものは大體陸、海、空の三軍であります。一つの戰爭目的を達成する爲の武力戰でありますから、この三軍は共同の目的に向ひ、各々その特性を發揮して協同一致、速に目的を達成する必要があります。

この協同一致のためには現代二つの方法があります。つまり三軍が各々獨立して互に協力によつて任務分擔を定めるやり方と、三軍の上に總轄的の統帥機關を置くやり方とあります。

現在獨、伊、佛、露國等では總轄的の統帥機關があり、英、米では各々獨立した機關で、唯これを總轄するには一種の國防會議の樣な會議制の政、戰兩部の合同會議を持つて居る樣です。

これに關しナチス戰爭論では次の樣に言つて居ます。

「將來の武力戰遂行は陸、海、空の戰鬪を總轄統制せねばならぬ。そこで陸、海、空軍の作戰計畫も亦統一的に樹立されねばならぬ。これが爲には三つの軍の上に立つて統帥にあたる將軍が必要とならう。そして三軍を統一指揮するのは、人間一人にとつてその能力を超過するものであるといふ批難に對しては、次のことを以て反駁せねばならぬ。即ち尨大な組織を有する陸、海、空軍の各々では既に統一指揮が實行されて居る。して見ればこの三軍を統一することも不可能のことではない。勿論この最高統帥者は、大綱につき三軍の

協力を律する程度の大まかな指揮をするのみで、各軍の實行手段や細部の處置の獨自性は各軍指揮官の問題となるのである」と。

この見地の下に獨逸では三軍の統一指揮機關を設け、現に世界大戰はこの組織の下にやつて居ます。

前世界大戰の經驗によつて當時の英國海相、今の首相チャーチルは、その著「世界大戰」中で次の樣に感懷を洩らして居ます。

「どこの國でも、陸軍と海軍とは離れて住んでゐた。本來一つであるべき武力戰の問題が、互に連絡のない立場で討究された。一體この戰爭は事實一定の時期に用ひうる全兵力と全壓力との總計を動員するものである。然るに人々は事實この戰爭を切れぎれに取扱つた。そして殘忍な教訓が投げつけられた數年が過ぎ去つて、初めて漸く不完全ながらも、研究や、考へや、命令や、行動を統一しようとする目的が達成されるに到つた有樣である」と。

聯合戰爭に於ては更らに聯合軍統帥機關の問題が起ります。聯合戰爭の利害については、本編第一章第三節で研究しましたが、それに關聯してここにも二つの機構があり得ます。つまり聯合軍統一統帥機關を設ける方法と、各國軍の協議による方法とです。

これは理論上からは、既に協同の戰線に立つ以上、聯合國の運命は一蓮託生の筈ですから、どうしても統一指揮官を設けるのを必要とする譯ですが、事實の問題としては中々困難なことです。殊に殆んど同位の國力を有する國々の聯合戰爭では、面目や自尊心があつて容易ではありません。強いて設けて見ても實績が擧らぬのみか、却つて協力を困難にすることさへあります。

前世界大戰で、獨逸側では開戰後二年にして初めて獨逸皇帝を總指揮官とする同盟軍統帥機關が出來ましたが、その成立には隨分無理押しをした所もあり、その實績は必ずしも充分ではありませんでした(詳しくは拙著「戰爭指導の實際」三一六頁乃至三一八頁參照)。又英佛側では敗戰の一歩手前まで行きついた一九一八年四月、佛國戰場でしかも陸軍のみの統一總司令官がフォッシュ元帥の手に委ねられたに過ぎませぬが、これは中々良くいつた方でせう。それは人の撰定がよかつたことも大きな原因でありました(「戰爭指導の實際」五五一頁乃至五五九頁參照)。

これに關しナチス戰爭論では、

「戰爭計畫の樹立に際して、聯合戰爭を豫期する場合には、極めて重大な又時には見透しもつかぬ困難が生ずる。この場合には明確な戰爭目的が缺けて居り、その諸計畫はより一層軍事的領域以外に存し、最早自國の要求とは何等關係なき顧慮によつて束縛される。恐らく一つの國家の戰爭目標は他の國家のものと異ることがあらう。兩者が全く同一であることは極めて稀れである。わが努力が犧牲となり、しかも他の國が成果を得るといふことを怖れ勝ちにならう。

聯合戰爭に於て統一ある計畫及び强力な最高司令部が必要なことは眞理である。然しこの眞理に從つて行動されたことは殆んどなかつたのである。何となれば、國家は原則や理論的認識によつて行動するものではなく、利害關係によつて動くものだからである」と。

これはフォン・シェーフェルの所論ですが、よく理論と現實とを比較し、甚だ意味深長な議論と考へます。

これに關し佛國デブネー將軍の所論は次の樣です。

「現代に於て聯合戰爭の行はれる譯は、單に現代の政治的關係に止らず、相互の經濟的關係にも起因するもので、聯合軍は畢竟この兩者の關係により自然に編成せられ、その聯合が如何なる國々によりて組成せらるるやも亦これ等の關係により、概ね平時から判定し得る譯である。

しかして理論上から各國民は聯合軍統一指揮の必要を高唱するけれども、事實に於て一度最高指揮權が某一國に歸する場合、これを掌握し得なかつた國民は、これが爲不滿の心境に陷り、政府も亦權威ある最高指揮官を忌避せんとするに至るであらう。

この障碍は一に最高指揮官の人格に關するもので、事件が緊急且つ重大ならざる限り、聯合諸國がその指揮權を一外人に委ねんとするは極めて稀有なりといはねばならぬ。

しかし各國が進んで協約により協同作戰することを熱望する場合に於ては、平時から十分の準備をなし得べく、又統一指揮實現の機會を捉へ得るであらう。

故に聯合戰爭をなさんとせば、平時に於て軍事協約を締結し、少くも聯合軍總參謀部の要員と、その共同勤務の方法とを規定し置くを要する」と。

以上獨佛兩國の論調を見ますと、聯合國統帥機關に對し、シェーフェルが大そう懷疑的であるに對し、デブネー將軍が決定的贊意を表してゐるのは、各々その自國の立場からも肯ける樣な氣がしまして、我々に幾多の示唆を與へるでせう。

何れにせよ、自國內に於ける統帥機關、聯合國間に於ける統帥機關の二つの問題は武的準備の最高峰ともいふべきもので、これは平時から充分に討究決定して置かなければ、總力戰が武力戰を主體とする以上、なんとしても一大缺陷として指摘せらるべきでせう。

2、三軍の編成裝備、兵力量の決定及びその整備方針

これは專門的に過ぎることですから、單簡に說明します。

既に戰爭目的、開戰條件が定まり、武力戰に要求せらるる努力が判明すれば、自然三軍がどう協力してこれを解決するかの問題となり、從つて三軍の分擔任務が決定しますから、それに基づき三軍の兵力量やその內部の編成裝備の決定を必要とします。

かく言へば極めて單簡の樣に聞えますが、これは單に抽象的の理論であつて、實際にあたり三軍の兵力量がよく均整を保ち全武力として現代戰爭の要求に適ふことは頗る難かしい問題です。

これは勿論一國の內外環境、戰爭目的の影響を受けることも大きいのですが、他方陸、海、空軍の性能、その建設、補充の難易等をも考慮せねばならぬからです。詳しいことは更らに現代用兵論に讓ることにして略します。

さてこれが決定したとしても、限りある國力と殊に工業力とを以てしては一時にこれを整備することは事實出來ませんから、自然その整備の方針を定め、緩急の順序をつけ、その完成年度を決定することが必要です。

この樣に理論上からは一見單簡な樣に見えて、これは頗る難かしいことです。その困難さについては何れ次の第六節以下で具體的に述べますからここでは省きますが、大體いつまでにこの軍備を完成するやの問題、及び、他の總力戰準備との釣り合ひ等の問題がありますと共に、現代科學の進步は次々と新兵器、新戰法を生みますから、軍備そのものの內容に變更を要求することも起り勝ちであり、從つて三軍の兵力量そのものにも、或は整備の緩急順序にも止むを得ぬ變更を來すことがあるからです。

これ等の困難を出來る限り避けるためにも、(1)で述べました最高統帥機關は大きな役割を演ずることが出來ませう。

3、軍用資材の整備方針及びその戰時補給の爲國家工業力への要求

前項に關聯しまして、如何に兵力量の整備が出來ましても、近代軍の消費する軍用資材を整備せねば、兵力の活用は出來ません。然るに近代軍の戰時消費する軍用資材は、實に想像も及ばぬ莫大なものです。從つてわが豫期する全戰爭期間のものを、平時から貯藏することは不可能ですから、平時準備としてどれだけの期間に亘るものを準備しそれ以外は戰時の生産にまつかを決定する必要があります。

これも事實上甚だ解決の困難な問題です。まづ前項兵力量の決定と對照しただけでも、一定の國力を以て多くの兵力量を整備すれば自然この(3)の整備等は減少せざるを得ませんから、(2)と(3)とは然るべき釣り合ひを保たぬと所謂頭デッカチの畸形的軍備となる虞があります。

つぎに、平時貯藏量の決定それ自體の困難です。前世界大戰では獨・佛兩國ともに大體短期戰を豫想し、且つ新鋭武器の彈藥消費量を內輪に目つもつて平時の貯藏量を定めましたから、開戰後二週目頃から既に彈藥の缺乏に苦しみました。加ふるに兩國共に戰時工業の整備計畫が充分でありませんでしたから、急場の間に合はず、自然この端境期が災して兩國共に持久戰にならざるを得なかつたのです。

しかし現代科學の進步は新式兵器を續出させますから、如何に平時の貯藏量を多くしてもそのうちには既に舊式兵器として第一線の役に立たぬものが出來る公算があります。それ故工業力さへ充分あれば餘り貯藏量を多くせぬを良しとすることにもなります。

何れにせよこの(3)の準備にも互ひに相反する因子を持ち、極めて解決を困難にさせます。

4、準戰時狀態に對處する武力戰準備行動

現代の戰爭はその起ち上りが極めて大切です。詳しくは現代用兵論に讓りますが、現に行はれてゐる大戰でも幾多の事例があり、殊に獨・ソ開戰の有樣は讀者諸君にも、電擊開戰の效果を如實に見せたでせう。

そこで各國ともに開戰準備の遲からんことを恐れ、國際關係が緊張しますと不時の事變に應ずる爲、武的にも文的にも戰爭準備の完成を急ぎますが、なかにも武力戰準備はその本質

上最も必要です。即ち各國共に平時からの計畫で所謂準戰時（又は非常時）法を制定しまして各般の準備を實行に移すことを計畫してゐます。

武力戰準備の內容としては軍動員（平時編制から戰時編制に移ることです）、作戰計畫に應ずる團隊や艦船の配置、空軍及び艦船の即時行動準備、軍需資材の配給及び軍需工業への發注及び聯合與國軍に對する同樣所置の要求等、第一線兵團の即時行動準備と、補給業務の開始や聯合作戰の協議等が敎へられます。

ここに注意しなければならぬことは、從來（前世界大戰も大體さうでした）この種の準備行動の多くは宣戰布告つまり開戰をまつて初めて行はれましたので、その習慣が拔けきらぬせいか、一般國民は勿論、時としては當局者の一部でも、この準備行動を以て既に開戰に決したものと考へ、非常な興奮や動搖の起ることです。

これは現代戰を理解しないものでありまして、此等の所置は我が決意を示して最後の外交交渉を成功せしめる手段でもありまして、所謂戰はずして勝つ一つの方法ともいへます。彼のナチス獨逸が墺國の併合、チェコスラバキアの併合等を斷行した際には、皆この所置がとられましたから、あのミュンヘン會議で、英佛は遂に獨逸の要求に屈服し、戰爭は起らずに濟んだのです。

即ち平時計畫するときの心構へとしては、この準備行動は和戰を決定する場合の所置であり、相手國が我が主張を容れればよし、然らざるときは電擊的に開戰する準備行動であることを銘記すべきでありますと共に、一般國民も現代戰ではかかる緊張した空氣の時機があつても當局に信賴して輕擧妄動を愼しむことが必要です。

5、陸、海、空軍綜合の作戰計畫

6、右に基づく陸、海、空軍の作戰計畫

三軍綜合の作戰計畫が絕對に必要なことは既に本節三の(1)で述べた通りです。しかしその內容は最も重要ではあつても、ナチス戰爭論のいふ通り餘り複雜なものではないでせう。つまり戰爭目的達成のため武力戰をやる、それには三軍を一體として考へ、その各々が互に特性を十分發揮して共同の目的に向ひ相協力する大綱、いはばお互ひの繩張りをきめ、時間と場所との關係に於て、相互援助することを決定するに止まりませう。

理論は單簡ですが實際大そう困難なことは既に(1)で御紹介した通りです。これは永い間の傳統が然らしめるもので、別々の世界に住み、物の見方、考へ方を異にする集團の間には起り勝ちなことで、現代戰の傾向は三軍の協同生活を必須にさせますから、段々良くなることと信ぜられます。

聯合與國との間にも作戰計畫につき平時から協定が必要です。現代の同盟條約には多くの場合軍事協定がつきもので、相互援助の大綱や兩國軍事當局間に行はれる協議の方法を定めてゐます。それに基づいて作戰協定が平時から準備されねばなりません。

しかし、獨逸のシュリーフェンがいふ樣に、聯合戰爭は大そう難かしいものですから、この作戰協定の出來、不出來は繫つて兩國利害の一致程度によることが多いのです。

陸、海、空軍各自の作戰計畫は從來から十分準備せられたもので、ここに改めていふ程のことはありません。

聯合與國との間には綜合作戰協定の外相互の三軍間に細部協定をすることも通常必要です。

四　文的計畫

總力戰ともなれば、武的計畫の外、文的計畫が必要となり且つ大そう廣汎に亘ることは當然でせう。しかしそれは各々の專門に亘ることが多いのですから、ここには極めて單簡に述べることにします。蓋しこの計畫の範圍は恐らく國政の全般に亘ることになり勝ちです。大體文的計畫の要目を見ますと、

1、戰爭目的に應ずる外交政策の大綱
2、開戰條件に應ずる和戰決定時の外交要綱
3、戰爭直接の目的及び戰時國民生活を目的とする工業的及び經濟的計畫
4、同樣財政及び金融計畫
5、思想對策の要綱
6、其の他國家生存の爲必要なる對策の要綱

といふことになります。以下單簡に各項目につき研究して見ませう。

1、戰爭目的に應ずる外交政策の大綱

現代の情勢では、戰爭目的の如何に拘らず、必ずやその利害の影響する所が世界的になり

勝ちですから、自然利害をほぼ共にする國と、全然相反する國と、利害の相半ばする國とに別れることは當然の歸結です。

從つて平時からは勿論、戰時になりましても成るべく多くの與國を作つて、政治、軍事、經濟上、豫想敵國を孤立せしめ、これを包圍する樣に外交の方針を定めることが必要です。

2、開戰條件に應ずる和戰決定時の外交要綱

開戰條件は戰爭の爲最低限度の條件を集めたもので、そのうちには外交關係が重大な地位を占めて居ます。

故に少くも和戰決定の際、外交上對外關係を開戰條件の限度に迄確保することが外交の最大任務でありますから、その場合の要綱は平時冷靜な雰圍氣で愼重に定めて置くべきです。

これは理論上は當然のことの樣で、實際は非常に困難なことです。歷史の跡を眺めて見ましても、和戰決定時の外交を誤り、それが原因して遂に全戰爭を失つた例は多いのです。その原因は多々ありますが、平時から冷靜に計畫のなかつたことが大きな起因として擧げられる樣です。

つまり和戰決定時の緊張した時には相手國も必死の外交工作をやりますから、存外平時與國として豫期した國の態度が變つたり、或は平時當然中立を守るだらうと豫期した國が敵國に奔つたりすることが起り勝ちです。

結局現代では各國の向背は多く利害の關係から生ずるのですから、與國を依然我が陣營にあらしめ、態度の怪しい國の中立を維持させる爲にはどうしても利益を提供し、我が犧牲をある程度忍ばねばならぬことが起り勝ちです。從つてわが犧牲が大になりますと、結局戰爭目的と相反する結果が生れ、外交上の要求から、戰爭目的の崩壞といふ矛盾が生れる場合が起ります。

かかる矛盾が判然と現はれる場合には遂に一時忍んで、開戰をせぬ決斷が必要となります。しかし歷史に徵しますと、外交以外の他の情勢が相當に進んでしまひますと、所謂行掛り上退くに退かれず、感情と興奮の渦卷の中で、外交がその奔流に押されて、甚だ不十分な開戰條件の下に開戰を餘儀なくされる例も少くないのです。

前世界大戰で初め墺國外相ベルヒトールドの短見から不擴大方針の下に開戰を決意し、更

らに獨逸皇帝が輕卒にこれを支持しましたが、その後の外交交渉が當を得なかつたため、事件は全歐洲の問題となり、殊に英國の態度が問題となりました。當時の獨逸指導部には平時から開戰條件の決定はなかつた樣で、殊に軍部の作戰計畫（ベルギーの中立侵犯）と、英國の中立とが兩立するや否やの問題に關し深刻な檢討はなかつた樣ですから、愈々の土壇場となつて、陸軍の作戰計畫に影響を受け、對英外交はしどろもどろでありました。つまり和戰決定時に於ける外交要綱の計畫がなかつたが爲に、遂に思はざる英國を敵國とする戰爭を引き起し、結局全戰爭の運命はこの時決した觀がありますのは、實によい教訓を我々に與へるものと考へます。

3、戰爭直接の目的及び戰時國民生活を目的とする工業的及び經濟的計畫

大體以下述べます(3)、(4)、(5)の計畫には二つの方面がありませう。第一は內的に戰爭の要求を充たす處置、第二には敵國に對し積極的に働きかけて、敵の戰爭遂行を妨害する處置です。そして第一の方面は各國とも大體國家總動員法を以て平時から法令化して居ますが、第二の方面は別に法令化したものは少ない樣です。

戰爭直接の目的のためには、平時から貯藏すべき軍用資材及び戰時補給すべき資材の生產計畫が必要です。その種類としては兵器彈藥やそれに類する資材もありますが、他方國民生活に必要なものと同種類の糧秣、被服、燃料（石油、重油、ガソリン、石炭等）の如きものもあります。前者は所謂軍需產業に屬し、後者は一般の產業に屬します。

結局第一と第二のものとは關係が深く判然たる區別は出來ません。つまり限りある國家の生產力を以て兩者を滿足させることになりますから、自然そこには程よい調和が必要であります。既に述べました樣に、戰爭そのものが國家の生存發展又は維持の爲行はれるのですから、この調和といふことは根本的の問題であり、一番重要なことでせう。殊に新興國家、所謂持たざる國では、戰爭の起因の一部がそこから生れる關係上、尙更らこの調和は重要で且つ困難な本質的問題です。

それ故これはどうしても平時から愼重且つ綿密な調査研究を重ねて計畫を樹立することが絕對に必要です。そしてこの計畫の大きな傾向として、所謂持たざる國は平時から臥薪嘗膽、國民が不自由を甘受して、戰爭直接の目的の爲の貯藏量を豐富にし、一般國民は質實簡素な

生活を營んで、平和的な消費は極力節約するより外に途はない譯です。しかしそれかといつて、平時から極端に平和產業を長縮させる意味では毫もありません。次の財政金融計畫と關聯し、平時にはこれ等の生產品を輸出して經濟上の要求を充足することも絕對に必要です。

ここに注意せねばならぬことは、この計畫の樹立に當りましては、多大の資源と工業力とを要する關係から、兎角これ等の力が不足を感じ勝ちで、殊に持たざる國に於て然りであります。

ですからこの種の國では平時からの政策によつて、生產力の增進を計ると共に、勢ひ平時貯藏量を多くするより外ないのですが、若しこれに反し甚だ賴みにならぬ戰時の外國輸入力に紙上の信賴を置き、これを計畫の基礎數字とすることは大きな危險性があり、遂には戰爭中途でその企圖を挫折させることにもなります。

かかる資源や生產力の關係から(1)、(2)に述べました外交關係も考慮し、必要な與國を平時から外交工作で確實に持つ必要が起きる場合もあり得る譯です。

第二の方面、即ち積極的に豫想せられる敵國の戰爭遂行力を弱らせる準備としては、その國の國勢、國力を觀察し、その弱點を尙更ら弱らせ、その强味を發揮させぬことが考へられます。その手段は相手國の如何によつて一樣ではありませんが、結局平時では資源の獲得競爭とか、通商貿易競爭とかいふ形で現はれ、戰時では武力による資源の奪取、通商破壞、空爆、或は外交工作等となることが多いでせう。

4、同樣財政及び金融計畫

戰爭には戰費が必要ですが、その戰費も總力戰となりますと、直接武力戰を遂行する費用と國家生存の爲必要な費用との間に判然とした區別が付きにくくなります。

金融上にも戰時經濟となれば大變な變動が起きますからこの對策を講ずる必要があります。

5、思想對策の要綱

戰爭の遂行力は精神と物質との兩方面の力の總和で成り立ちますが、最後に物を言ふのは精神力でありますから、戰時の思想對策は極めて重要なものです。

フォッシュ元帥の有名な言葉で、勝ち戰さとは自ら勝ちたりと信ずることなり、とありますが、總力戰ではこれは全國民にもあてはまるものでせう。

精神力も彼我相對的のものですから、我が國民精神の强化とともに、相手國の精神を弱體化することが必要です。結局思想對策にもこの兩方面があり、現世界大戰でも各國共にこの二方面に亘り大童の有樣は見られる通りです。

この對策計畫に當つて必要なことは、彼我の國民性に通じてその實際に適應すること、戰爭遂行の現狀つまり戰況と精神とは相互に交換作用のあること、精神と物質とは切つても切れぬ關係のあること等でせう。

6、其の他國家生存の爲必要なる對策の要綱

戰爭そのものが既に國家の生存を賭して行はれる傾向が現代の總力戰では益々强くなりましたことは屢々述べた通りです。しかし戰爭は國家の生存を維持發展させるために行はれることも現實としての眞理であり、そこに本質上矛盾に似たものがあるのは止むを得ぬことです。

從つて戰爭中と雖も國家生存のため最小限度の要求は、戰爭遂行上からも絕對に必要です。この二つを如何に調和し、國家總力の均衡を如何に保つかは、愼重に考慮し、平時から計畫すべき重大なことです。

第六節　戰爭計畫策定機關の實例

私は前節で常識的に戰爭計畫の輪廓を描きましたが、扨て一體かかる重要で且つ廣汎なものを如何なる機關で策定するかといふ疑問を持たれるでせう。

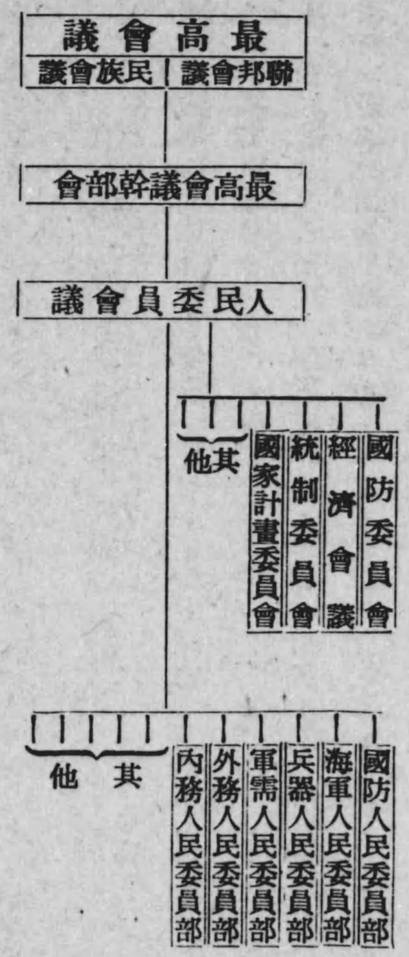
これは現代戰が總力戰となれば當然起るべき新しい問題です。前世界大戰以前には各國になかつた新しい要求が起きて來たともいふべきでせう。そしてこの目的を達成するにはどうしても平時から政治と軍事との密接な連繫の下に行はれることの必要は、萬人が認める所でせう。

然るに政治と軍事との關係は世界各國共に國家成立の最も根本的な問題ですから、その國の成立の歷史なり事情なり傳統なりによつて一樣でありませんから、この策定機關の設定法も、各國に共通する理論は前述した位の所で、その外に理論を立てて見ても益のないことです。又これ等に關する詳細なことは國防國家論、軍政論等に讓りまして、現代戰爭論では深

く立ち入ることを避けますが、序ですから實例としてソ・佛兩國のことを、ごく單簡に述べます。蓋しソ聯は獨裁的色彩の濃厚な國ですし、佛國は共和政體ですから、丁度反驛的な國柄のものを比較することも、實例としては有益と考へたからです。

一　ソ　聯

ソ聯のことも從來公表されたことを基礎として述べますから極めて單簡ですが、大體次の樣です。



最高會議は聯邦會議、民族會議の二院から成り、年二回召集せられ、國家權力の最高機關として一切の權限を行使します。

最高幹部會は最高會議閉鎖中その權限を行使することになつてゐます。

人民委員會議は各國の內閣に相當し、その下に三十數個の人民委員部がありまして、これが各國の各省に相當します。その外、圖示しました樣に、各省の外に內閣に直屬する國防、經濟、統制、國家計畫等の委員會があります。

獨ソ開戰前は最高會議議長はカリーニン、人民委員會議長はモロトフでしたが、開戰直前スターリンが自らその局に當ることが公表せられました。

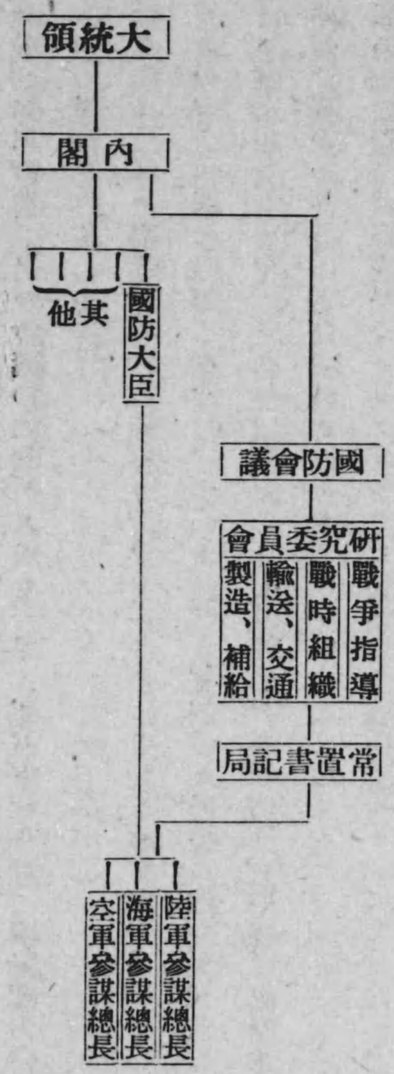
扨て平時ソ聯に於て、戰爭計畫が如何なる機關で策定されるかは明らかでありませんが、前記の表によつて想像しますと、人民委員會議（內閣）に直屬する國防、經濟、統制、國家計畫等の諸委員會が主として起案し、これを人民委員會議、最高會議で決定するものと考へられます。

つまり戰爭計畫の大方針はスターリンが決定するにしても、その具體化は內閣に直屬する

各省外の一機關を以てこれに當てることになります。尤もこの直屬の諸委員長の顏觸れは各省長官の主要人物ですから、恐らく委員も同樣專任者の外に各省の有力人物が兼任してゐるだらうと察せられます。

二　佛　國

佛國の政體は、大統領が文武の大權を握つてゐますが、これは名のみで、事實の權力は內閣にあり、統帥權も內閣に隸してゐます。そこで大體次の機關があります。



戰爭計畫は國防會議で策定されます。國防會議は每年四月、十月の二回開會され、その議長は首相ですが、時として大統領自らこれに當り、首相は副議長となることもあります。議員は外務、內務、大藏、國防、公業、植民相の外、戰時の國防軍總司令官、陸・海・空軍司令官も列席しますが、これ等の司令官には決議權はありません。

研究委員會の編成は、首相代表、各省代表各一、警視總監、陸・海・空軍參謀總長、陸・海・空軍作戰部長、書記局長たる將官から成り、四つの委員會に別れ、戰爭計畫案を作成して國防會議に提出します。

書記局の編成は首相が決定します。多くは各省の局長級及び陸・海・空軍の關係者が任命されます。書記局は、調査材料を蒐集して研究會に提出し、又國防會議の決議事項を關係各省に通達して、その實行を要求することになつてゐます。

以上ソ聯と佛國の機構を比較しますと、ソ聯には佛國の國防會議に比すべき統一機關がなく、內閣に直屬する諸委員會があることが目立ちます。しかしそれは形の上の差でありまして、事實ソ聯では蔭の人スターリンの獨裁で決せられますに對し、佛國では七年每に代る大

統領は實權を持たず、殆んど半年毎に交代する內閣にその實權がありますから、戰爭計畫の永續性、確立性は殆んどないといつても宜しい程で、これは現世界大戰に於ける佛國敗戰の一つの大きな原因となつた樣です。

第七節　戰爭計畫と高度國防國家

戰爭計畫の內容、その策定機關の組織等が各國により一定せぬことは屢々述べました。

しかしその內容が國家の最も重要な機務に屬し、又それが文武の兩方面に亘る關係上、その策定機關が內閣それ自體でないことは各國に共通してゐます。

然るに計畫の內容を見ますと、これを單に計畫として金庫に藏つて置くだけでは何等策定の意義をなさず、所謂戰爭準備の見地から、平時よりそのうちの幾許を實行するかが最後に殘されてゐる大問題です。

そこでこの計畫と、平時施設との關係を律することが一番必要で、その結果は所謂、國防政策、外交政策、產業政策、財政政策、教育政策、厚生政策等々となつて現はれて來る譯でありまして、概ね各國ともに內閣の任ずる所でせう。

戰爭計畫策定機關中には各國とも內閣の主要な顏觸れが入つて居ますから、實行に當つても大した摩擦は起きぬ譯ですが、國際關係の平靜な時代に、物質上及び精神上多大の犧牲を忍んでこれを實行に移すといふことは、一般民衆が國防に深い理解がない限り、現代の樣に民衆の擡頭傾向の深い時代には至難の事です。蓋しこの計畫の一部を平時から實行するには多大の經費を要する上に、民衆生活の上に形而上下に亘つて異常の要求をせねばならぬことになります。然るに此等の政策を實行するには多くの國では、形こそ色々ありますが、民衆代表者の會議の贊成を必要とし、假令代議制度の承認を必要としない國でも、民衆が快くこれを受け入れぬ限り國內の不平が爆發する虞があります。

それですから根本の問題としては國民一般の教養を高め、現代の世界情勢をよく諒解せしめ、國家あつての個人であり、國家目的が結局國民全般の爲であることを納得させ、國民は國家に奉仕し國家は國民の福利を計るといふ密接不可分の關係を教育することが第一でせう。

しかし事實を見ますとこれだけでは不充分で、國家の須要な位置に立つ人々は率先國民に

先だつて範を示し、國民一般も亦節度ある行動をとり、一致結束する雰圍氣を作ることが、理論上からも歷史上からも必要と認められませう。

この戰爭計畫を高度に平時から實行に移す場合に所謂高度國防國家と呼ばれる譯でして、所謂新興國家、持たざる國では、これは極めて必要缺くべからざることです。つまり、適正な戰爭目的の下に、よい戰爭計畫が策定せられ、そのうちの重要な施設が平時から着々と實行されましたならば、この國の國防力は充實し、その主張は平時の外交交渉によつて貫徹せられる公算が多く、萬一無暴な國が開戰を挑んで來ても、赫々たる戰勝を以てわが目的を貫徹することが出來る筈です。

第八節　戰爭計畫の豫測と修正

戰爭計畫は客觀的の情勢判斷に據り、主觀的に戰爭目的を定め、この二つの條件の下に策定される譯です。それ故、戰爭計畫は當然將來何年位先きを目途として居るかが定まる譯ですが、この目途をつけることは甚だ主要で且つ困難なことです。

理論上からすれば、正鵠な情勢判斷に基づき至當な戰爭目的が定まりさへすれば、この計畫の豫測は着々的中して、平時の施設により內には國力充實し、外には國交の陣營備はり、國家は相手國が無暴でない限り、所謂戰はずしてその戰爭目的を達成し、隆昌の一途を進み得る筈です。

しかし現實となりますと、中々世界の情勢は一日として靜止することなく變轉し、殊に現代の樣な時代では尙更らですから、不測の變化が突發することは避け難いことです。特に相手國が有爲の民族國家ですと、敵もさるもの中々我が思ふ壺にはまらず、彼れ獨自の計畫によつて、着々として世界情勢を主動的に變化させる虞が充分にあります。

勿論この樣なことは豫め情勢判斷で正しく考慮すべきはいふ迄もないことですが、競爭が相對的である以上、豫期せざる變化も亦止むを得ぬことです。

かかる變化に對應する爲、佛國では年二回定期的に國防會議を開くことになつてゐますが、各國ともに少くとも年一回位はこの種の檢討をしてゐる樣です。勿論必要があれば臨機に開會することも當然です。

他方國內的には當局者の交代といふ厄介なことが起ります。交代が行はれても情勢判斷や戰爭目的に異論がなければ大したことはないのですが、人々により見る眼が異ればその眼底に映ずる世界情勢も異つた映像に見えることはあり得ますし、況んやこれに基く戰爭目的となれば主觀的のものですから猶更ら變更があり得る譯です。

右の樣な內的、外的素因によつて戰爭計畫の豫測が變化することは、各國ともに多少ともに止むを得ぬ現狀です。

そこで戰爭計畫の修正或は變更といふことが問題となります。

何れにしてもその變化が小さな場合には小修正で事足りる譯で、各國ともに概ね年一度位定期的にこの種の小修正を行ひますが、大きな變化に對處することは大そう重要で且つ困難な仕事です。戰爭目的の變更といふ樣なことは國策の變更ですから愼重に考慮せらるべきことで、これは交代者の政治道德性に訴へるべきことでせう。

戰爭目的に變りはないにしても、情勢の變化に應じて、計畫の一部修正といふことは當然考へられることです。つまり武的、文的準備の到達すべき目標は變りはないとしても、平時實行すべき年度割を變更して計畫の促進を計るとか、或は情勢に應じて實行の細部を修正するとかの必要があることです。これは所謂政策の變更に屬することで、別に驚く程の事ではなく、現代の樣に變化の多い時代では當然必要とさへ認められませう。

何れにしてもこの變更乃至修正は、その原因となるべきものが確乎として存在する以上、躊躇することなく斷行すべきであり、又反對に、原因が曖昧模糊として不明であるに拘らず人的の感情が主となる場合には、徒らなる變更は極力避けるべきです。

然るに現實に歷史の跡を顧みますと、改正すべき原因を判然と認めながら、この種計畫の影響する所が重要且つ廣汎なのに顧み、所謂行き掛りに捉はれて改正の勇氣を缺くこともあります。現世界大戰前に於ける佛國の如きはその好適例ではないでせうか。又甚だ不明確な動機からこれが改正の行はれることも想像されますから、此等は當局者の大いに注意すべきことです。

他方積極有爲な新興國家では、自然將來に對する希望が明確でありますから、戰爭計畫の豫測も自主的に萬難を排して實行し得る可能性が多いのに反し、現狀に甘んずる國ではどう

しても受動的で、この種の計畫の不變性が乏しいのは止むを得ぬことで、これこそ所謂自然の大法則が行はれる現實の姿と見るより外ないでせう。

第三章　總力戰の實行

第一節　戰爭指導機關の必要

戰爭計畫がよく出來てゐれば、戰爭の實行は計畫通りやるのだから、大した苦勞はなからうとは理論上一應尤もですが、事實に於て戰爭の實行が、計畫以上に重要なものであることは、實に現代の總力戰が深刻にして、絶對戰爭に近づく傾向からもよく肯けることです。

蓋し計畫は、どうしても我が豫期する情勢に應ずる對策となり勝ちで、あらゆる不測の變を慮つてこれに對する準備をすることは、どんな國家の力でも出來ぬことでありますから、計畫とは大體希望の表現たる域を出でない譯ですが、戰爭そのものが元來彼我の力の相對的問題であり、殊に彼我意志の對抗の絶頂點に達したものでありますから、中々計畫通り、つまり我が希望通りに行かぬことは事實に於て歴史がよく證明してゐます。

しかのみならず、總力戰では、戰爭計畫で既に我々が見た樣に、武力と國力、物質と精神との密接な連繫一致の下に戰爭を實行しますから、これ等を綜合して統一ある戰力を發揮することは大そう複雜です。

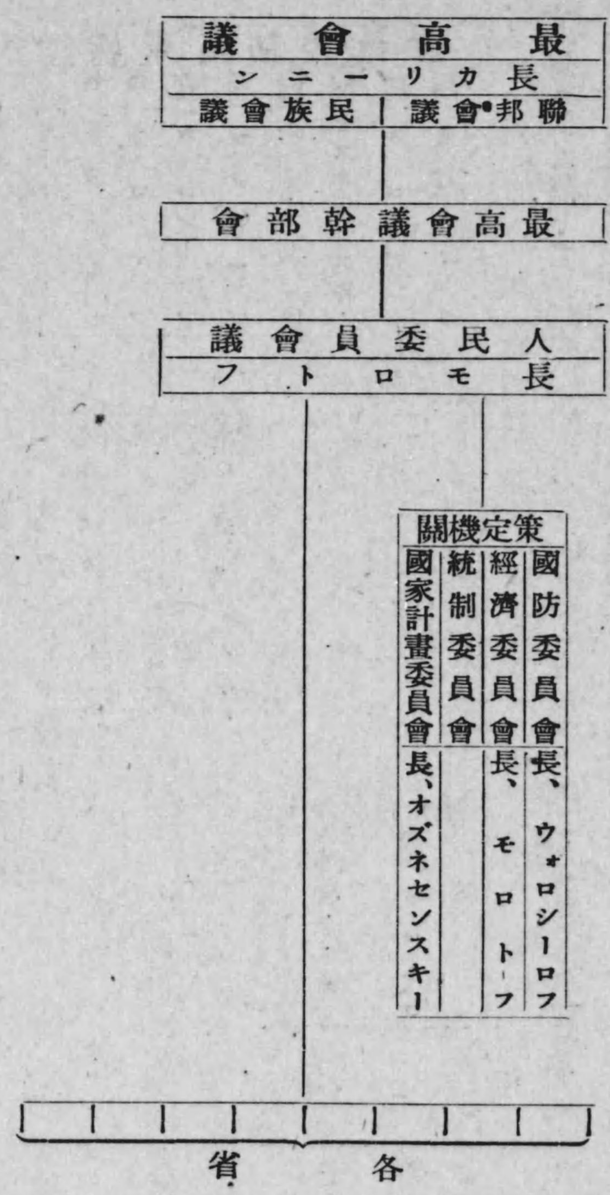
そこで平時戰爭計畫策定の機構が必要なると共に、戰爭實行にも戰爭指導の機構が必要です。これは平時の戰爭計畫策定機構と同樣、各國により各々その趣を異にすべきは當然ですが、兎も角必要なことに變りはありません。そしてこれは當然平時から決定せられ、必要に當つて直ちにその活動を開始し得る準備が肝要です。

戰爭の指導は、戰爭の計畫の樣に時日の遷延を許しません。どうしても戰況に應じ機を失せず斷行すべき仕事が多いのですから、計畫機關に比べて、その組織は一層人數を減じ斷行力をつけることが望まれます。

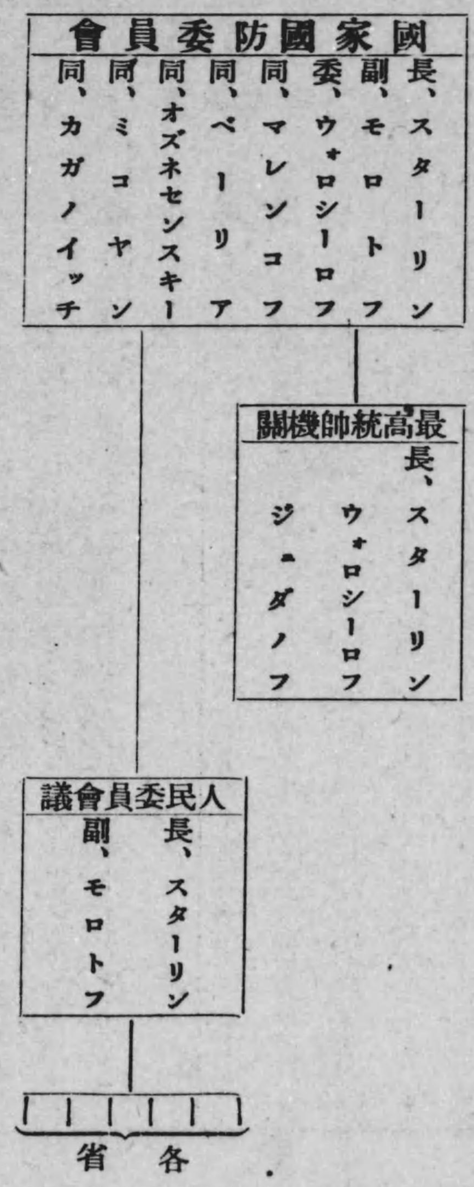
從つて各國ともに戰爭指導機關の人數を減じてゐますが、その根本方針として、文武の兩權を綜合し、仕事の密接不可分關係を律してゐることは同一の樣です。

今一例としてソ聯の平戰兩時に於ける機構を比較對照して見ます。

平時戰爭計畫策定機構



戰時戰爭指導機構



既に前章第六節で述べた様に平時に於ても蔭の人スターリンの獨裁は事實ですが、兎も角機構としては、多數の委員を擁する最高會議、最高幹部會があり、その下に人民委員會議があつて、それに直屬する戰爭計畫策定機關があり、表面から見た所ではそれ相當の順序と階

段を踏んでゐるのです。

又人的機構から見ても、カリーニン、モロトフ、ウォロシーロフ等の人物が當面の長として顏を出して居ることが判ります。

然るに開戰と共に平時の機構を一擲し、國家國防委員會を設け、一切の國家權力をこれに委囑し、ソ聯國民、共產青年聯盟、軍事機關はこれに絕對服從することになりました。又最高統帥機關はいふ迄もなくソ聯全國防軍の統一指揮に任ずることになりました。

又人的機構から見ますと、總ての長はスターリン自らその衝に當り單純になると共に、國家の全權を握る國家國防委員會の人數を小數としました。御存じの様に、スターリン、モロトフは別とし、ウォロシーロフは赤軍の長老、マレンコフは共產黨中央委員會書記局委員、ベーリアは內務人民委員部長、ジュダノフは共產黨中央委員會書記局委員、オズネセンスキーは國家計畫委員會議長、ミコヤンは外國貿易相、カガノイッチは交通相でありまして、何れも平時からソ聯の實權を握つてゐた人です。尤もこの最後の三人は一九四二年二月になつて新たに國家國防委員會に入つたので、これは長期戰に入ると共に米・英の資材援助と國內

交通とが重要になつたことを物語るものでせう。

これを以て見ましても、開戰と共にソ聯が如何にスターリンを中心とし、單一な機構と小數の人物とを以て迅速果敢な斷行力を求めてゐるかが判る樣に考へられます。

第二節　和戰の決定

一　準戰時狀態に於ける戰爭計畫の實行

國際情勢が緊迫して來ます場合には、彼我何れが積極的に働きかけたに拘らず、前章第五節戰爭計畫中の準戰時狀態に對處する準備行動を實行に移すことが絕對に必要です。即ちあの說明中にありました武的及び文的計畫中、準戰時のためのものを實行することです。

宣戰布告をまつて武的及び文的計畫の實行に移るやり方は現代では舊式たるを免れません。元來戰爭計畫は戰爭するかせぬかを見定めるためにも必要なもので、古來戰はずして勝つは勝の最上たるに變りはないのですから、平時に於けるわが情勢判斷適中し、戰爭計畫も亦至當に作られてゐるならば、この準戰爭體勢の實行により、相手國は形勢の不利を悟り我が主張に聽從し、無血で我が目的は達成される公算が多いのです。

勿論この計畫實行により多くの經費を要し、國家生活の全般に亘り多くの犧牲が既に要求されることは覺悟せねばなりません。それ故にこそ、當局者中にも國民の中にもこの處置を躊躇する氣分が起るのは豫想し得ることです。しかし若し無血にして我が目的を達成した場合、或は又開戰となつても、これによつて戰爭が順調に速かに解決出來るとしたら、この小さな犧牲によつて、誠に大きな成果を得る譯ですから、深く考へねばならぬことです。

以上述べました理論を地でいつたものにかの一九三八年二月獨逸の行つた墺國併合、同年十月のズデーテン・ドイツの割讓、翌一九三九年三月チェコの併合、スロバキアの保護領化があります。この事實はまだ生々しいもので、今ここに詳しく述べる必要もありますまい。結局ナチス獨逸が正鵠な情勢判斷の下に明確な目的を定め、これに應ずる戰爭計畫を策定して平時から着々準備を進め、緊迫した情勢に應じて決然たる準戰時體勢に移り、水も漏らさぬ準備を完整したため、遂に英佛兩國も泣き寢入りの外なかつたのが眞相でせう。つまり戰はずして勝つた好例です。

獨逸は又一九三九年八月波蘭問題で同様の主旨で、準戰時體勢の實行と共に、英佛との交渉を始めましたが、今度は英佛共に面目上遂に開戰を決定しました。しかし獨逸は戰爭計畫が適正でありましたから、忽ち電擊的に波蘭作戰を終了してその目的を達成し、次で一九四〇年六月には佛國の降服となりました。

これを見ても戰爭計畫の重要さと共に、準戰時狀態に於ける戰爭計畫一部の實行の必要なことを明らかに知ることが出來る樣です。

二　情勢判斷の必要

歷史上過去を眺めますと、和戰決定時に於ける一國の客觀的立場は次の樣になりませう。

1、戰爭計畫に豫想した通りの情勢となり、わが優勢な立場が明らかで、相手國が戰はずして我が主張に屈服する場合

2、戰爭計畫の豫想が外れ、なんとしても我が劣勢が明らかで、遂に涙をのんで一時相手國の主張に屈從する場合

3、概ね戰爭計畫豫想の情勢であるに拘らず、相手國が聽從せず開戰となり、大體好條件の下に開戰となる場合

4、概ね戰爭計畫の描いた情勢に遠いけれども、面目上感情も手傳つて、遂に不利を忍び開戰となる場合

しかしこれは客觀的のことでして、當事國として事件の渦中にあるものは、中々一と通りの努力ではこれ等の客觀情勢を把握し得ぬことは十分肯けることです。そこに戰爭計畫の一部實行と竝行して冷靜な情勢判斷の必要が起ります。以下簡單にこの情勢判斷につき研究しませう。

1、外交關係

現代の國際紛爭は世界的に影響を與へますから、愈々紛爭となつて見ると、急に外國の態度が變つたり明らかになつたりします。武力的に、資源的に、又經濟的に、長短相補ふ與國を持つことは、彼我共に極力努める所でせう。

一方又紛爭當事國としては、我の欲する所、敵の主張する所をよく究明して、その解決法を考慮せねばなりません。

以上二つの努力は理論上は容易さうに見えますが、人間は感情の動物とさへ言はるる樣に、事件の渦中に入りますと中々容易のことではありません。

その適例は前世界大戰勃發時の墺國外相ベルヒトールド伯に求めることが出來ます。彼はセルビヤの一青年によつて、墺國皇太子が暗殺されるや非常に激昂し、セルビヤを攻略してその領土の一部を占領し、バルカン政策に一歩を進める好機會と認め、直ちに開戰を決心しました。

彼は對塞開戰を決し、到底塞國が承諾し得ぬ樣な過酷な最後通牒を發し、無理にも戰爭を起すことに決し、その爲獨逸といふ與國の援助は確かめましたが、今一つの同盟國たる伊太利の意思は確かめません。加之塞國との單獨開戰を夢み、塞國側與國の思惑を無視しました。

そこでこの事件にロシヤが介入しましても初めは相手にしませんでしたが、遂にロシヤが動員を始めますと大いに慌て出し、急に非戰論に轉向しましたが、墺國軍部は既に獨逸軍部と打ち合せの上開戰を決して仕舞つたから、遂に收拾出來ぬ事態につき進まざるを得ませんでした。

同樣の事は形を少しく大きくして獨逸宰相ベートマン・ホルウェッヒにも言へます。彼は初め墺國の主張を無條件に支持し、假令佛・露の介入があつても、これは獨逸の力を以て料理し得るから大丈夫と考へ、恐らく戰爭はせずとも主張を貫徹し得るものと判斷し、假りに戰爭となつても勝算ありと考へました。そしてこの事件に英國は中立を守るべしと判斷しました。

これは隨分蟲のよい考へ方で、數年前からの英・佛・露協商政策や、英獨海軍擴張競爭、延ては三年前のアガヂール事件に於ける英國の態度を回顧すれば、かかる樂觀的の判斷は許されぬ筈ですが、そこが人間であり感情が先きに立つて誤りました。元來判斷に當つて樂觀的なことは必ずしも惡いことではなく、極端な悲觀的態度よりは增しでせう。

あれで若し獨逸が勝つて居れば、ベートマン首相は大人物に祭り上げられたでせう。つまり誤ちの功名といふことになつたでせう。

かく考へますと、國交緊張時に於て、外交關係を適正に指導し、その情勢を冷靜に判斷することは事實に於て非常に大きな仕事です。それにつけても日露開戰直前の我が外交を顧み

ます時、冷靜に、愼重に、しかも果斷以て大勢を有利に轉回せしめ、且つ判斷を誤らなかつた我が外交には、我々は滿腔の感謝を捧げるべきだと考へられます。

2、武　力　關　係

武力關係の判斷は、近時各國がその武備の全貌を極秘にしますから、以前の樣に容易ではなくなりました。殊に科學の進歩に伴ふ秘密兵器の性能やその數量、戰法、訓練、及び指揮統帥の精粗は中々平時には判り難いことです。

況んや武力に於て最後に物をいふ精神的要素は把握し難いものです。殊に現代は民族的覺醒の時代であるといつても過言ではない時です。過去の樣に封建諸侯が一人の決斷で、半ば遊戯的に始める戰爭とは時代が違ひますから、現代の事實をよく認識し、敵國民の精神を正當に判斷することは大そう重要なことです。

次には外交關係と相俟つて彼我兩國與國の武力關係につき正當に判斷せねばなりません。これも數上の計算の外に、その結合の程度、協力作戰のやり方によつては數上優勢でも存外弱いものです。甚しきは戰爭中に一方の與國が却つて他國に奔ることさへ起り勝ちです。要するに現代の樣に、一般的に見れば物質文明が變態的に迄さき走る時代では、ナチス戰爭論のいふ樣に、聯合戰爭は利害によつて結ばれることが多く、一蓮托生の味方かどうか怪しい傾向もあるのですから、彼我與國軍の武力關係も大局上この方面の判斷が肝要でせう。

3、其他の國力關係

これは平時から行はれた總力戰準備進行の程度と、戰時發揮し得る國力の地力とに大別し得ることは前章に述べた通りです。範圍が大そう廣汎ですから中々判斷が難かしい。殊に近時各國ともにその國勢の調査材料を秘密にし、嚴重な監視の眼を光らせてゐますから猶更らです。

外交關係と關聯して、相手國の國力上の缺陷から與國を必要とする場合が現代戰では多いのですから、その與國の動向とその國力といふものも充分判斷の基礎とせねばなりません。

前世界大戰の勃發當時、獨逸が敵國側の國力について充分の判斷をせずに、英國を敵側に廻したことは前にも述べました。

當時露國は人口資源上では優れてゐましたが、その工業力の少ない關係から武力戰の遂行

力に缺けてゐました。又佛國は相當の資源と工業力とを持つてゐましたが、人口が不足してゐました。かかる種々の缺陷をもつてゐる國を敵とすれば獨逸の軍備と人口と工業力とを以てしては充分勝算があつたでせうが、英國を敵側に廻し、その資源と、多くの植民地からとり得る人口と、その國內の工業力と、殊に此等を充分に運營し得る世界最大の海軍力とを敵側に廻しては、假令開戰當初陸上で一時的に獨逸の優勢な時代がありましても、遂に長期戰となれば、次第に獨逸の敗勢が濃厚となるのは充分豫測し得た筈です。

結局獨逸は短期戰爭で勝算ありと見たことにも誤算があつたのですが、この國力關係についての判斷に大きな誤りがあつたことも敗戰の重大な原因でせう。

三　開戰條件の成否と和戰の決定

前項の情勢判斷は、換言すれば第三章第五節の(2)で述べました開戰條件が成り立つや否やの檢討をすることです。

理論上からすれば、和戰の決定に際しては、平時愼重に檢討した開戰條件が成立すれば戰爭を決し、然らざる場合には隱忍自重せよといふ一言につきます。

しかし事實に當面すると、決してしかく簡單に行かず、そこに多大の苦心と重要な決斷とが伴ふ譯です。

大體客觀的に見て、一國の開戰條件が豫め至當に決定せられ、しかもそれが現實に安々と成立する樣な場合には、相手國は反對に開戰條件が成り立たぬことになりますから、この國こそ隱忍自重して一時的にもせよ相手國の主張に聽從して戰爭は起きぬ譯です。

この適例は一九三八年九月十五日ベルヒスガーデン、廿三日ゴーデスベルグの獨英會談後九月廿九日あの有名なミュンヘン會議で、獨のヒットラー、伊のムッソリニー、英のチェンバレン、佛のダラヂエの會見となり、英佛は結局開戰條件が不利のため、獨逸の主張に屈從し、戰爭は起らなかつたのです。あの際には英佛の軍備は甚だお粗末で話にならず、加ふるにエチオピア戰爭以來、從來兎角一致しなかつた獨伊樞軸が堅實に成立し、英佛側としては到底戰爭は出來なかつた。殊に賴みにする米國の態度が煮え切らなかつたので益々以て戰爭は出來なかつたのです。

これに反し、開戰條件が充分に成り立たない際にも直ちにあきらめることなく、何んとか

してこれを急場のうちに成立させ様と努力することも必要のことです。又相手國としては極力この敵國側の努力を妨害し、その開戰條件を不成立に終らしめ様と計ることも當然です。そこに彼我入り亂れての必死の努力が行はれます。所謂これが戰爭準備行動の絶頂に達した時で、若しこの結果開戰となれば歴史家はこの努力を戰爭の一部と見做すかも知れず、若し平和のうちに片がつけば、これを戰爭といふ人はないでせう。

ですから理論上からは、この第二節和戰の決定は、第四章の戰爭實行に入れるよりは第三章の戰爭準備に入れる方がよいでせう。

この激しい兩敵國の努力を最もよく物語るのは、まだ生々しい事實ですが、一九三九年八月現大戰勃發前の獨逸對英佛の態度に見ることが出來ます。

この事實はまだ餘りに生々しくて戰爭はまだ繼續中ですから、歴史的に批判することは出來ませんが、事實は嚴肅な教訓を後世に投げかけるものと見られます。

一九三九年八月の情勢で戰逸の戰爭目的、開戰條件がどうあつたか、又英佛側のそれがどうあつたかは別として、双方の努力の跡は現實として嚴然たる過去となりました。

あの場合双方に於て最も關心を拂つたのは米國、露國、及び日本の三大强國のことでせう。獨逸側としては米國は中立にする程度で滿足し、日・露兩國に最大の關心を拂ひました。これに反し英・佛兩國は日本に對しては單に中立にする程度で滿足し、露・米兩國に最大の關心を拂ひました。當然の結果として露國が双方から引込み運動の對象國とならざるを得なかつたのです。

即ち一九三九年四月十四日英外相と駐英ソ聯大使の會談、翌十五日のソ聯外相と駐露英國大使との會談、六月中旬英外務省中歐局長の露都行き、ソ聯が英・佛に對してなした「バルト沿海三國に對する領土共同保障及び援助」要求、これに對する英佛の逡巡妥協交渉、八月英佛兩國軍事使節團の露都行きから、八月廿六日その退去まで、英・佛側は極力ソ聯引き入れを策しましたが成功しませんでした。

これに反しナチス政府は從來主義上共產政府と相離反し、日・獨・伊の防共協定までも結んだのですが、必要の前には斷然主義上の問題を捨て、一九三九年五月には從來批准しなかつた露獨中立條約を批准し、又盛んに對露クレヂットの設定をやつて經濟上の親交を結び、

更らに隱密の裡に交渉を進め、八月廿三日には獨ソ不侵略條約の締結に成功しました。

結局この事實は英佛側がイデオロギーや小局の利害に拘泥してソ聯抱き込みに失敗したのに反し、獨逸は必要の前には多少の犧牲を忍んで、露國を好意ある中立國とすることに成功し、以て開戰條件に滿足なる解決を得た好適例です。

扨てそれならばさきに一九三八年十月、獨逸に屈從した英佛兩國が、翌年八月僅かに一年後しかも露國引き入れに成功しないのに何故に開戰を決意したか、この一年間に英佛側では開戰條件の改變があつたのか、又なかつたのに徒らに感情に捉はれて、不利の開戰條件の下に開戰したか、これは充分檢討すべき大問題ですが、まだ歷史となるのには、充分の條件が揃ひませんから、何んともいへぬでせう。つまり吾人はまだ充分の事實を知り得ぬからです。しかし英佛殊に佛國は露國の參加なきに拘らず、賴むべからざる米國の參加を空賴みにし、且つ又感情が大きく働いて不利な開戰條件を顧みず無暴な開戰を決するに至つた樣で、丁度前世界大戰に於ける墺國の態度を見る樣な氣がしますが、何れにしてもその結果一時的にもせよ、佛國は大敗を喫して歐洲第二流國になることになりましたのは、本節にいふ所の開戰條件の成否と和戰の決定なる重大事項につき好個の教訓を與へるものと信じます。

第三節　戰爭の遂行

一　一般の觀察

總力戰の遂行は本論の樣に平時から總力戰準備が完成し、戰爭計畫が出來てゐ、且つ開戰條件が充足されるならば、大體計畫通り實行することが出來る筈です。それだけに私は第三章總力戰の準備に相當の紙數を費した譯です。

從來兎もすれば戰爭實行として說かれたことは、その重要な部分を準備の中で私は述べたことになります。

勿論客觀的に考へれば、戰爭計畫の適正性にもある限度がありますから、平時の計畫通り戰爭を遂行することは事實困難なことですが、現代戰ではこの計畫性が從來に比し大そう重要となり、是非やらねばならぬ傾向となりましたことは否定出來ぬ事實であります。

從來戰爭の遂行は武力戰の遂行と、これを維持推進する國力戰との方面から說かれること

が多かつたのですが、私は既に戰爭準備の章でこの兩方面のことを相當に述べましたから、本節の記述は少し趣を變へまして、計畫に對する現實の作用といふ方面から說明することにします。

殊に私は別に現代用兵論を豫定して居ますから、武力戰の詳細はこれに讓ることにして省きます。

扨て現代戰の遂行について大觀しますと、如何に平時の計畫が周到であつても、俗にいふ勝敗は水物であるといふ本質に變りはありません。ただ適正な計畫によつて、この水物性を出來るだけ確實にする程度の問題に過ぎぬ樣です。殊に戰爭計畫の樣な重要で且つ機務に屬することは、當局者の交代、國民精神の弛緩、情勢判斷のむつかしさ等の原因によつて、存外閑却されたり或は放任される傾向のあることも既に述べた通りですから、猶更ら戰爭遂行は事實に於て重大なことです。

殊に第二章第三節で述べました總力戰準備の三大傾向に就て見るも、敵、味方は通常各々異つた傾向に從つて戰爭を實行しますから、例へば平時の準備を完全にして、短期戰爭を欲するものも、相手國が短期戰を欲して、急激にぶつかつて來て呉れれば良いのですが、反對にその地力を以て長期戰に逃げ込み得ることもあり得ます。

又反對に長期戰を計畫する國が、その地力を發揮し得る前に、敵國の短期戰爭の壓倒的威力に押され、遂にその總力を發揮する前に敵の力に壓倒される事態も起り得るのです。

何れにしましても、この樣に計畫に狂ひが生れることが、戰爭遂行上最も重大な問題です。現實の問題としては程度の差異こそあれ、この種の努力が戰爭遂行の實質であると申しても過言ではない位でせう。

從つて戰爭遂行間、當局者が大小の差こそあれ、何等かの政策變更乃至は武力戰計畫に多少の變更を斷行するのは、戰爭の本質上當然とも考へ得ることです。然るに歷史を見ますと、かかる際結束の不充分な國民や或は一部の野心家は、これを當局攻擊の材料に惡用して、政變を屢々行つたり、或は統帥部の改變を要求したりすることが、多く現はれてゐます。これは絕對に惡いとも言へぬことでせうが、大體本質上當然起るべきことを、ただそれだけの事實を以て當局者を攻擊するのは多くの場合當らぬ仕業で、寧ろそれは新しい對策の可否に向

けらるべき問題でせう。

これとは反對に、平時から計畫されたことを、當事者が斷行力に乏しくして實行に移し得ないことも歷史上屢々見る所の、戰爭遂行上注意すべき問題です。

これは本質上から見ても良いことではない樣です。一體開戰後急に情勢が變化したりや否やの判斷をすることは困難でありますが、その判斷の結果從來の計畫を一意斷行するか、或は又新判斷に基いて新しい對策に出るかは當然何れかに決定せねばならぬ事です。しかるに從來の計畫も斷行せず、新對策をも講ぜぬのは、これは意志の薄弱なのか或は責任の重壓に恐れを抱く躊躇かに歸着すべきことでせう。これも亦歷史上屢々見るところの現象で、かかる當局者は當然攻擊の的となるべきですが、歷史の跡を見ると存外これが放任されてゐる事があります。これは國民の一致結束が不充分な國、或は戰爭の起因即ち戰爭目的が國民の切實な要求から外れてゐる國等ではよく起る現象です。

以上、現代戰爭の遂行を大觀しましたから、この見地に基いて研究を進めることにしませう。

二　戰爭計畫の實行と變化

愈々開戰に決すれば、最早戰爭計畫の全面的實行より外にない譯です。今まで鬱積してゐた全國力を擧げて、殊に武力戰が主體となり、他の國力は擧げて武力戰を援助し、その力を增進させる爲に用ひらるべきです。

速戰速決を方針とする國では殊に戰爭の立ち上りが肝要です。そこで現代戰に於て立ち上りを有利にする爲一つの傾向が生れました。所謂電擊戰爭といはれるものです。これは作戰的にも戰爭の遂行間屢々行はれますが、それは作戰論にゆづり、ここにいふ電擊戰爭とはもつと廣い意味の戰爭指導上から見たものです。その特色は開戰時に於ける外交交涉の時日を極めて短縮し、或は全く外交交涉を省き、相手國の戰備の整はぬうちに機を制して開戰し有利な條件の下に戰爭を遂行せんとするものです。

これを事實に徵しますと、一九三九年九月一日の獨波戰爭、一九三九年十一月廿九日の露芬戰爭、一九四一年六月廿二日の獨露戰爭等が擧げられます。これ等の事實は餘りにも最近のことで一々詳しく述べる必要もないことですから極めて簡單に觀察します。

獨逸は一九三八年二月の墺國併合に當り既に全軍的な動員を完了し戰備を整へてから斷行しましたが、引き續き同年十月のズデーテンドイツの併合、越えて翌三九年三月のチェコの併合と、引き續き戰備を完了した儘これを斷行しましたから、世人はその後の獨逸の行動について、何かしら豫感は持つてはゐましたが、何をやるか判斷の資料になるものはない程に迄戰備を完了しきつてゐました。

同年八月頃には波蘭に於ける獨逸人の待遇に關して種々の小さな事變が頻出し、獨逸の國論が沸騰して獨逸當局の激越な演說や警告があり、獨波兩國間に若干の外交交涉が行はれましたが、歷史的に此の種の外交交涉は從來も屢々あつたことですから、世人は今直ちに開戰となるものとは餘り考へなかつた樣です。

殊に當の波蘭は賴み難き英佛の援助を期待して戰備は甚だ不充分でした。

然るに獨逸は八月卅日突如十六ケ條に上る最後通牒を發し、二十四時間を期限とし波蘭の解答を求めました。當の波蘭は元より、英佛もこの回答は到底事務的に不可能であるから、期限延長の必要を力說し、且つ又國際慣例上恐らく獨逸も延長に贊成するだらうと空賴みをしましたが、獨逸は斷乎として豫定通り八月卅一日夜半即ち九月一日から、既に數ケ月前よりの準備によつて電擊的に開戰しました。

このとき波蘭はまだ全軍の動員が完結せず、從つて國軍も亦戰略開進を終らぬうちでしたから、九月一日早朝よりする獨逸空軍の爲鐵道を破壞されて軍の展開、動員の遂行が不可能となり、殊に獨逸空軍の波蘭通信施設爆擊で、政府の機能や統帥部の指揮不能となり、全然急襲を受けた形になりました。

殊に政略的に獨・露間の諒解が出來、九月中旬から波蘭は露軍の侵襲をも受けましたから全く抵抗力を失ひ、早くも一ケ月にしてこの戰爭は獨逸の完全な勝利となりました。これは獨逸として、英佛の援助が早晩具現するのを慮つて波蘭を各個に擊破するために、必要止むを得ず外交交涉を打ち切つて行つた電擊戰爭と見られます。

露芬戰爭はそれ程ではありませんが、これ又電擊戰爭たるに變りはありません。

これより先き獨波戰爭とともに露國も亦有力な國軍を動員し、九月中旬から波蘭東方國境を侵し大體無血占領の形で東部波蘭を略し、九月廿九日の獨露協定によつて波蘭分割を斷行

しました。

九月廿八日には兵力を以てエストニアを威壓して事實上これを併合し、十月五日にはラトビア、十月十日にはリトアニアを同樣の手段で事實上併合しました。この間國內では益々動員兵力を增强します。

十月七日ソ聯政府は芬蘭代表を露都に招致して交涉を始めましたが中々埒があかず、この間北歐三國たる芬蘭、瑞典、諾威は種々對策を講じましたけれども何等決定に至りません。

一九三九年十月頃の北歐三國は極めて機微な環境に置かれてゐます。即ち英獨戰爭に當り彼等は政治上、軍事上双方から注目されてゐる關係上、その何れにつくべきやを決し得ず、一方露國の侵襲に對せねばならぬ譯ですから、三國の協同動作が成立し得る筈はまづないでせう。從つて芬蘭としても露國が果して獨又は英の諒解の下に白晝公然と芬蘭を侵すや否やを疑つたのも無理はありません。

十一月廿八日露國は露芬不可侵條約の破棄を通告し翌廿九日開戰しました。芬蘭は決して波蘭の樣に急襲された譯ではありませんが、大局から見て戰備不充分で遂に翌四〇年三月十三日屈辱的媾和條件を承服しなければなりませんでした。

露國が芬蘭處理につき、不徹底たらざるを得なかつたのは決して芬蘭の力ではなく、獨・英等の强國に對する遠慮から出たもので、寧ろかかる環境の下にこれだけの成果を得たのは、英・獨兩雄の爭ひを利用し電擊戰爭によつてその目的を達したと見るべきでせう。

一九四一年六月廿二日開戰された獨・露戰爭の直前には何等の外交交涉も行はれなかつたことは獨政府の發表により略明瞭です。

既に四〇年佛國の降服以來、露・獨・新國境の線には彼我の兵力が相當に集結せられてゐましたが、四一年五月獨逸のバルカン制覇以後この形勢は愈々緊張しました。

しかしこれより先き四〇年十二月には獨・露經濟協定が成立したことでもあり、兩國國交の緊張も、兵力の支援による外交交涉により解決されるのではないかと世人は視ました。恐らく露國も獨逸の重大な要求がいつかは來るものと覺悟してゐたかも知れませんが、六月廿二日獨逸政府は兩國が戰時狀態に入れることを通告するに過ぎなかつた樣です。

勿論露國も戰備を忽にした譯でもなかつたのですが、開戰の時期については全く急襲を受

けた形で、當初隨分痛手を受け、これが全戰局に影響することは明瞭です（昭和十六年八月五日記す）。

この開戰形式については、世界のあらゆる國々に於て色々に批評されてゐる樣ですが、私はそれについて意見を述べる代りに、吾人は現實に於て、この種の開戰形式が行はれ、現代戰の一傾向となつてゐる事實を確認し、それから起る各種の事態を率直に且つ愼重に檢討すべきであることを主張したいと考へます。

ナチス戰爭論で、タイゼンは次の樣に述べてゐますから、序に附け加へて置きます。

「戰爭となれば、平時に於ける政治的手段に武力が附加される。これが戰爭である。國家は全力を擧げ、一切の與へられた武器をとつて敵の武裝解除を强行する。從つて戰爭に於ては國家の人的物的總力を、斷乎たる戰鬪決意の下に組織的、根本的に整備し、最低から最高に發展した暴力を以て臨むことは、自己保存のための嚴然たる命令である。中途半端な決意と不充分な武力を以て優柔不斷に行はれる戰爭は、その目的を見失ひ、それ自身既に敗北の萌芽をもつてゐる。

戰爭を人間的に行はんとする努力には大した期待は持たれぬ。かかる努力は却つて生死を賭けた民族間の鬪爭の本然の姿を見誤るものである」と。

これは絕對戰爭の理論上一面の道理を含んでゐますし、又現實に現代戰はかく戰はれてゐる樣に見えます。

以上の樣な開戰形式がとられますと、猶更ら戰爭實行と共に平時豫期し得なかつた事態が起ることは覺悟せねばなりません。そこに計畫の直線的實行と、新事態に應ずる計畫の改變といふ矛盾した要求が起きます。

勿論平時策定する戰爭計畫は、餘りに細部に迄沒頭して、拔きさしのならぬ窮屈なものであつてはならぬのですが、さりとて茫漠として捉へ所のない樣な計畫は、用に立ちませんから、どうしても本質上この問題は起り得る可能性があります。

しかしここに言ふ所の改變は、戰爭計畫の根本となる、戰爭目的に迄及ぶものでなく、戰爭目的達成上の手段としての改變であります。

この矛盾を解決する鍵は、要するに事實の確認といふことでせう。戰爭計畫は我が力と敵